

# PROFILE **M.**

# 2014

**NAGOYA UNIVERSITY**  
Graduate School of Medicine, and  
School of Medicine



**名古屋大学**

医学部・大学院医学系研究科

プロフィール M 2014

# 名古屋大学

## 医学部の理念

---

- 1** 人類の健康の増進に寄与する  
先端的医学研究を進め、新たな医療技術を創成する。
- 2** 医の倫理を尊重し、人類の幸福に  
貢献することを誇りとする医学研究者及び医療人を育成する。
- 3** 医学研究、医療の両面にわたり  
諸施設と共同して、地域社会の医療の質を高めるとともに、  
我が国及び世界の医療水準の向上に資する。
- 4** 医学研究及び医療の中軸として  
機能するために、人的・社会的資源を有効に活用し、  
世界的に開かれたシステムを構築する。



### 医学部のシンボルマークについて

3羽の鶴をあしらったもので、  
それぞれに愛(人間愛)・和(協調)・誠(誠実)を象徴しています。  
これは、医の真髄、医学研鑽の心構えとして  
医師が継承すべきものという意味が込められています。

PROFILE **M.**  
2014 NAGOYA UNIVERSITY  
Graduate School of Medicine, and  
School of Medicine

Contents

PROFILE MのMには、  
Medicine (医学)、私たちの担う  
Mission (使命)、この地域をさす  
Midland (中部) など、さまざまな  
私たちの想いが込められています。

---

02	ご挨拶
05	特集トピックス
06	—— リーディング大学院①
08	—— リーディング大学院②
10	—— 卓越した大学院拠点形成支援プログラム
12	—— 革新的イノベーション創出プログラム
14	—— 大学院教育
16	—— 施設整備
18	—— 若手研究者養成
20	—— 小児がん拠点病院
22	—— 内視鏡トレーニングセンター
24	—— 国際交流の促進①
26	—— 国際交流の促進②
28	沿革
30	歴代医学部長

---

31	<b>教育・研究組織</b>
32	機構図
33	役職員
34	<b>鶴舞キャンパス</b>
36	大学院医学系研究科
36	—— 博士課程
40	—— 研究者養成コース (MD・PhDコース、卒直後コース)
41	—— 連携講座
42	—— 寄附講座
46	—— 修士課程
48	医学部 医学科
49	附属施設
51	<b>大幸キャンパス</b>
52	大学院医学系研究科 博士課程(前期課程)・博士課程(後期課程)
54	医学部 保健学科

---

55	<b>データ集</b>
----	-------------

---

73	<b>施設とアクセス</b>
----	----------------

---



医学系研究科長・医学部長

高橋 雅英 TAKAHASHI, Masahide

名古屋大学医学部・大学院医学系研究科の2014年度プロフィールを発行するにあたり、一言ご挨拶申し上げます。

名古屋大学は、1871年(明治4年)に名古屋藩の仮医学校、仮病院として発足して以来、約140年の歴史と伝統を持つ、我が国で最も古い大学の1つです。名古屋大学は1939年に医学部と理工学部からなる7番目の帝国大学となり、第2次世界大戦後の1949年に新制名古屋大学として再出発しました。

医学部は1997年に医学部保健学科が設置され、医学科と保健学科からなる2学科制になりました。2000年には大学院重点化が完了し、大学院大学として医学系研究科を、基礎と臨床を融合した分子総合医学、細胞情報医学、機能構築医学、健康社会医学の4専攻に再編を行いました。さらに昨年度からはこの4専攻を総合医学専攻という1専攻に再編し、基礎医学領域、臨床医学領域、統合医薬学領域の3つの領域を設置することになりました。統合医薬学領域には創薬研究、臨床医学研究を推進するため、生物統計学分野とトキシコゲノミクス分野という新たな教室を立ち上げたところです。また、統合医薬学領域には名城大学大学院薬学研究科との連携講座、アステラス製薬など製薬企業の協力による産学連携講座、統計数理研究所や医薬品医療機器総合機構との連携講座などを新設し、創薬分野で活躍する人材育成や日本が弱いと指摘されている臨床治験を推進できる人材育成をめざしています。

このような医学系研究科の再編とともに本年6月には医系研究棟3号館が完成し、教育、研究基盤を支える施設整備にも力をいれています。3号館には解剖実習室、組織・病理実習室、ラジオアイソトープセンター、共通機器センターが整備されるとともに、寄附講座や産学連携講座を含む様々なプロジェクト研究のためのスペースが確保されます。上記した統合医薬学領域に新設される生物統計学分野とトキシコゲノミクス分野も3号館に設置され、教育・研究環境の一層の充実が実現できます。

昨年度より医学系研究科が特に力を入れて取り組んでいる課題として、大学院レベルでの国際連携があげられます。2013年1月にはウィーン医科大学、5月にはオーストラリアのアデレード大学にそれぞれ約10名の研究者を派遣し、シンポジウムを行い、交流を深めてきました。11月にはドイツのフライブルグ大学、フランスのストラスブール大学を訪問し、連携について議論してきました。その成果として、本年3月にアデレード大学とフライブルグ大学の学長、副学長、医学部長らが本医学系研究科に集まり、大学院レベルの交流を促進するための連携協定を締結するにいたりました。今後はこのような連携を米国の大学へも広げていきたいと考えています。

活力ある医学部・医学系研究科をめざし、一層努力していく所存ですので、引き続き皆様の力強いご支援を賜りますよう、よろしくご挨拶申し上げます。



保健学統括専攻長・保健学科長

榊原 久孝 SAKAKIBARA, Hisataka

名古屋大学医学部保健学科は、1997年に、看護学、放射線技術科学、検査技術科学、理学療法学、作業療法学の5専攻を有する全国でも数少ない医学部保健学科として設置されました。その源流は、1894年(明治27年)愛知医学校に看護婦養成所が設置されたことに始まり、100年以上の歴史を有しています。2012年4月には、大学院中心の教育研究組織へと組織強化を行い、大学院医学系研究科 看護学専攻・医療技術学専攻・リハビリテーション療法学専攻として、一層の教育研究の充実を図っています。

現代の保健医療は、高度先進医療の急速な発展、少子高齢社会に対応する保健医療の展開、さらに国際化の進展など大きく変貌しています。次世代の保健医療の展開に向けて、名古屋大学では、将来の保健医療を担うリーダーとなりうる研究開発マインドをもつ中核的人材を育成するとともに、21世紀の保健医療の新たな発展につながる保健医療研究の推進を目指しています。そして、現代の保健医療課題を開拓・解決する研究力開発型大学院教育の展開と、アジア地域の保健医療系大学との連携強化によるグローバル人材の育成強化を図っています。

研究面では、保健医療学の研究拠点を目指して、領域融合研究プロジェクト(①最先端医療に対応する医療技術開発、②一病息災時代の健康維持・増進に関する研究開発、③次世代地域医療・ケアモデル開発)を推進しています。また、「脳とこころの研究センター」や「名古屋大学予防早期医療創成センター」との連携により、幅広い研究プロジェクトの展開を図っています。

人材育成では、がん治療関連の専門医療職を育成する「がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン」(2012年度文部科学省採択)、また多職種連携によるチーム医療推進を視野に入れた本学独自の「トータルヘルスプランナー(THP)養成コース」(2007年度文部科学省大学院GP採択)などにより、次代の保健医療を担う指導的人材の育成に努めています。

そして、グローバル人材の育成では、「博士課程教育リーディングプログラム『ウェルビーイング in アジア』実現のための女性リーダー育成プログラム」(2013年度文部科学省採択)を医学系研究科、生命農学研究科、国際開発研究科、教育発達科学研究科の4研究科連携で取り組み、幅広い視野を持つグローバルリーダーの育成を図っています。また独自に「名古屋一延世大学学術研究交流事業」、「看護臨地実習短期国際交流プログラム」による国際交流も進めています。

卒業生は、医療機関や教育機関で将来を担う中核として活躍しています。保健学関連の教育研究の一層の発展に尽力し、現代の保健医療の進歩に貢献したいと考えます。

鶴舞キャンパス 医系研究棟 1号館・2号館



鶴舞キャンパス 医系研究棟 3号館



医学部附属病院



大幸キャンパス 保健学科本館



# 特集トピックス

## 「世界最高水準の卓越した 研究・教育拠点の形成を目指して」

名古屋大学医学部・大学院医学系研究科では、国際的な研究大学としての社会的な責任を果たしていくために、国際的な人材養成の取り組みを一層加速させるとともに、世界最高水準の学術研究推進の基盤づくりとして、分野融合研究や大型プロジェクトの推進、基礎から臨床に至る研究体制・環境の強化、研究成果の社会への還元を目指して、様々な取り組みを展開している。

そのなかで、最新の取り組みを紹介する。

・リーディング大学院①	06
・リーディング大学院②	08
・卓越した大学院拠点形成支援プログラム	10
・革新的イノベーション創出プログラム	12
・大学院教育	14
・施設整備	16
・若手研究者養成	18
・小児がん拠点病院	20
・内視鏡トレーニングセンター	22
・国際交流の促進①	24
・国際交流の促進②	26

# 『ウェルビーイング in アジア』 実現のための女性リーダー育成プログラム』の発足

副研究科長 医学系研究科 分子生物学 教授 門松 健治

『ウェルビーイング in アジア』実現のための女性リーダー育成プログラム』がリーディング大学院プログラムとして2013年度に採用されました。その秋から試行プログラムを走らせ、2014年度10月からは正規学生を迎えてよいよ本格始動します。ウェルビーイングとは「個人の権利や自己実現が保障され、身体的、精神的、社会的に良好な状態にあること」と定義できます。「その実現に資するグローバルに活躍する女性リーダーを養成する」これが本プログラムの目的です(図1下部)。

まず、このプログラムは二つの背景から提案されました。

## 二つの背景

背景の一つはアジアの諸課題解決のためのアプローチの仕方に対する疑問でした。アジアの一員として今後日本が、台頭著しいアジア諸国とより強い連携を構築し、重要な役割を果たすためには何が必要なのでしょう。日本を含むアジア諸国は今でも貧困問題、多様な健康問題、ジェンダー格差などの解決すべき多くの課題を抱えています。これらを研究あるいは行政の分野に落とし込むと環境、健康、食、社会システム、教育といった分野になるのかもしれませんが。これまでもこ

これらの課題に日本・アジア諸国は取り組んできました。しかしながら、そのアプローチは専門家による近視眼的なものではなかったでしょうか?例えば、健康の問題一つを考えても、家庭での衛生教育、食習慣、医療システム、保険システム、公衆衛生、上下水道インフラ、都市計画など複合要因に目を向ける必要があります。医学系研究科で学ぶこと、研究することはそのうちのほんの一部であることに気づきます。これらの課題に取り組むには、「医」「保健」「農」「教育」「国際開発」といった分野の融合が必要であり、そこで鍛え上げられた「俯瞰する眼」が課題解決のためのキーワードになると思われます(図1上部)。

背景の二つ目は日本の女性リーダーについてです。女性活用の指標の一つであるジェンダーギャップ指数をみると日本に女性リーダーが如何に少ないかが分かります。これはアジア諸国と比べてもかなり見劣りします。国と国とのつながりも究極的には人と人とのつながりです。交渉したり、教えたり、教わったり、あるいは尊敬するパートナーがいるからこそ成り立ちます。これは難しい課題解決に際しては殊に重要で、交渉相手の論理性に加えて個人史、人となり、力強さが互いの信頼に繋がり、妥結・解決への決め手になることさえあり

### 解決すべき課題と本プログラムの目的

さまざまな発展段階にある多文化社会アジアにおいて解決すべき課題：

- ◆ 貧困問題
- ◆ 多様な健康問題
- ◆ ジェンダー格差




**本プログラムの目的：**  
**ウェルビーイング** (個人の権利や自己実現が保障され、身体的、精神的、社会的に良好な状態にあること) の実現に資するグローバルに活躍する女性リーダーを養成する

図1 本プログラムの目的および背景

### なぜ女性リーダーの育成が必要か？

女性の活用は日本の長期成長戦略として最も重要な課題

**背景：**

- ◆ 日本では女性の活用が世界的に極めて遅れており女性リーダーは限定的 (ジェンダーギャップ指数：105位/136カ国)
- ◆ アジア各国では女性リーダーを輩出
- ◆ 女性は伝統的に「食・健康・環境」分野に貢献し、次世代育成に中心的な役割をはたしてきた

順位	国名
1	アイスランド
2	フィンランド
3	ノルウェー
60	中国
86	バングラデシュ
105	日本

グローバル化にともない「食・健康・環境」分野におけるアジアでの共通課題の解決が必要であり、企業等のアジア進出・展開が進む現在、アジアの女性リーダー同士のネットワークとパートナーシップを担う人材(女性リーダー)が必要

「ウェルビーイング」に資する「女性リーダー養成」

図2 本プログラムのもう一つの背景



ます。従って女性リーダー育成は日本にとって実に重要な課題であります(図2)。

### どう取り組むか

アジアは人種、宗教、言語、習慣などあらゆる観点から実に多様であり、幅広い文化を持っています。我々日本人がアジア諸国と交わり共生するには、このような総合的な文化を互いに理解することが基本中の基本です。また、上で述べたリーダー同士の個人的な深いつながりを構築する上で欠かせないのが語学を基盤とするコミュニケーション能力です。さらにはリーダーとは何か、現場でなくては体得できない課題・解決策、そのような問題にアドレスすることが重要です。そのために、本プログラムでは基盤教育と実践的教育の2つを柱としてリーダーへ向けた段階的教育を施します。基盤教育は社会開発と文化プログラム、語学、リーダー特論などを特徴として前期課程(大学院2年生まで)を中心に教育します。実践的教育では海外実地研修(図3)、クロスカルチャートーク(図4)などを中心に上級生が下級生を指導する仕組みなども取り入れて実のある実践教育を行います。

本プログラムでは6つのコア能力の総合的習得を目



図3 海外実地研修 ベトナム研修の一コマ：医学系研究科が中心となり、学生と教員がベトナムの医療および農業の現状を視察し、意見交換を行いました。(2013年度試行プログラム)

標に掲げています。すなわち、ジェンダー理解力、実践力、現場力、企画力、俯瞰力、発信力の習得です。おそらく、これらの習得のためには一方方向の受け身の教育では達成は望めないでしょう。従って、自発的な学習がなされる、まさに文化の醸成が大事です。教員と学生、学生と学生の会話によって、明確な志向性が文化としてプログラムに根付くことを期したいと思えます。

### 運営体制

高橋雅英医学系研究科長がプログラム責任者、東村博子生命農学研究科教授・男女共同参画室長がプログラムコーディネータを務めます。医学系研究科(医学、保健)、生命農学研究科、教育発達科学研究科、国際開発研究科に専任および兼任の教員を配置し、この4研究科に所属する大学院生で本プログラムを希望する学生から選抜して教育を行います。さらに海外を多数含む学外からの教員を迎え、実践的教育を実施します。また、大学院2年生から3年生への進級時にquality examinationを施行するなど、能力及び教育効果の判定を常時心がけ、真に「ウェルビーイング in アジア」実現に資する人材を輩出することをゴールとしています。



図4 クロスカルチャートーク：研究アシスタント学生が揃い、互いの国の文化などについて意見交換を行いました。(2013年度試行プログラム)

# 「実世界データ循環学」

「実世界データ循環学」リーディング大学院サブコーディネータ 医学系研究科 神経遺伝情報学 教授 大野 欽司

2011年度から文部科学省が公募を開始した「博士課程教育リーディングプログラム」は、俯瞰力と独創力を兼ね備え広く産学官にわたりグローバルに活躍する次世代リーダーの育成を目的として、専門分野の枠を超えて修士課程・博士課程一貫の大学院プログラムの構築・展開を求めているものです。これはアカデミアではなく我が国産業界からの人材育成リクエストに応える目的で開始されたプログラムです。社会で活躍するグローバルリーダーの育成という要望に対して、名古屋大学医学部は創基以来、優秀な臨床医を輩出しており、十分に社会的な使命を果たしていると自負しております。しかし、臨床医、臨床研究者、医学生物学者の育成のみが我々の使命ではありません。医学系研究科は医学部以外の出身者を修士課程で受け入れ育成をしていますので、我々にも産学官でグローバルリーダーとして活躍する人材を育成する責務があります。

2013年10月に採択された「実世界データ循環学リーディング大学院」プログラムは情報科学研究科を主幹部局、同科の武田一哉教授をプログラムコーディネータとし

て、医学系研究科、工学研究科、経済学研究科を合わせた4研究科が合同でグローバルリーダーを育成することを目的としています。「実世界データ」という耳慣れない単語は、インターネット上の「仮想空間データ」に対する対語です。医療ならびに医学研究では、診療データ、検査データ、実験解析データなど実世界データのみを扱っています。このリーディング大学院プログラムでは、実世界データの「取得」・「解析」・「実装」を学ぶことによりデータを循環させ、さらなる社会価値の創造に結びつけることを目的としています。

実世界データの「取得」・「解析」・「実装」の循環について、最近発展が著しい次世代シーケンサ(next generation sequencer, NGS)を例に使い説明します。我々は、どのようなサンプルをNGSで取得をするべきか、また、NGSが産生をする配列の意味を知っています。一方、他研究科の教員や学生の多くは、我々が持っているこのような知識を持ち合わせていません。同様に、我々は、NGSからデータを取得する工学的な手法を詳しく知りませんが、

## 実世界データ循環学リーダー人材養成プログラム

Graduate Program for Real-world Data Circulation Leaders, Nagoya University

### ■養成したい人材像

工学、情報科学、医学、経済学に跨る幅広い技術群を俯瞰し、それらの組み合わせに循環を見出し、それらを繋ぐことで循環を生み出すことで、社会的価値を創造する産業科学リーダー。

### ■プログラムの特色

- ① 国際自動車サマースクール、G30自動車コースなど、実績ある国際コンテンツを利用した海外学生のリクルート。
- ② 国際的な産業集積地を背景にした、産学連携人材育成(産学官プロジェクトワーク)。
- ③ 場を与え経験を評価する実世界ワーク。
- ④ SNSとポートフォリオシステムを連携させ、学生指導に社会的視点を導入するeアゴラ。
- ⑤ グローバル産業循環を組み込んだ、段階的国際経験と人脈の交換。
- ⑥ 学修履歴をプログラム担当者全員が共有し学位審査の視点を「ピアレビューからソーシャルレビューに」シフトする。
- ⑦ 先端技術のGrowth Hackerとしてのキャリアパス。
- ⑧ ポートフォリオを活用した生涯に渡るキャリア支援。



工学研究科・情報科学研究科にはこれらに詳しい教員もいます。

NGSデータの「解析」を医学系研究科の教員は苦手に行っています。NGSデータの1次配列解析(バイオインフォマティクス解析)も奥が深いのですが、さらに、この解析結果から得られた情報をシステム生物学的に解析することにより新たな価値を生み出すことができます。医学系研究科ではこの解析を得意としないために、多大な情報を含むNGSデータから表面的な結果しか抽出をできないことが多いようです。一方、情報科学の教員や学生もNGSデータに今まで出会う機会がなく、例え出会ったとしてもどのような目的で取得をされたデータであるかを知る機会もなく、また、どのような情報を抽出すべきかが判らない状態でした。これが我々のリーディング大学院プログラムの分野融合型学際領域教育の真価が発揮される一例だと思えます。

次の「実装」ですが、解析の結果を得られた情報を社会に還元することです。多くの医学研究が生命の理解、健康増進、疾病予防、疾患制御に直結していますので、医学系研究において実装は常識の範囲内で行われています。しかし、NGSデータの解析の成果を社会に還元をする手法は、多くの医学部出身者以外にとっては未知の領

域です。ここでも学際領域教育が必要になります。

このプログラムでは主領域を「人間」・「機械」・「社会」に3分類し、学生はいずれかの主領域を専攻します。医学系研究科のプログラム学生は「人間」を選ぶこととなります。この「人間」を主領域とする分野でNGSの例で説明をした「取得」・「解析」・「実装」を学びます。次に副領域において、同様に取得・解析・実装を学びます。例えば、「社会」を副領域に選ぶ学生は経済学研究科で経済の知識を習得します。従来、経済学分野と医学分野の接点は多くないと思われませんが、経済学のビッグデータ解析手法は、医療に応用が可能です。医療経済学という狭い意味だけではなく、患者待ち時間のシミュレーション、患者満足度の向上、クリニカルパス設計などにも役立つ手法が経済学を学ぶことにより実現をすることが期待されます。

このプログラムは主に産業界で活躍するグローバルリーダーの育成を目的とするコースのため、プログラムには海外研修も組み込まれ、希望に応じて企業でのインターンも経験できます。医学系研究科においては、このプログラムの主たる対象は医学部以外の学部を卒業して医学系研究科修士課程に入学する学生です。しかし2年後には医学部を卒業した博士課程大学院学生がこのプログラムに途

中から合流できるように計画しています。医学生物学の知識が必要な他研究科の学生には我々が教育を行い、一方、情報学・工学・経済学の知識が必要な医学系研究科の学生に対しては、それぞれの研究科の教員に教授してもらうことにより、このプログラムを通して文字通り社会で活躍する幅広い知識と技術を有するグローバルリーダーが輩出されることを期待しています。

## 多様な学問・産業領域から結集



## 「NAGOYA グローバルリトリート」

医学系研究科 卓越した大学院拠点形成支援プログラム 特任准教授 香川 憲夫

NAGOYA グローバルリトリートは、近隣の研究機関である愛知県がんセンター、国立長寿医療研究センター、愛知県心身障害者コロニーとの連携を強化すると共に、人材の交流を目的として、2008年に採択されたグローバル COE プログラム「機能分子医学への神経疾患・腫瘍の融合拠点」の催しとして第1回が開催されました。2010年度の第3回リトリートからは、自然科学研究機構生理学研究所も参加し、名古屋地区での研究機関の連携と人材交流が更に強化されています。

本リトリートは、グローバル COE で雇用された特任教員の若手研究者が主体的に立案、運営を担い、例年、大府のあいち健康プラザを会場として金曜日から土曜日にわたり泊まりがけで行う、200名前後の参加者が集う研究会です。基本的な構成は、1日目は、若手研究者の口頭発表及び著名な研究者2名程度の特別講演等があり、夕食後のポスター発表では、よりくだけた雰囲気の中で学生などが教授達と話す機会を作っています。2日目は、口頭発表などの後、優れた口頭発表、ポスター発表、積極的な質問等で発表会場を盛り上げた若手研究者などを参加者の投票で選び、表彰を行っています。また、過去1年間で優れた論文を発表した若手研究者の顕彰の場も兼ねています。

このリトリートは、2008年度－2013年度のグローバ



豊島教授を囲んで

ル COE プログラム実施期間中、毎年行われ好評であったことから、2013年度プログラム終了後も医学系研究科の催しとして継続する運びとなりました。2014年度は、卓越した大学院拠点形成支援プログラムが採択され、このプログラムの一環として、2014年2月14日（金）－15日（土）あいち健康プラザにて第6回 NAGOYA グローバルリトリートが開催されました。

第6回 NAGOYA グローバルリトリートは、グローバル COE で経験のある特任教員を中心に関係機関及び名古屋大学大学院医学系研究科の新たなメンバーを準備委員に加えて、立案、運営を行いました。リトリートの当日は、名古屋では記録的大雪となり、参加者が開始時間に集まれるかどうか危ぶまれましたが、幸い名古屋大学鶴舞キャンパスからの貸切りバスも予定通りに、10時の開会までには到着し、遅延無くプログラムを開始することができました。また大雪にも関わらず、約230名の学生、研究者が参加した盛会となりました。

今回は、京都大学ウイルス研究所の豊島文子教授、エンドセリン及びオレキシンの発見者であり筑波大学

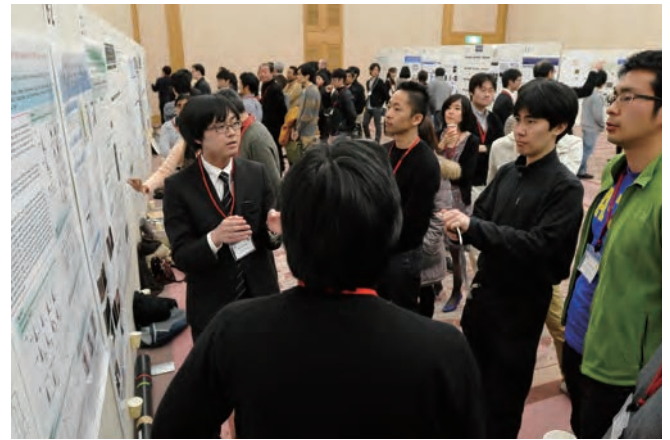


大雪の中、到着

及びテキサス大学で研究を進めている柳沢正史教授の特別講演では、興味深い内容の講演に若手研究者も大いに刺激を受けました。また、豊島教授を囲んでの分科会には、大勢の若手研究者が参加し、和やかな雰囲気の中で、豊島教授の体験談などを聞くことができ、特に大学院生には大変参考になった点がありました。

今回は、国立長寿医療研究センター、愛知県がんセンター、愛知県心身障害者コロニー、自然科学研究機構生理学研究所、及び名古屋大学大学院医学系研究科を合わせて73件のポスター発表があり、ポスター会場では、熱気にあふれた活発な発表と質問が交わされました。その光景は柳沢教授も同席する中、夜遅くまで続き、特に学生や若手研究者の意欲の向上に有意義なものとなりました。

準備委員会による第6回 NAGOYA グローバルリトリートの総括では様々な問題点、意見などがあげられましたが、全体としてみれば口頭発表、ポスター発表ともに活発で、関係機関からの参加者も多く、盛会の



ポスターセッションの様子

うちに終わることができました。

次回、第7回 NAGOYA グローバルリトリートは、2015年2月13日(金) - 14日(土)にあいち健康プラザで開催される予定であり、関係機関を含め多くの研究者の参加を期待しています。



出席者の集合写真

# 「多様化・個別化社会イノベーションデザイン拠点～いつまでも活き活きと活動し暮らせる社会とモビリティ～」

名古屋大学未来社会創造機構 医学系研究科 地域在宅医療学・老年科学 教授 葛谷 雅文

「革新的イノベーション創出プログラム(COISTREAM)」は、現在潜在している将来社会のニーズから導き出されるあるべき社会の姿、暮らしの在り方(ビジョン)を設定し、このビジョンを基に10年後を見通した革新的な研究開発課題を特定した上で、既存分野・組織の壁を取り払い、企業だけでは実現できない革新的なイノベーションを産学連携で実現する文部科学省のプログラムです。名古屋大学はトヨタ自動車、東京藝術大学、東京農工大学、産業技術総合研究所、理化学研究所、旭硝子、デンソー、東芝、豊田中央研究所、パナソニック、富士通、愛知県、豊田市など産学官の連携チームを組み、中核拠点として採択されました。本プログラムは、日本を代表する企業ならびに研究教育機関が多数参画する、これまでにない規模の大型産学官連携プログラムです。なお、主たる研究開発実施場所は新たに新設された名古屋大学 未来社会創造機構(機構長：松尾清一副総長、<http://www.coi.nagoya-u.ac.jp/>)です。

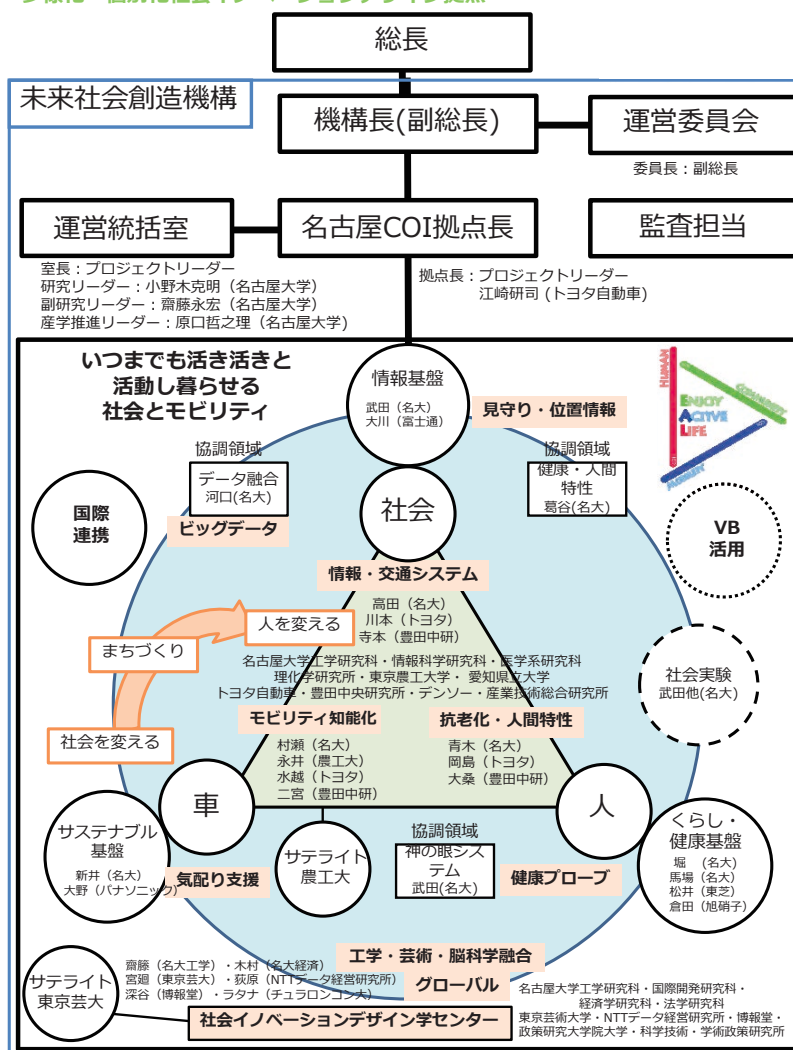
## 名古屋COI拠点を目指すもの

2025年問題を控え、超高齢社会に突入している我が国において、名古屋COI拠点では高齢者の安全な移動手段を提供することにより、行動・活動を活性化し、健全な身体機能、認知機能の維持・向上をはかる社会技術の創出及び実装を行います。また、テクノロジーの開発だけでなく、文系研究者も巻き込んだ応用脳科学に基づいた社会システムの構築を行うことにより、(i) 活き活き感に溢れる個別化モビリティ (ii) 安全安心感をもたらす健康増進システム、(iii) つながり感に包まれた社会情報システム、を創出し、「工学・芸術・応用脳科学(工・芸・脳)」が融合した社会デザイン及び社会

### 拠点の概要

- 事業予定期間：2013年度～2021年度(9年間)
- 推進体制：プロジェクトリーダー：江崎研司(トヨタ自動車株式会社)、研究リーダー：小野木克明(名古屋大学) 総勢190人
- 事業規模：160億円(総額)
- 研究拠点施設：ナショナル・イノベーション・コンプレックス施設(NIC施設)
- 場所：東山キャンパス内
- 建物：「ナショナル・イノベーション・コンプレックス施設(NIC施設)」8階建て(床上面積15,000m<sup>2</sup>)を建設中

### 多様化・個別化社会イノベーションデザイン拠点



拠点体制図

実装を行います。即ち、情報ネットワークとモビリティが統合することで、年齢格差、地域格差、個人差なく生活できる社会を実現し、太い絆で結ばれた社会形成へ向け貢献していきます。そして、持続的社會を実現する国内最強の産学官連携研究拠点として革新的イノベーションを絶え間なく創出し、日本の産業を牽引する役割を担います。

### このプロジェクトの実現により10年後何がかわるのか。

①活き活き感に溢れる個別化モビリティの創出：運転寿命の10年延伸と高齢者の交通死亡事故数を3桁に低減、②安全安心感をもたらす健康増進システムの創出：健康寿命3年延伸のための基盤技術確立、③つながり感に包まれた社会情報システムの創出：人々の活動やコミュニケーションを促進し、安心して生活できる太い「絆」を有するモデルコミュニティを3カ所実現します。

①、②、③に関するアプリケーションの社会実装により、2030年には、3.5兆円以上、雇用創出：3.2万人以上等を生み出します。

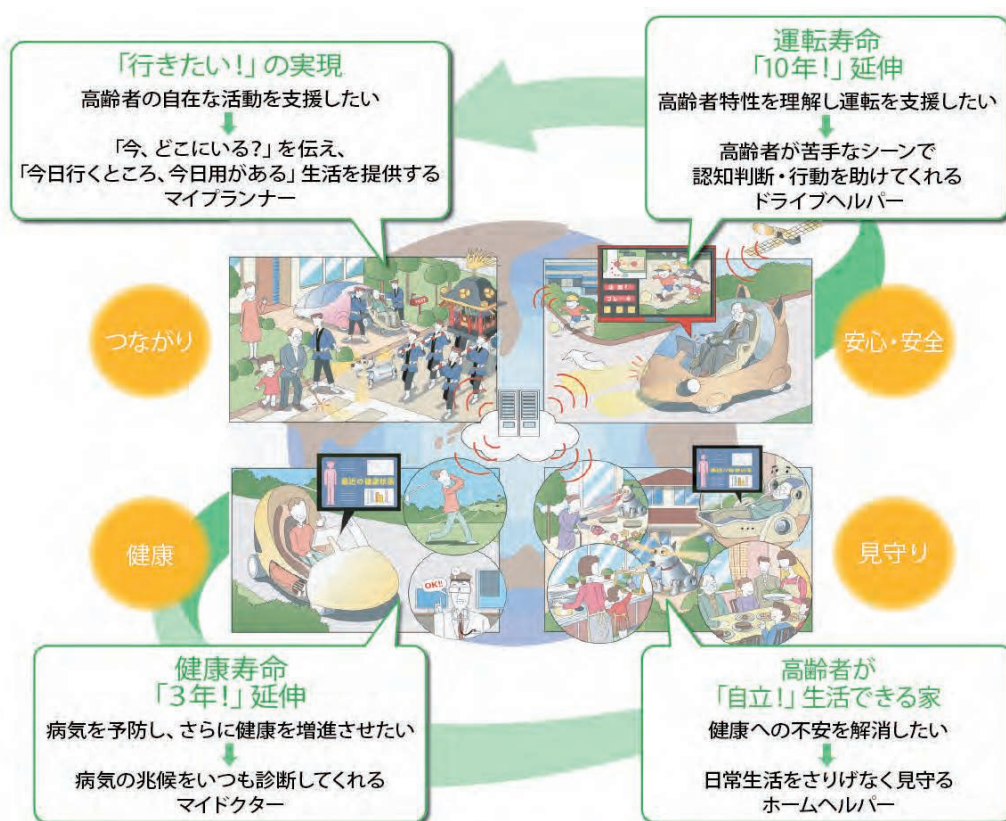
### 社会実装を目指します

COIプロジェクトは10年後の理想的な未来を予測し、それを実現可能なものにするため産学が協調して研究ならびに社会実装を目的としています。従って研究成果は社会で目の言える形で実装されなければなりません。そのために本プロジェクトは愛知県、豊田市も参画しています。

### 医学部との連携

この名大COIプロジェクトの中核キーワードは「社会とモビリティ」ですが、高齢者がいつまでも、行きたい所に行ける社会を達成する、また運転寿命を延伸するには、当然身体・精神的に良好な健康状態を保つ必要があります。高齢者の健康を保つには成人時代から

の生活習慣(病)も大切ですし、認知症・虚弱(フレイル)予防も重要です。また高齢者が容易に移動することができることにより、social networkを保ち続け、高齢者の健康、QOL維持にもつながり、医学が大いに関わる必要がある分野です。今後このプロジェクトの発展に伴い、さらに多くの医学部研究者との協働、協力体制が期待されます。



社会イメージ図式化

## 「特徴あるプログラム」

副研究科長 医学系研究科 神経遺伝情報学 教授 大野 欽司

名古屋大学医学部医学科の学部教育では、臨床医として必要最低限の知識を修得することを目的として、広範な生物学知識と全診療科の幅広い知識・技術の教育を、コース講義・実習により行っています。一方、旧来の大学院教育は、最先端の研究成果を生み、学術論文として報告をすること、つまり深奥を極めることを目的としてきました。最先端研究において深奥を極めることの価値は従前にも増して重要である一方、異なる研究領域を開拓する能力・異なる研究領域の知識と技法を取り込む能力が益々求められています。

名古屋大学大学院医学系研究科は、従前より国内外の最先端研究者を招いて、世界最先端の研究手法・研究成果をオムニバス講義形式で紹介する医学特論を行ってきました。2008年度から2012年度のグローバルCOE「機能分子医学への神経疾患・腫瘍の融合拠点」プログラムにおいて、このオムニバス特論に加えて最先端医学研究を系統的に修得する5種類のコースを立ち上げました。この大学院コース授業は、多数の大学院生に支持をされ好評を博し、2013年度からは研究科独自予算により「特徴あるプログラム」として開催することになりました。2013年度は、次のとおり8コースを開講しています。

i. キャンサーサイエンスコース	10 講義
ii. ニューロサイエンスコース	12 講義
iii. トランスレーショナルリサーチコース	5 講義
iv. 医薬統合コース	13 講義
v. 産学官連携コース	9 講義
vi. On the Job トレーニングコース	8 講義
vii. 医学英語コース	15 講義
viii. がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン	7 講義

2013年度博士課程大学院入学者より、これらのコース授業を最低4コースにわたり合計20回以上博士課程大学院在籍中の4年間に受講することを必修としています。

2013年度に開講した8コースのうち「キャンサーサイエンスコース（コーディネータ：高橋隆教授）」「ニューロサイエンスコース（同：祖父江元教授・尾崎紀夫教授・宮田卓樹教授・久場博司教授）」は、医学系研究科の多くの研究者が関わっている「がん」と「神経」の最先端研究を教授するコースです。この2領域は広い範囲に渡るためコースコーディネータは講演者をできるだけ毎年変更することにより大学院在籍中に幅広い領域の最先端研究を修得できるようにコースを作成しました。



鶴友会館で開催された産学官連携コース



「トランスレーショナルリサーチコース（同：祖父江元教授・長谷川好規教授）」は、研究科で行われている生化学手法・細胞学手法・実験動物手法を用いた基礎研究の成果を臨床応用するステップを修得するコースです。基礎研究の臨床実用化のためにはレギュラトリーサイエンスの知識が必須ですが、医学部医学科の学部教育では全く教育が行われていない領域です。

「医薬統合コース（同：山田清文教授）」は、2013年度から医学系研究科の1専攻化とともに新たに設置された「統合医薬学領域」の各講座が中心になり教育を行うコースであり、創薬リテラシーの涵養を行うことを目的としています。

「産学官連携コース（同：門松健治教授）」は「トランスレーショナルリサーチコース」と一部目的を同一としています。アカデミアだけで閉じた研究を社会に還元をするためには産業界と行政との協調が必要であり、そのためのリテラシーの修得を目的としています。このコースでは、創薬の現場を知る企業等から、第一線で活躍する講師陣を招き、講義を行っています。特に、このコースのキックオフを兼ねた、アステラス製薬株式会社の野木森雅郁会長等の講演は大好評を博しました。

「On the Job トレーニングコース（同：山田清文教授・水野正明教授）」は、臨床試験の適正かつ円滑な実施に貢献できる人材を養成することを目的としています。

名古屋大学医学部附属病院先端医療・臨床研究支援センターにおいて生命倫理、実施計画書の作成、生物統計、モニタリング、データマネジメントの実務研修を行う実習型の教育コースとなっています。

「医学英語コース（同：濱嶋信之教授）」は、研究成果の発表手法、英語論文作成手法の修得を目的とするコースです。GCOEプログラムでは外国人教員を招へいし、英語による講義を行いました。「特徴あるプログラム」では濱嶋教授を中心とする医療行政学(YLP)講座の3名の教員が講義を担当しています。日本人による英語コースは、日本人が間違いやすい英語語法、プレゼンテーション技法を修得する上で有用であり、大学院生にも好評のコースです。

「がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン（同：安藤雄一教授）」は2012年度より、名古屋大学が主幹校となり、浜松医科大学、岐阜大学、名城大学、藤田保健衛生大学、名古屋市立大学、愛知医科大学と共同で行っている組織横断的がん診療を担う専門医療人の養成を目的としたがんプロフェッショナル養成プログラムの講義を「特徴あるプログラム」としてプラン非履修大学院生にも開放しました。

2014年度以降もさらに大学院教育「特徴あるプログラム」を継続・発展させ、医学研究に必須となる幅広い知識の涵養を目指します。



アステラス製薬株式会社 野木森雅郁会長講演

## 医系研究棟3号館について

副研究科長 医学系研究科 分子細胞学 教授 藤本 豊士

鶴舞キャンパスにおける医学研究の新たな拠点として、2014年6月30日医系研究棟3号館が竣工しました。鉄骨鉄筋コンクリート造一部鉄骨造、地上10階、地下1階建ての建物で、延床面積は13,088㎡に及びます。(図1)

地下1階及び1階にアイソトープ総合センター、2、3階に解剖実習室、組織・病理実習室などの教育施設、4階（一部5階）に医学教育研究支援センター・分析機器部門、5階に神経疾患・腫瘍分子医学研究センター、6階から10階はプロジェクトスペースとして計画され、統合医薬学領域研究室、先端医療・臨床研究支援センターなどが配置されています。(図2)

アイソトープ総合センター、医学教育研究支援センター・分析機器部門が医系研究棟3号館に移転、集約化されることにより、鶴舞キャンパスの研究施設・設備は従来にも増して効率的な配置が実現しました。特に全国的に見ても有数の規模を誇り、最新の研究機器を揃える医学教育研究支援センター・分析機器部門の機能は一段と強化され、最先端の医学研究を加速する体制が整いました。また学生数の増加によって狭隘化

していた解剖実習室、組織・病理実習室は、移転によって床面積が大きく増加し、医学部学生の学習環境が大きく改善されました。

医系研究棟3号館の設計には次のような6つのコンセプトが盛り込まれています。

### ■コンセプト1：鶴舞キャンパスにおける機能的動線に配慮した配置

医系研究棟3号館の出入口は医学部正門から続くメタセコイヤの並木に面して設けられ、医学部の顔となる建物として設計されました。一方、既存の他の建物との間の動線を考慮し、西側出入口の配置、渡り廊下による医系研究棟2号館との連結など、利便性にも十分な配慮がなされています。

また外観については、キャンパス内の他の建物と調和するよう、東西の壁面に同系統の色のタイルが使用されています。南北面には研究棟としての特性から多くの配管が配置されていますが、メンテナンスバルコニーの外側にルーバーを配し、手すりの形状を工夫することで、それらをゆるやかに隠し、研究棟らしい外観を生み出しています。

い外観を生み出しています。

### ■コンセプト2：フレキシブルな空間の実現

プロジェクトスペースとして構想された6～10階部分では、各室の床面に幅500mm、深さ400mmのトレンチピットが設けられ、実験機器の設置にともなう配管配線工事がその室だけで完結し、使用目的の変更に応じた改装等を柔軟に行えるように配慮されています。また廊下をはさんで向かい合う北側と南側の部屋は奥行きが異なり、さま



図1. 建物概観

10F	先端医療・臨床研究支援センター Center for Advanced Medicine and Clinical Research
9F	寄附講座 プロジェクトスペース Endowed Department Project Space
8F	寄附講座 Endowed Department
7F	統合医薬学領域 トキシコゲノミクス Division of Clinical Pharmacology Toxicogenomics 生物統計学 プロジェクトスペース Biostatistics Project Space
6F	ライブラリ プロジェクトスペース Library Project Space
5F	神経疾患・腫瘍分子医学研究センター Center for Neurological Disease And Cancer 分析機器部門 Division for Medical Research Engineering
4F	分析機器部門 Division for Medical Research Engineering
3F	組織/病理実習室 解剖教育施設 Histology/Pathology Lab Dissection Educational Facility
2F	解剖教育施設 Dissection Educational Facility
1F	アイソトープ総合センター分館 Radioisotope Research Center Medical Division
B1F	アイソトープ総合センター分館 設備室 Radioisotope Research Center Medical Division Facilities

図2. 各階案内

さまざまなニーズに対応できるように設計されています。各室外部にはメンテナンスバルコニー及び配管スペースが確保され、将来の実験機器更新・増設に対応できるように配慮されています。

### ■コンセプト3：機能的であると同時に教育の場に相応しい環境の創出

2階の解剖実習室、3階の組織・病理実習室は低層階にありながら柱のない大空間を実現し、学生の利便性と機能性を両立させています。(図3) 6階には研究者間の活発なコミュニケーションを誘発するライブラリと呼ばれるスペースをおき、知的創造性を育むための研究環境が整えられています。(図4) このライブラリにはホワイトボードや本棚、キッチン等が設えられ、さらに廊下との間の仕切りをガラス壁と



図3. 解剖実習室



図4. ライブラリ

することにより、開放的で気軽に立ち寄りやすい雰囲気を作られています。

### ■コンセプト4：省エネルギー・環境負荷低減

全館LED照明はもとより、外壁面の高断熱・高气密化を図り、南北の窓面には複層ガラスが採用されました。特に日射の影響が大きな東西面は窓面積を小さくし、遮熱フィルムを採用して日射遮蔽効果が高められています。そのほか南北のメンテナンスバルコニーのルーバーや手すりも日除けとしての効果も持つようになっています。

### ■コンセプト5：再生可能エネルギーの利用

北西角に位置する屋内階段はガラス張りで、最上部に自然換気窓を設置し、煙突効果により各階の廊下やホールの自然換気、自然通風を促進します。また、地中にはアースチューブと呼ばれる配管を設置し、ここに外気を通すことで、夏はプレクール、冬はプレヒートした空気をエントランスホールに取り入れることができます。

### ■コンセプト6：安心・安全・信頼性・保全性の確保

本建物は東西面に粘弾性ダンパー（アンボンドブレース）と呼ばれる筋交いを用いた制震構造となっています。これにより地震エネルギーを吸収し、地震荷重と建物変位が大幅に低減されます。微小振動や風揺れも低減する効果があり、研究棟としての高い機能性を持つように配慮されています。また屋上の機器設置スペースには将来の機器の更新や増設に十分対応できるだけの面積が確保されています。

医系研究棟3号館の完成にあわせて、医学部正門（東門）から続く並木道など周囲の舗道も美しく改修整備され、鶴舞キャンパスは面目を一新しました。世界屈指の知的成果を生み出すためのすばらしい環境が整備されたといえます。

## 「名古屋大学医学部学生研究会 (LOVE LAB)」

基礎医学研究者育成プロジェクト 名古屋大学医学部学生研究会 特任助教 黒田 啓介

### 研究医不足という、もう一つの医師不足

近年、日本全国で医師の不足やそれに伴う地域医療の崩壊が問題となっています。外科医や小児科医、産婦人科医や麻酔科医といった臨床医の不足は、テレビや新聞上で報道され、社会問題として取り上げられてきましたが、一方で研究を行う医者、その中でも特に基礎医学研究を行う医者が減少している問題は、これまであまり注目されてきませんでした。しかし現在、基礎医学研究者を目指す若手医師の減少は深刻な問題となっており、長期的な視点で考えた場合、研究医の不足は日本の医学研究のレベルを低下させ、さらには医療水準の低下や医療費の増大、創薬産業や医療機器産業の国際競争力の低下を引き起こすと考えられます。2012年度には京都大学の山中教授がノーベル生理学・医学賞を受賞されましたが、今後も優秀な基礎医学研究者を輩出していくためには、研究者の育成により一層の力を入れていく必要があります。

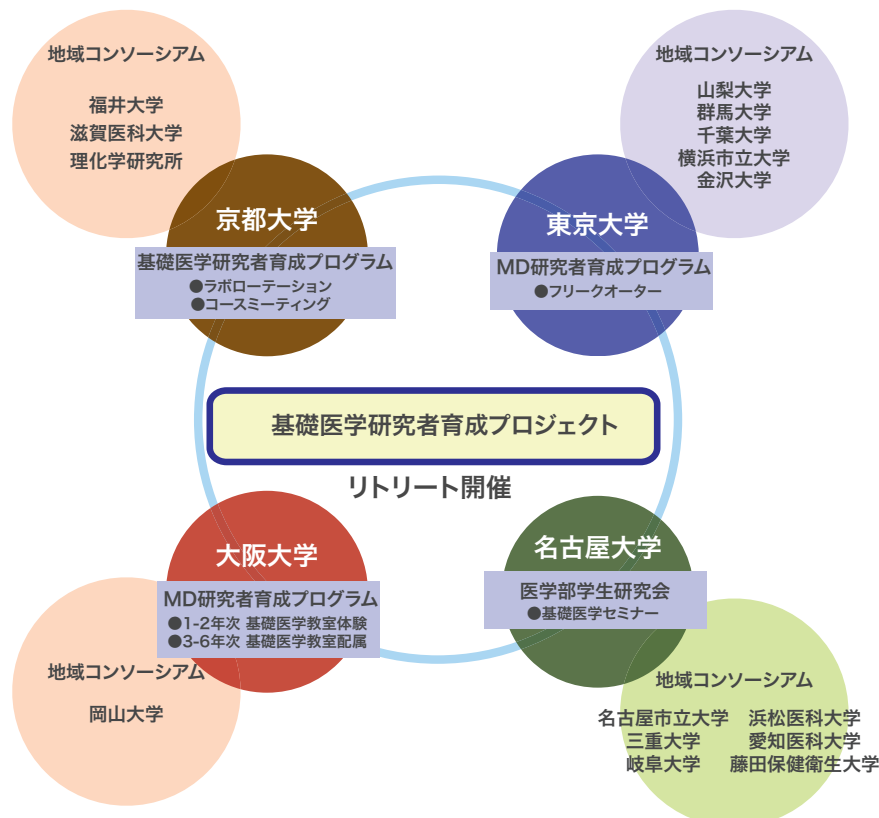
### リサーチマインドの涵養

一方、研究者としての考え方（リサーチマインド）

を身につけることは、研究の世界だけでなく、実際の臨床現場においても非常に有用です。より良い医療を提供するためには、日々新しい知識を身につけなければなりません。その際には、文献を読み解く能力や、経験した症例を正しく分析・理解する能力、すなわちリサーチマインドが必要となります。本プロジェクトを通じて研究活動を行うことで、研究志望の学生だけでなく、なるべく多くの学生に、リサーチマインドを身につけて欲しいと希望しています。

### 名古屋大学医学部学生研究会の活動

名古屋大学では、文部科学省の支援のもと、2011年度より東京大学、京都大学、大阪大学と協力し、基礎医学研究者育成プロジェクトを開始し、毎年数名程度の研究医を輩出することを目標に進めています。プロジェクト推進のために「名古屋大学医学部学生研究会(通称 LOVE LAB)」を立ち上げ、担当の専任教員を配置し、学生の研究活動に対して指導や支援を行うとともに、大学間の交流や、学生の海外派遣制度および大学院進学のための奨学金制度の整備を行っています。



学生研究会は、学部生を対象とした活動であり、名称の「学生研究会」のとおり、学生の自主性に任せた、ちょうどサークル活動のように自由に参加することができます。具体的には、以下の2つのコースに分かれて活動を行っています。

### ■ベーシックコース

#### ● メディカルサイエンスカフェ

研究に興味のある学部生を対象として、医学部の教員が、自身の研究歴や研究内容を紹介し、研究活動の楽しさを伝えリサーチマインドに触れてもらいます。

#### ● ベーシックミーティング

論文の読み方や、研究計画の立て方、実験の進め方などについてのセミナーを行っています。

#### ● ラボツアーおよび研究室配属

研究活動を希望する学生に、研究室の訪問を斡旋します。自分に合った研究室を見つけた学生は、実際に研究室に所属し、研究を行います。

### ■アドバンストコース

#### ● 進捗報告会

実際に研究活動を行っている医学部生を対象として、毎月1回の進捗報告会を行います。参加学生には、国内や海外の学会参加、研究室訪問に対して費用のサポートを行っています。

#### ● 4大学リトリート（現在は全国合同リトリートに改称）および東海合同リトリート

全国および東海地域の大学とコンソーシアムを組み、研究発表会と交流を兼ねたリトリート（合同合宿）を行っています。



進捗報告会

### 終わりに

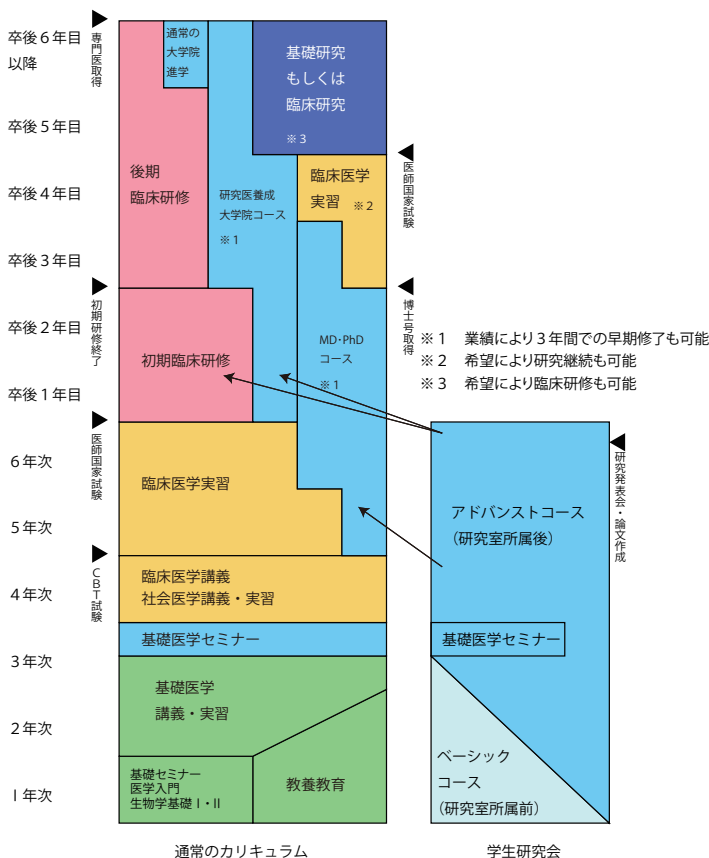
研究では、毎日試行錯誤しながら一生懸命取り組んでいると、ある日突然、素晴らしいアイデアを思いつくことがあります。そしてそのアイデアが実際に新しい発見につながった時の喜びは何物にも代えがたいものであり、それこそが研究の醍醐味です。私たちは、医学部学生研究会の活動を通じて、一人でも多くの医学部生が研究活動にチャレンジし、研究の面白さを感じてもらえればと考えています。

学生研究会の詳しいカリキュラムおよび活動内容については、以下をご覧ください。

### 基礎医学研究者育成プロジェクト

### 名古屋大学医学部学生研究会ホームページ

▶ <http://med.nagoya-u.ac/nsam/index.html>



## 「小児がん治療センターの設立」

小児がん治療センター長 医学系研究科 小児科学 教授 小島 勢二

### 選定までの経緯

わが国における年間の小児がんの新規患者数は2000～2500人と決して多くはありませんが、小児の病死原因の第1位を占めています。その診療には専門性の高いスタッフと治療環境が不可欠なため、国内の隅々まで適切な受療体制を整備するのは容易ではありません。このような現状を改善するために、小児がん診療および支援体制の充実を図ることが、国の施策として取り上げられました。具体的には、全国に小児がんの拠点病院を整備し、今後は、拠点病院を中心に各地域の診療体制を構築することになりました。選考にあたっては、症例数や診療従事者や施設の充実度、臨床研究など9項目が9人の評価委員で採点され、平均点の上位15病院が最終的に選定されました。名古屋大学は、集学的治療や標準的治療の提供、病診連携、診療従事者の充実度、研修体制、臨床研究と5項目で最高点を獲得、総合評価でも全国で第1位の評価で、東海・北陸ブロックの拠点病院に選定されました(図1)。

### 小児がん治療センターの設立

小児がん治療に関わる各診療科間との連携、小児がん患者への診療、研究の牽引、専門的知識を有する医療従事者の育成のため、2013年10月1日に名古屋大学医学部附属病院小児がん治療センターが設立されました。各科協力して、小児がん患児の診療にあたるほか、小児がんの診療に従事

図1

## 小児がん拠点病院の選定

### 15施設が選定

- 地域ブロック  
 ①北海道  
 ②東北  
 ③関東甲信越  
 ④東海  
 ⑤近畿  
 ⑥中・四国  
 ⑦九州



		平均	臨床研究
1	名古屋大学	4.48	4.78
2	京都府立医科大学	4.44	4.11
3	九州大学	4.31	4.44
4	広島大学	4.30	4.00
5	兵庫県立こども病院	4.29	4.00
6	成育医療センター	4.26	3.56
7	三重大学	4.23	4.00
8	埼玉県立小児医療センター	4.19	3.67
9	神奈川県立こども医療センター	4.18	3.78
10	大阪市立総合医療センター	4.16	4.00
11	東北大学	4.10	4.11
12	大阪府立母子医療センター	4.09	3.78
13	北海道大学	4.05	4.22
14	京都大学	4.01	4.22
14	東京都立小児医療センター	4.01	3.44

する内科系、外科系レジデント(10名)の教育のほか、多職種でのチーム医療に実現に向け、小児がん医療に携わる医療従事者向けの教育を行っています(図2)。

### 院内施設の拡充および整備

患児への教育対応として、院内学級(大府養護学校施設内教育)が小児科病棟内に設置されています。2012年度のべ在校生徒数は小学部33名、中学部23名でした。小児がん拠点病院に選定されてから、患者数が増加するとともに院内学級の利用者数も増加しているため、新たに、病棟5階の食堂及び手術室前のスペースを利用し、小学部、中学部の院内学級を整備し、2014年4月から運用を開始しました。さらに、AYA世代への対応として高等生が利用可能な自習室も整備しました。

また、遠隔地からの紹介患者に対応するために、患者家族の宿泊施設として12部屋からなる「ドナルド・マクドナルド・ハウス なごや(以下、なごやハウス)」が完成し、2014年1月から利用できるようになりました。「なごやハウス」の完成には、1億7千万円に達する寄付が寄せられ、200人のボランティアの参加で運営されています。

名古屋大学医学部附属病院(以下、附属病院)では東海・北陸ブロックの他の専門病院と協力し、小児がんのなかでも、とりわけ、難治性あるいは再発小児がんの診療を担当します(図3)。当ブロックにおける対象患者数は約100人と推定されます。難治性あるいは再発小児がんの治療には、造血幹細胞移植

を併用した大量化学療法が用いられます。実際、附属病院小児科に入院する小児がん・血液

図2

### 小児がん治療センター体制図



患児の半数に造血幹細胞移植が行われています。2011年の日本造血細胞移植学会の統計によれば東海・北陸ブロック内で実施された小児造血幹細胞移植総数は85例でした。そのうち、附属病院は31例でブロック内のみならず全国1位の移植数でした。拠点病院となり小児がん患者数の紹介数も増えてはいますが、これ以上移植症例数を増やすことは不可能であるため、2104年度中に小児病棟内に3床の無菌病床を増

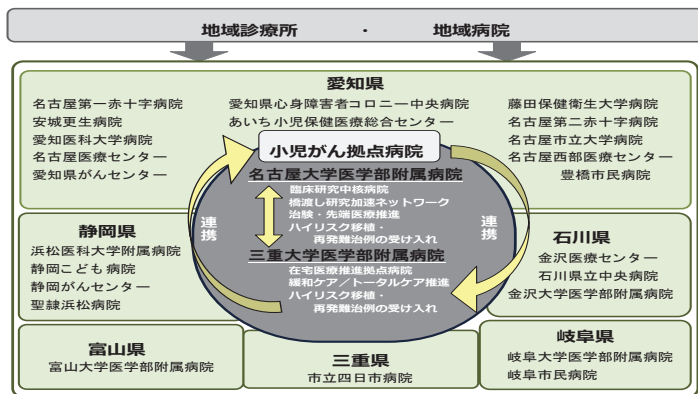
設することになりました。これにより、年間50症例の移植を実施することが可能となります。さらに、タイミングを逃さず適切な時期に移植を実施することにより、移植成績の向上も期待できます。

### 高度先進医療の推進

小児がん拠点病院として、研究機能も求められます。基礎研究によって得られた成果を新薬の開発に生かし、速やかに臨

床現場で応用してこそ、治療成果の底上げが図れます。附属病院は、厚生労働省が認定した臨床研究中核拠点病院、文部科学省が認定した橋渡し研究加速ネットワークに選定されていることから、小児がん関係の治験や先端医療を進めています。例として神経芽腫に対する抗GD2抗体の医師主導治験を開始する予定です。日本医師会治験推進研究費を取得し、日本PDMAとの戦略相談も終了しています。現在先端医療センターから支援を受けているシーズの中では、ウイルス特異的CTL療法、ステロイド抵抗性GVHDに対する骨髄由来間葉系幹細胞療法等の臨床第I相試験を開始しています(図4)。

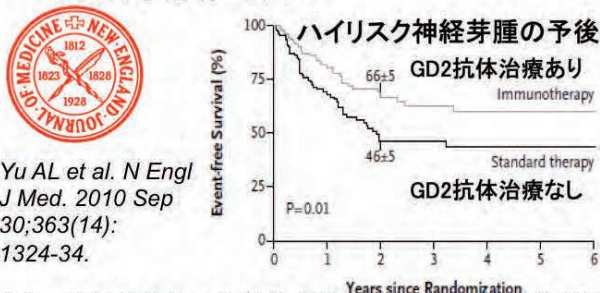
図3 東海・北陸ブロック内拠点病院の役割分担について



ブロック内における地域特性から、名古屋大学医学部附属病院は県下に複数の小児がん診療病院が存在することから、再発・難治性がんを対象にした造血幹細胞移植の実施に重きを置いているほか、臨床研究中核病院や橋渡し研究加速ネットワークに選定されていることから、小児がん関連治療や先端医療開発の中心的役割を担う。三重大学医学部附属病院は県内唯一の小児がん診断・治療施設として、再発・難治症例等限定せず、全てのがん種の診断治療を行っており、長期フォローアップ拠点病院として専門外来を設け、継続的な小児がん経験者の診察及び相談も行う。また中部小児がんトータルケア研究会の中心メンバーでもあることから、緩和ケア、小児在宅医療にも積極的に取り組んでおり、小児等在宅医療連携拠点病院として、地域の在宅医療支援も担う。

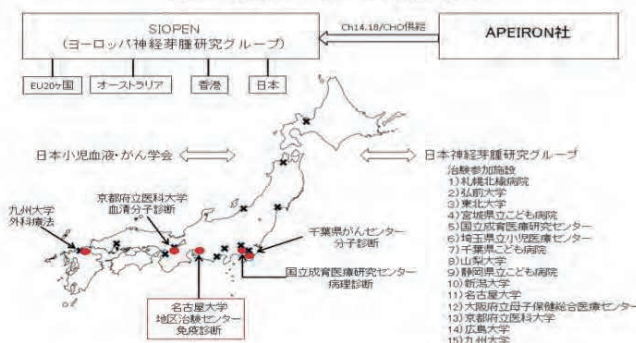
図4 高度先進医療の推進(名古屋大学医学部附属病院)

#### (1) 小児がん臨床治験の推進 = ドラッグラグ解消に向けて



欧米では神経芽腫の標準治療薬であるGD2抗体が我が国では未承認である。名古屋大学小児科が日本代表事務局となって全国15施設およびヨーロッパ神経芽腫研究グループと共同で早期承認のための国際共同医師主導治験を計画し、PMDAとの戦略相談を終了、日本医師会治験推進研究費を取得した。来春から開始予定である(下図)。

国際共同治験による難治性神経芽腫を対象とした抗GD2抗体(Ch14.18/CHO)の開発研究



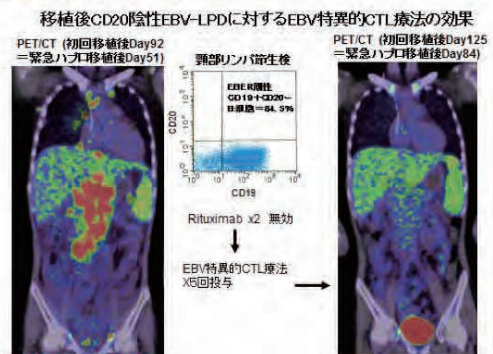
#### (2) トランスレーショナルリサーチの推進

治療の安全性に関する臨床第I相試験

##### 1) サイトメガロウイルス特異的CTL(CMV-CTL)

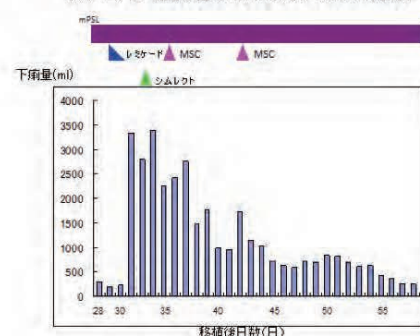
5名に投与し4名で末梢血CMV-DNAが消失が得られ、重篤な副作用は認めていない

##### 2) EBウイルス特異的CTL(EBV-CTL)



##### 3) 間葉系幹細胞(MSC)

ステロイド抵抗性GVHDに対するMSC療法



## 「内視鏡トレーニングセンターの開設」

内視鏡トレーニングセンター長 医学系研究科 消化器内科学 後藤 秀実

### アジア内視鏡トレーニングセンターの概要

濱口道成総長の掲げる「名古屋大学から Nagoya University へ」のスローガンの下に大学の国際化が進められています。特に発展著しいアジアを中心に各学部が海外拠点を開設しています。名古屋大学のアジア力の一翼を担うため、消化器内科は医学部の海外展開として初めて2014年9月にベトナム中部に位置するフエ市のフエ医科薬科大学内にベトナムの若手医師を育成するための内視鏡トレーニングセンターを開設しました(図1)。当センターは2013年に新築された病院の3階の半分のフロアを占め、上部消化管内視鏡、下部消化管内視鏡、超音波内視鏡、ダブルバルーン内視鏡兼胆嚢膵臓内視鏡の4部屋から構成されています。各部屋には日本製の最新式内視鏡機器が設置されており、ベトナムではもちろん、日本国内においてもトップレベルの設備となっています。

### ベトナムの内視鏡医療の現状

ベトナムの総人口は8800万人であるにもかかわらず、内視鏡医師は約500人で、人口10万人あたりに換算しますと0.5人と日本の13.2人に比し非常に不足しています。さらに、診断技術も優れているとは言えず、使用している機器も20年前の旧式機材と内視鏡検査の環境は良いと言えないのが現状です。一方、日本の消

化器内視鏡検査レベルは、内視鏡装置及び診断・治療技術などハード、ソフトともに世界最高水準であり、この日本の優れた医療技術をベトナムにおいて普及促進すると共に、ベトナムの医療環境を改善する目的で内視鏡トレーニングセンターを設置しました。本トレーニングセンターでは、当消化器内科の医師と関連施設の医師、看護師、臨床検査技師がチーム医療として協力しながら、現地の医師・看護師に対してトレーニングを実施しました。2013年9月、10月、12月、2014年1月、2月に1週間のトレーニングを計5回行い、実際フエのトレーニングセンターにおいて指導に携わった延べ人数は、医師30名、看護師17名、臨床検査技師1名です。同期間中の内視鏡トレーニングを受講したベトナムの医師は、フエ医科薬科大学8名、研修医15名、他病院18名でした。

### 成果

フエ医科薬科大学の内視鏡トレーニングセンターの効果は、私たちの想像よりも早くベトナムの実臨床に貢献しました。例えば、5cmの釘を誤飲した2歳の女児から、ベトナムの医師が内視鏡を用いてその釘を胃から取り出すことに成功しました。本例は今まででしたら緊急の開腹手術で除去していましたが、体に優しい低侵襲な手技にて加療できたことは大きな進歩であ



(A)



(B)

図1: (A)フエ医科薬科大学での内視鏡センター開所式、  
(B)センターの看板



ります。また、経鼻内視鏡も初めて導入しました。本検査は、私たちが派遣した看護師による前処置と医師による挿入の指導を行った事により、苦痛の少ない検査として認識され、上部消化管内視鏡を受ける患者さんの半分が経鼻内視鏡を希望するようになりました。さらに、診断技術の向上により、発見が困難であった早期胃がんも実際発見することができ、この早期胃がんは、2014年1月に私たちが派遣した医師によりESD (Endoscopic Submucosal Dissection、内視鏡的粘膜下層剥離術)が行われ、内視鏡的に切除されました(図2)。現在、豚の胃を用いて、このESDのトレーニングが始められており、近いうちにベトナムの医師による治療が行われると期待しています。

このように最新の消化器内視鏡システムを使用して、高度な技術指導による包括的な教育プログラムにより、医療レベルは日々進歩しています。また、客観的に技術進歩を評価するために、日本ならびに欧米のカリキュラムを参考にして、私たちがベトナムの医師の為にグローバル・スタンダードなカリキュラムを作成し、本トレーニングではこれを活用しています。このカリキュラムにより、日本あるいはベトナムでの一貫した内視鏡技術のトレーニングを継続的に行うことができるようになりました。一方、名古屋大学医学部附属病院内に設置されているアジア内視鏡トレーニングセンターでは、基

本的な内視鏡手技から高度な内視鏡手技を有した外国人医師のレベルに適した育成システムができ、幅広い留学生の教育をする事が可能となりました。本年度は13名の留学生が本カリキュラムを利用したトレーニングを受けました。帰国後も本カリキュラムを利用しトレーニングを行うことにより、更なる技術の向上が期待されます。

### 今後の展望

私たちは、附属病院内のアジア内視鏡トレーニングセンターにおいて内視鏡技術を学んだ医師が、帰国後に自国の若手医師の育成を担うリーダーとなり、更なる人材育成を行うという構想をもっています。これにより、更なるアジア各地でのトレーニングセンターの展開が可能になるとも考えています。また、本内視鏡トレーニングセンター構想は、育成された内視鏡医師が増加し、現地病院にて自国国民の健康増進に貢献するばかりでなく、トレーニングセンターで用いる日本製医療機器/材料メーカーの事業機会の拡大をもたらしますので、日本の経済戦略にも寄与します。このように名大病院内の内視鏡トレーニングセンターは、アジアの内視鏡のヤングリーダーを作る場所であり、彼らによりアジアの健康増進がもたらされるビッグプロジェクトと考えています。



(A)

(B)

図2: (A)ESDを施行、(B)切除された標本

## 三大学合同学術協力会議

国際連携室長 医学系研究科 准教授 粕谷 英樹

名古屋大学大学院医学系研究科は研究大学として躍進するため大学間協定校、学部間協定校の中で常に新規の国際教育プログラム、共同研究プロジェクトを推し進めています。その1つの成果として2014年3月に今まで相互の交流を続けてきていたアデレード大学、フライブルク大学より学長、医学部長、研究代表者が参加し、鶴舞キャンパスにおいて、3月18日に合同国際シンポジウム、3月19日、20日に合同学術・教育協力会議を開催しました。国際シンポジウムでは、腫瘍学分野、神経学分野に分かれて3大学から合計11名のシンポジストによる研究発表が行われ、腫瘍学分野では門松健治教授、アンドリュー・ザネッティーノ教授、クリストフ・ピーターズ教授、ダニエル・ウォースレイ教授、高橋隆教授、サイコオンコロジー分野ではマイケル・ヴィルシング教授、木村宏之講師、神経科学分野ではジョセフ・ガンツ教授、ブランコ・アレクシッチ特任准教授、大野欽司教授がそれぞれ講演を行い、当日は多くの教員・学生が熱心に耳を傾け、質疑応答が活発に行われました。この国際シンポジウムを通じて、

3大学が連携を深め、癌関連遺伝子の共同研究、精神疾患の遺伝子変異の共同研究、サイコオンコロジー、パリエーティブケアに関する内容等、今後の国際共同研究の推進に大きく寄与する成果が得られました。翌日19日からは2日間にわたり国際教育プログラムに関する会議が開催されました。この国際教育プログラム会議では、医学部生の交換留学、Joint supervision Program, Joint Degree Programなどの大学院生の共同研究指導、および共同研究の可能性を探る大学間協力体制について活発な意見交換が行われました。その後、ケント・アンダーソン アデレード大学副学長とジャスティン・ベルビー健康科学部統括学部長、ハンス・ヨハン・シーバー フライブルク大学学長とマイケル・ヴィルシング医学部長代理、濱口道成総長と高橋雅英医学系研究科長の6名により医学博士号授与に関する共同教育プログラム等を含む覚書に調印しました。これによって所定の要件を修めた名古屋大学の学生は通常の博士課程の期間を延長することなく一つの医学博士論文に対する複数機関の合同審査により、それぞれの機



3大学間で行われた国際シンポジウムの様子

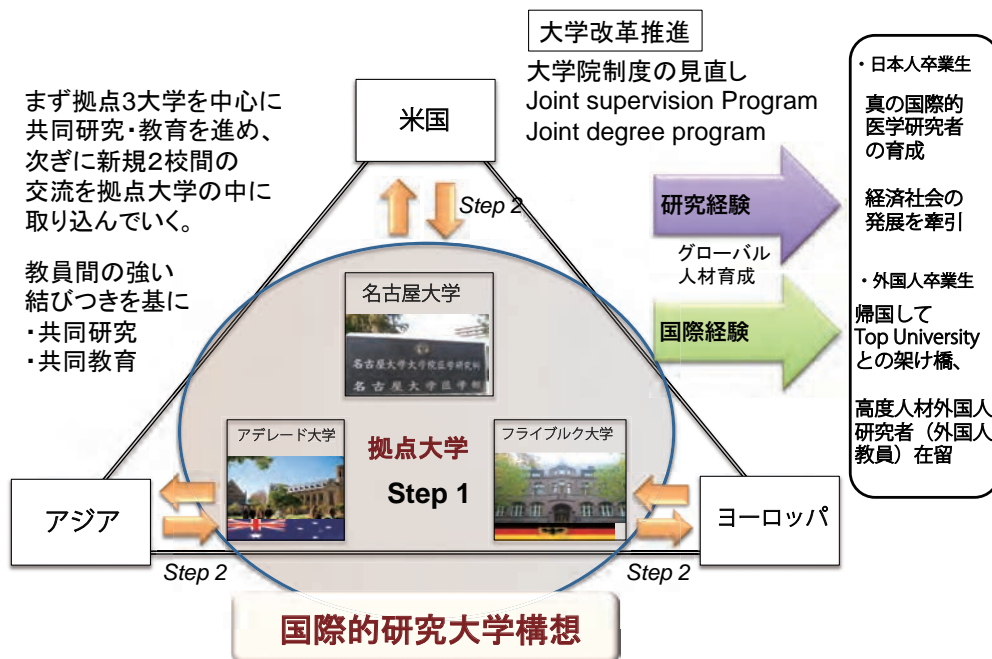


3大学間で共同教育プログラム等を含む覚書に調印

関から医学博士号の学位に相当する業績を修めた事を証明する学位記または学位証明書が授与される事となりました。このような二つの国からの国際的な質的保証は、日本の医学部では初の試みであり、医学という一つの学問分野について複数の国の高等教育機関が異なる評価軸をもって評価することから、国際研究施設間で当該学生が高い評価を得られ、これから海外で活躍する若手研究者にとって活躍の門戸が広がる事が期待されます。この覚書(MOU)では博士課程に留まらず、

修士課程や医学部生の交換留学、最先端の共同研究、セミナー等の開催も謳われており、3大学間での強い結びつきによる協力関係の下、今後引き続き各種教育プログラムや共同研究を打ち出していくことが確認されました。具体的にはフライブルグ大学の Spemann Graduate School 博士課程への名古屋大学大学院医学系研究科とアデレード大学健康科学部(医学部)に対する優先枠や、9月のアデレード大学での三大学大学院生共同研究発表会の開催、アデレード大学の honors students の名古屋大学医学部への短期受入れなどが確認されました。Spemann Graduate School へは2014年9月から名古屋大学医学部・医学系研究科の博士課程在籍者を共同教育プログラムとして2年間派遣するための選考がすでに行われました。こうした取り組みを通じて名古屋大学大学院医学系研究科はこの3大学を重要な国際研究・教育拠点大学として位置づけ、強い結びつきを持って協力を重ね、さらに今後10年間の内にこの輪の中へ世界のトップ大学を組み入れながら国際的研究大学構想を推進していきます。

## 大学院国際共同研究・共同教育の拠点大学



国際的研究大学構想

## 「医学系研究科（保健学）における国際化の取り組み」

保健学統括専攻長・保健学科長 榊原 久孝

名古屋大学大学院医学系研究科(保健学)では、国際化への取り組みとして、「博士課程教育リーディングプログラム『ウェルビーイング in アジア』実現のための女性リーダー育成プログラム-」、「名古屋—延世大学間学術研究交流事業」、「看護臨地実習短期国際交流プログラム」などによりグローバル人材の育成強化を図っています。

### 1. リーディング大学院「Well-being in Asia」

「博士課程教育リーディングプログラム『ウェルビーイング in アジア』実現のための女性リーダー育成プログラム-」(2013年度文部科学省採択)は、高橋雅英医学系研究科長を責任者とし、医学系研究科(医学、保健)、生命農学研究科、国際開発研究科、教育発達科学研究科の4研究科連携で取り組む、幅広い視野を持つ女性のグローバルリーダー育成を目指すプログラムです。

大幸地区では、浅野みどり教授を責任者に、特任教員も含む運営委員会を立ちあげ、2014年10月の本実施に向けた準備を行っています。カリキュラムの具体化として、英語での講義「Introduction to healthcare system in Asia」の開講準備や、海外実地研修としてフィリピンやタイでの研修プログラムの開拓、特別講

演会の実施などを行っています。

2014年2月には、大学院生7名(保健4名、医学1名、国際開発1名、生命農学1名)とフィリピン(マニラ)を訪問し、デ・ラ・サール大学、国立フィリピン大学マニラ校、フィリピン総合病院、マザーテレサの家などで、現地の保健医療状況や生活環境の視察や大学院生との交流などをおこない、帰国後には院生による帰国報告会を開催しました。3月には、タイのチュラロンコン大学、マヒドン大学、アセアン健康開発研究所などを訪問し、今後の協力の可能性を協議してきました。

本プログラムは取り組み始めてまだ半年ほどですが、試行で参加した大学院生には大いに刺激になっています。一つ目は、海外実地研修に参加して、世界への目が広がったことで、同世代の海外大学院生との交流も活発になったようです。二つ目は、学内他研究科の大学院生(留学生を含む)との交流を通じて、異なる専門分野からの視点に触れることで視野が広がり、大学院生としての自覚が高まったことです。同時に、英語などの語学研修への意欲の高まりも見られます。このプログラムを契機に、ミャンマー出身の特任教員も迎え、大幸地区(保健学)の国際化を一層促進したいと考えています。



第4回名古屋—延世大学間学術研究交流会での集合写真(延世大学校にて開催)

## 2. 延世大学校との学術研究交流

医学系研究科(保健学)では、2010年より、韓国でも有数の伝統を誇る名門私立大学である延世大学校の保健学・看護学部門と大学院レベルでの学術研究交流を開始しました。本プログラムの目的は、学術研究交流会を開催することで、研究発表を通じて国際交流の促進を図るとともに、大学院生の国際的視野を広め、研究意欲の向上を図ること、また大学院生が相互の大学の研究室訪問を行うことで、人材交流や共同研究あるいは研究留学などへの発展を図り、国際的学術研究交流のより一層の促進を図ることです。

本交流は、名古屋大学からの提案で開始され、第1回名古屋―延世大学間学術研究交流会を、2010年11月に名古屋大学主催で大幸キャンパスにて開催しました。延世大学校からは副学長を含め教員・院生19名、名古屋大学からは教員・院生など総勢200名ほどが参加しました。第2回交流会(2011年)は延世大学校、第3回交流会(2012年)は名古屋大学での開催となり、2013年度には、第4回交流会が延世大学校で開催され、本学より教員11名、院生22名が参加し、活発な研究交流を行いました。

研究発表会を共同開催することで、大学院生が英語での口頭発表と質疑応答をする国際学会に類似した経験を積む機会となり、国際交流への意欲向上に繋がっ

ています。また研究発表会終了後には専攻別の交流懇談会も開催して、両大学間の緊密な人材交流の促進が図られています。大学院生のみならず教員も参加しているため、専攻全体としての国際交流促進となっています。本プログラムは、2011年度より文部科学省留学生交流支援制度の支援を受けて実施しています。

## 3. 学部生の看護臨床研修の国際交流

この延世大学校との学術研究交流を契機として、看護学専攻において、2011年度より看護臨床研修の相互受け入れという形で、学部生の交流も始まりました。同年には、4名の学部生を延世大学校へ派遣し、4名を名大病院などでの研修に受け入れました。看護学専攻では、さらに上海交通大学医学部看護学科とも交流覚書を結び、2名を本学に受け入れました。この国際交流には、学生も積極的で、学生独自に海外学生の受け入れ組織を立ちあげて、大学生生活の紹介スライドの作成発表や、歓迎会などの企画・運営などに積極的に関わり、国際交流の広がりがみられます。2012年度にはシンガポール国立大学医学部看護学科とも交流協定を締結し、2013年度には4名の学生が相互訪問して交流を深めました。本プログラムも2011年度より文部科学省留学生交流支援制度の支援を受けて実施しています。



[Well-being in Asia] デ・ラ・サール大学(フィリピン)での現地大学院生との交流

1871(明治 4) 年	名古屋藩評定所跡(現中区丸の内三丁目1)に公立の仮病院(1872年閉院)及び元町役所に仮医学校(1872年廃校)設置
1872(明治 5) 年	廃藩により有志きよ金で義病院として経営(1873年閉院)
1873(明治 6) 年	県民きよ金で仮病院(西本願寺別院、現中区門前町1)として経営
1873(明治 6) 年	医学講習場(西本願寺別院)設置
1875(明治 8) 年	愛知県病院と改称
1876(明治 9) 年	公立医学講習場及び公立病院と改称
1876(明治 9) 年	公立医学所と改称
1877(明治 10) 年	天王崎町(現中区栄1丁目17~18番地)に移転(7月1日病院開院式)
1878(明治 11) 年	公立医学校と改称
1881(明治 14) 年	愛知医学校及び愛知病院と改称
1901(明治 34) 年	愛知県立医学校と改称
1903(明治 36) 年	愛知県立医学専門学校として新発足
1914(大正 3) 年	中区(現昭和区)鶴舞町に新築、移転
1920(大正 9) 年	愛知医科大学に昇格
1922(大正 11) 年	愛知医科大学病院と改称
1924(大正 13) 年	愛知医科大学附属医院と改称
1931(昭和 6) 年	官立移管 名古屋医科大学・名古屋医科大学附属医院となる
1939(昭和 14) 年	名古屋帝国大学医学部の発足・名古屋帝国大学医学部附属病院と改称
1939(昭和 14) 年	名古屋帝国大学臨時附属医学専門部の設置(1949年廃止)
1943(昭和 18) 年	名古屋帝国大学航空医学研究所の設置(1946年廃止)
1944(昭和 19) 年	名古屋帝国大学附属医学専門部と改称
1944(昭和 19) 年	名古屋帝国大学医学部附属病院分院の設置(1996年本院へ統合一元化)
1946(昭和 21) 年	名古屋帝国大学環境医学研究所を設置
1947(昭和 22) 年	名古屋大学医学部・名古屋大学医学部附属医院となる
1947(昭和 22) 年	名古屋大学附属医学専門部と改称(1950年廃止)
1949(昭和 24) 年	新制名古屋大学が発足 名古屋大学医学部・名古屋大学医学部附属病院となる
1951(昭和 26) 年	医学部附属看護学校設置(1980年廃校)
1955(昭和 30) 年	医学部附属診療エックス線技師学校設置
1959(昭和 34) 年	医学部附属助産婦学校設置(1981年廃校)

1959(昭和 34)年	医学部附属無菌動物研究施設設置(1983年改組)
1961(昭和 36)年	医学部附属衛生検査技師学校設置
1962(昭和 37)年	医学部附属癌研究施設設置(1983年改組)
1965(昭和 40)年	医学部附属医真菌研究施設設置(1983年改組)
1966(昭和 41)年	医学部附属診療エックス線技師学校に専攻科設置
1969(昭和 44)年	医学部附属診療放射線技師学校と改称(1982年廃校)
1972(昭和 47)年	医学部附属臨床検査技師学校と改称(1981年廃校)
1977(昭和 52)年	名古屋大学医療技術短期大学部設置(2001年廃止)
1983(昭和 58)年	医学部附属病態制御研究施設設置
1986(昭和 61)年	医学部附属動物実験施設設置
1996(平成 8)年	医学部附属病院分院を統合
1996(平成 8)年	診療所「名古屋大学大幸医療センター」設置(2011年閉院)
1997(平成 9)年	医学部保健学科設置
2000(平成 12)年	医学部の大学院重点化完成
2001(平成 13)年	大学院医学研究科修士課程医科学専攻設置
2001(平成 13)年	医学部附属病態制御研究施設(2003年改組)と医学部附属動物実験施設(2004年改組)の所属を大学院医学研究科に変更
2002(平成 14)年	医学研究科を医学系研究科に改称し、医学系研究科に修士課程看護学専攻、 修士課程医療技術学専攻及び修士課程リハビリテーション療法学専攻設置
2002(平成 14)年	医学部附属病院に遺伝子・再生医療センター設置(2010年改組)
2003(平成 15)年	附属神経疾患・腫瘍分子医学研究センター設置
2003(平成 15)年	医学系研究科に修士課程医科学専攻医療行政コース設置
2004(平成 16)年	医学系研究科修士課程看護学専攻、修士課程医療技術学専攻及び 修士課程リハビリテーション療法学は博士課程(前期課程・後期課程)となる
2004(平成 16)年	附属医学教育研究支援センター設置
2005(平成 17)年	医学部附属総合医学教育センター設置
2008(平成 20)年	医学部附属病院に臨床研究推進センター設置(2010年改組)
2010(平成 22)年	医学部附属病院に先端医療・臨床研究支援センター設置
2011(平成 23)年	脳とこころの研究センター設置(2014年改組)
2012(平成 24)年	医学部保健学科の大学院講座化
2013(平成 25)年	附属クリニカルシミュレーションセンター(NU-CSC)設置

# 歴代医学部長

田村 春吉	TAMURA, Harukichi	1939(昭和14)年 4月 1日 ~ 1946(昭和21)年 1月31日
田村 春吉	TAMURA, Harukichi	1946(昭和21)年 1月31日 ~ 1946(昭和21)年 2月 9日 ※
戸蒔 近太郎	TOGARI, Chikataro	1946(昭和21)年 2月 9日 ~ 1952(昭和27)年 2月 9日
久野 寧	KUNO, Yasu	1952(昭和27)年 2月 9日 ~ 1954(昭和29)年 3月31日
戸蒔 近太郎	TOGARI, Chikataro	1954(昭和29)年 4月 1日 ~ 1958(昭和33)年 3月31日
山田 和麻呂	YAMADA, Kazumaro	1958(昭和33)年 4月 1日 ~ 1960(昭和35)年 3月31日
村松 常雄	MURAMATSU, Tsuneo	1960(昭和35)年 4月 1日 ~ 1962(昭和37)年 3月31日
神田 善吾	KANDA, Zengo	1962(昭和37)年 4月 1日 ~ 1964(昭和39)年 3月31日
橋本 義雄	HASHIMOTO, Yoshio	1964(昭和39)年 4月 1日 ~ 1966(昭和41)年 3月31日
小笠原 一夫	OGASAWARA, Kazuo	1966(昭和41)年 4月 1日 ~ 1967(昭和42)年 10月20日
小嶋 克	KOJIMA, Koku	1967(昭和42)年 10月20日 ~ 1969(昭和44)年 3月31日 ※
高木 健太郎	TAKAGI, Kentaro	1969(昭和44)年 4月 1日 ~ 1972(昭和47)年 4月 1日 ※
石塚 直隆	ISHIZUKA, Naotaka	1972(昭和47)年 4月 1日 ~ 1974(昭和49)年 3月31日
田内 久	TAUCHI, Hisashi	1974(昭和49)年 4月 1日 ~ 1976(昭和51)年 3月31日
加藤 延夫	KATO, Nobuo	1976(昭和51)年 4月 1日 ~ 1978(昭和53)年 3月31日
祖父江 逸郎	SOBUE, Itsuro	1978(昭和53)年 4月 1日 ~ 1980(昭和55)年 3月31日
飯島 宗一	IIJIMA, Soichi	1980(昭和55)年 4月 1日 ~ 1981(昭和56)年 7月21日
加藤 延夫	KATO, Nobuo	1981(昭和56)年 7月22日 ~ 1985(昭和60)年 7月21日
佐久間 貞行	SAKUMA, Sadayuki	1985(昭和60)年 7月22日 ~ 1987(昭和62)年 7月21日
青木 國雄	AOKI, Kunio	1987(昭和62)年 7月22日 ~ 1989(平成元)年 7月21日
永津 俊治	NAGATSU, Toshiharu	1989(平成元)年 7月22日 ~ 1991(平成 3)年 7月21日
齋藤 英彦	SAITO, Hidehiko	1991(平成 3)年 7月22日 ~ 1995(平成 7)年 7月21日
粟屋 忍	AWAYA, Shinobu	1995(平成 7)年 7月22日 ~ 1997(平成 9)年 3月31日
中島 泉	NAKASHIMA, Izumi	1997(平成 9)年 4月 1日 ~ 1999(平成11)年 3月31日
勝又 義直	KATSUMATA, Yoshinao	1999(平成11)年 4月 1日 ~ 2003(平成15)年 3月31日
杉浦 康夫	SUGIURA, Yasuo	2003(平成15)年 4月 1日 ~ 2005(平成17)年 3月31日
濱口 道成	HAMAGUCHI, Michinari	2005(平成17)年 4月 1日 ~ 2009(平成21)年 3月31日
祖父江 元	SOBUE, Gen	2009(平成21)年 4月 1日 ~ 2012(平成24)年 3月31日
高橋 雅英	TAKAHASHI, Masahide	2012(平成24)年 4月 1日 ~

※事務取扱



# 教育・研究組織

名古屋大学医学部・大学院医学系研究科は、昭和区鶴舞と東区大幸に2つのキャンパスを有し、中京地区の医学研究および医療の中核拠点として発展を遂げてきた。

附属病院を含む広範な組織では、「教育」「研究」「治療」を柱に健康の増進に寄与し人類の幸福に真に貢献するという共通の目標を掲げ、個々の専門性に特化した先端領域を追求している。

次頁からは「教育」「研究」を担う組織の概要を紹介する。

機構図	32
-----	----

役職員	33
-----	----

鶴舞キャンパス	34
---------	----

大学院医学系研究科	博士課程	
-----------	------	--

総合医学専攻	基礎医学領域	36
--------	--------	----

	臨床医学領域	38
--	--------	----

	統合医薬学領域	39
--	---------	----

研究者養成コース (MD・PhD コース、卒直後コース)	40
------------------------------	----

連携講座	41
------	----

寄附講座	42
------	----

修士課程	医科学専攻	46
------	-------	----

	医科学専攻 医療行政コース	47
--	---------------	----

医学部	医学科	48
-----	-----	----

附属施設	名古屋大学附属図書館医学部分館	49
------	-----------------	----

	附属神経疾患・腫瘍分子医学研究センター	49
--	---------------------	----

	附属医学教育研究支援センター	50
--	----------------	----

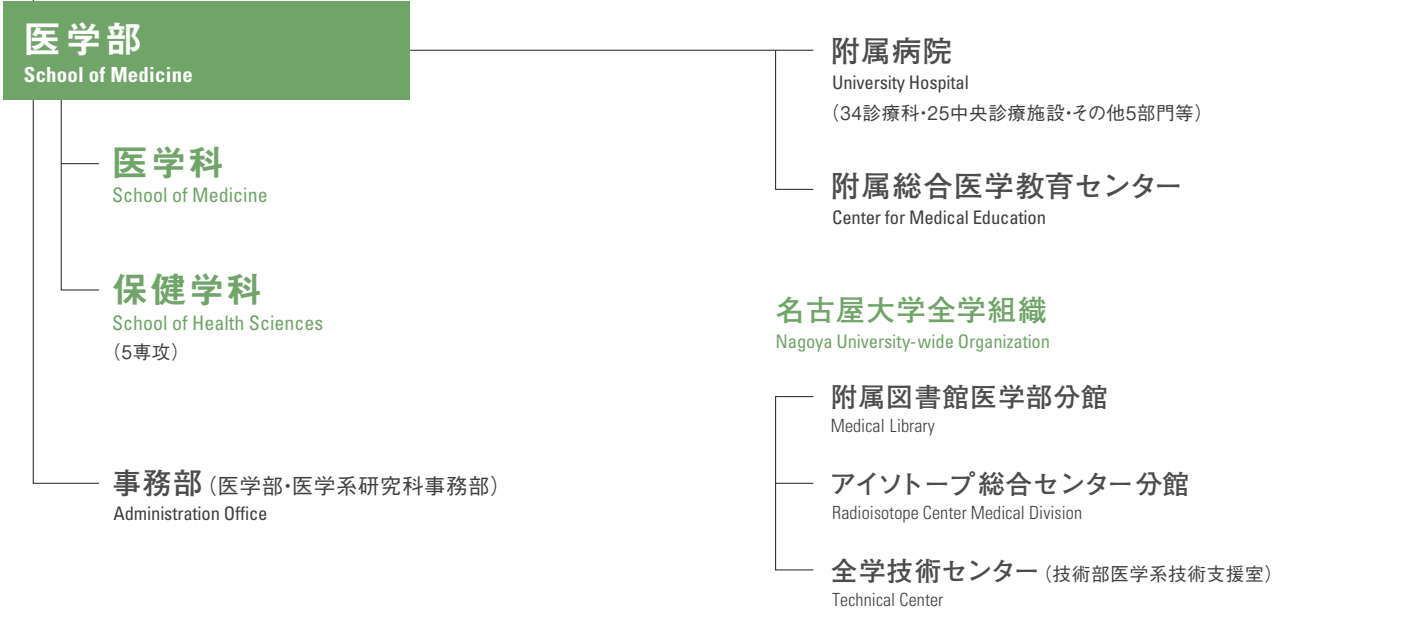
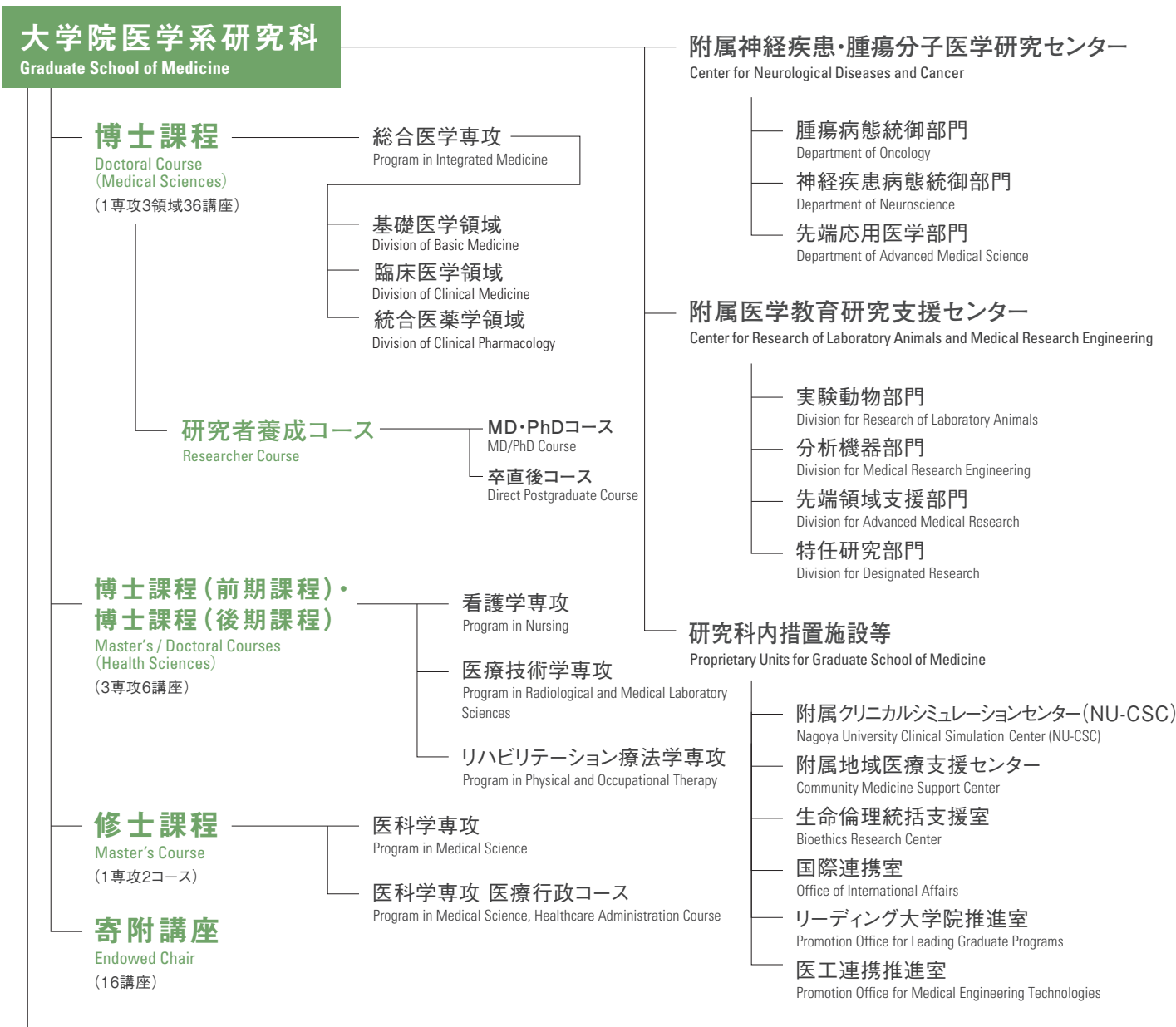
	研究科内措置施設等	50
--	-----------	----

	附属総合医学教育センター	50
--	--------------	----

大幸キャンパス	51
---------	----

大学院医学系研究科	博士課程 (前期課程)・博士課程 (後期課程)	52
-----------	-------------------------	----

医学部	保健学科	54
-----	------	----



# 役職員

## 大学院医学系研究科

医学系研究科長	Dean of Graduate School of Medicine	高橋 雅英 教授 ※	TAKAHASHI, Masahide
副研究科長(学務担当)	Vice-Dean for Medical Education	藤本 豊士 教授	FUJIMOTO, Toyoshi
副研究科長(大学院・倫理担当)	Vice-Dean for Graduate School Affairs and Ethics	大野 欽司 教授	OHNO, Kinji
副研究科長(評価担当)	Vice-Dean for Evaluation	若林 俊彦 教授	WAKABAYASHI, Toshihiko
副研究科長(施設・創薬担当)	Vice-Dean for Facilities and Drug discovery	門松 健治 教授	KADOMATSU, Kenji
副研究科長(研究・財務担当)	Vice-Dean for Research and Financial Affairs	長谷川 好規 教授	HASEGAWA, Yoshinori
副研究科長(人事労務担当)	Vice-Dean for Personnel Affairs and Labor	吉川 史隆 教授	KIKKAWA, Fumitaka
副研究科長(大幸地区担当)	Vice-Dean for School of Health Sciences	榊原 久孝 教授 ※	SAKAKIBARA, Hisataka

## 医学部

医学部長	Dean of School of Medicine	高橋 雅英 教授 ※	TAKAHASHI, Masahide
医学科長	Head of School of Medicine	高橋 雅英 教授 ※	TAKAHASHI, Masahide
病院長	Director of University Hospital	石黒 直樹 教授 ※	ISHIGURO, Naoki
保健学科長	Head of School of Health Sciences	榊原 久孝 教授 ※	SAKAKIBARA, Hisataka

## その他の施設

附属神経疾患・腫瘍分子医学研究センター長	Director of Center for Neurological Diseases and Cancer	高橋 隆 教授	TAKAHASHI, Takashi
附属医学教育研究支援センター長	Director of Center for Research of Laboratory Animals and Medical Research Engineering	門松 健治 教授	KADOMATSU, Kenji
名古屋大学附属図書館医学部分館長	Director of Nagoya University Medical Library	濱嶋 信之 教授	HAMAJIMA, Nobuyuki
アイソトープ総合センター分館長	Director of Radioisotope Center Medical Division	磯部 健一 教授	ISOBE, Kenichi

## 事務部

事務部長	Director	塩崎 英司	SHIOZAKI, Eiji
次長	Assistant Director	高下 一磨	TAKASHITA, Kazuma
総務課長	Manager, General Affairs Division	曾谷 祐一	SOTANI, Yuuichi
人事労務主幹	Supervisor, Personnel Affairs & Labor Group, General Affairs Division	鎌澤 幸彦	KAMAZAWA, Yukihiro
学務課長	Manager, Student Affairs Division	大脇 申子男	OWAKI, Kineo
経営企画課長	Manager, Management Planning Division	安田 浩明	YASUDA, Hiroaki
経理課長	Manager, Accounting Division	堂前 弘樹	DOUMAE, Hiroki
施設管理主幹	Supervisor, Facilities Control Group	佐野 立明	SANO, Tatsuaki
医事課長	Manager, Medical Affairs Division	仲井 精一	NAKAI, Seiichi
医療業務支援課長	Manager, Medical Services Support Division	武内 松二	TAKEUCHI, Shouji
大幸地区事務統括課長	Manager, General Administration Division, Daiko Campus	棚瀬 隆夫	TANASE, Takao

※は名古屋大学教育研究評議会評議員を示す。

(2014年5月1日現在)

## 鶴舞キャンパス

# 大学院医学系研究科 博士課程・修士課程

## 医学部 医学科

名古屋市昭和区の鶴舞公園に隣接する名古屋大学鶴舞キャンパスには、大学院医学系研究科の博士課程と修士課程、医学部医学科、そして附属施設が集結している。

市民に「名大病院」として親しまれる附属病院と緊密な連携を図りながら、質の高い教育と研究が行われている。

### 大学院医学系研究科 博士課程・修士課程

1955(昭和30)年に設置された名古屋大学大学院医学系研究科は、一貫して医学における学術の理論と応用を教育・研究し、学術の研究者と高度の専門技術者を養成してきた。先端・多様化した現代医学に対応した、包括的で開放的な研究環境を実現するため、2000(平成12)年までの3年をかけて4専攻への改組を行い、さらに、研究の一層の先端化を図る研究センター、教育・研究支援センター、修士課程などを充実させてきた。2013(平成25)年には、統合医薬学関連講座の創設に伴い、領域融合型教育研究を目的として、4専攻を1専攻に統合し、基礎医学領域・臨床医学領域・統合医薬学領域の3領域を設置し、現在の形に至る。

各専攻では、研究とともに該当分野における大学院教育と学部教育を兼務担当する。

### 医学部 医学科

「医の倫理を尊重し、人類の幸福に真に貢献することを誇りとする医学研究者および医療人を育成する」などの基本方針のもとに、国際化を見据えたカリキュラムを含む6年間一貫教育を行っている。また、医学の各分野にわたり広く総合的に研究を展開する。

## 鶴舞キャンパス

### 大学院医学系研究科 博士課程

総合医学専攻	基礎医学領域	36
	臨床医学領域	38
	統合医薬学領域	39
研究者養成コース (MD・PhD コース、卒直後コース)		40
連携講座		41
寄附講座		42
修士課程	医科学専攻	46
	医科学専攻 医療行政コース	47

医学部	医学科	48
-----	-----	----

附属施設	名古屋大学附属図書館医学部分館	49
	附属神経疾患・腫瘍分子医学研究センター	49
	附属医学教育研究支援センター	50
	研究科内措置施設等	50
	附属総合医学教育センター	50

## 総合医学専攻

入学定員  
161名

異なる研究分野が流動的に協力し合い、学生への教育・研究指導を進める体制を構築するため、基礎医学・臨床医学・統合医薬学を有機的に統合する単一専攻制である。

### ● 基礎医学領域

大講座名 Field	専門分野 Department	担当教授 Professor
生物化学 Biological Chemistry	分子生物学 Molecular Biology	門松 健治 教授 KADOMATSU, Kenji
	生体高分子学 Biomacromolecules	
	分子細胞化学 Molecular and Cellular Biology	(古川 鋼一 教授 FURUKAWA, Koichi)
微生物・免疫学 Microbiology and Immunology	分子病原細菌学 Molecular Bacteriology	荒川 宜親 教授 ARAKAWA, Yoshichika
	耐性菌制御学 Bacterial Drug Resistance	
	分子細胞免疫学 Immunology	磯部 健一 教授 ISOBE, Kenichi
	免疫細胞動態学 Cellular Immunology	
	ウイルス学 Molecular Virology	木村 宏 教授 KIMURA, Hiroshi
先端応用医学 (協力) Advanced Medical Science	機能分子制御学 Molecular Biochemistry	附属神経疾患・腫瘍分子医学研究センター 先端応用医学部門
	オミクス解析学 Omics Analysis	
	神経遺伝情報学 Neurogenetics	附属神経疾患・腫瘍分子医学研究センター 神経疾患病態統御部門
	疾患モデル解析学 Disease Models	附属神経疾患・腫瘍分子医学研究センター 先端応用医学部門
	システム生物学 Systems Biology	
	生物情報解析工学 Bioinformatics Analysis	工学研究科
	分子診断ナノ工学 Nanoengineered Molecular Diagnosis	
本多 裕之 教授 HONDA, Hiroyuki		
馬場 嘉信 教授 BABA, Yoshinobu		
実験動物科学 (協力) Laboratory Animal Science	実験動物科学 Laboratory Animal Science	附属医学教育研究支援センター 実験動物部門
老化基礎科学 (連携) Aging Research	老化基礎科学 Aging Research	国立長寿医療研究センター 研究所
		丸山 光生 客員教授 MARUYAMA, Mitsuo
柳澤 勝彦 客員教授 YANAGISAWA, Katsuhiko		
免疫不全統御学 (連携) AIDS Research	免疫不全統御学 AIDS Research	国立病院機構 名古屋医療センター
細胞科学 Cell Science	細胞生物物理学 Cell Physiology and Biophysics	
	イメージング生理学 Bio-Imaging	
	細胞生理学 Cell Physiology	久場 博司 教授 KUBA, Hiroshi
	分子動態学 Cell Pharmacology	
	分子薬理学 Molecular Pharmacology	(貝淵 弘三 教授 KAIBUCHI, Kozo)
神経科学 (協力) Neuroscience	神経情報薬理学 Neuroscience	附属神経疾患・腫瘍分子医学研究センター 神経疾患病態統御部門
貝淵 弘三 教授 KAIBUCHI, Kozo		
腫瘍病態学 (協力) Oncology	分子腫瘍学 Molecular Carcinogenesis	附属神経疾患・腫瘍分子医学研究センター
	腫瘍生物学 Cancer Biology	腫瘍病態統御部門
高次神経統御学 (協力) Higher Nervous Control	視覚神経科学 Visual Neuroscience	環境医学研究所
小松 由紀夫 教授 KOMATSU, Yukio		
錫村 明生 教授 SUZUMURA, Akio		

大講座名 Field	専門分野 Department	担当教授 Professor
器官系機能調節学(協力) Regulation of Organ Function	神経性調節学 Neural Regulation 環境医学研究所	山中 章弘 教授 YAMANAKA, Akihiro
	心・血管学 Cardiovascular Research	神谷 香一郎 教授 KAMIYA, Kaichiro
分子・細胞適応学(協力) Molecular and Cellular Adaptation	発生・遺伝学 Genetics 環境医学研究所	
	病態神経科学 Neuroscience and Pathobiology	山中 宏二 教授 YAMANAKA, Koji
神経生化学 (連携) Neurochemistry	神経生化学 Neurochemistry 愛知県心身障害者コロニー 発達障害研究所	中山 敦雄 客員教授 NAKAYAMA, Atsuo
		永田 浩一 客員教授 NAGATA, Koichi
機能形態学 Anatomy and Cell Biology	分子細胞学 Molecular Cell Biology	藤本 豊士 教授 FUJIMOTO, Toyoshi
	機能組織学 Functional Anatomy and Neuroscience	木山 博資 教授 KIYAMA, Hiroshi
	細胞生物学 Cell Biology	宮田 卓樹 教授 MIYATA, Takaki
	超微形態学 Ultrastructural Morphology	
病理病態学 Pathology	生体反応病理学 Pathology and Biological Responses	豊國 伸哉 教授 TOYOKUNI, Shinya
	分子病理診断学 Molecular Diagnosis	
	腫瘍病理学 Tumor Pathology	(高橋 雅英 教授 TAKAHASHI, Masahide)
	神経機能病理学 Neuropathology	
発生・再生医学 (協力) Development	分子病理学 Molecular Pathology 附属神経疾患・ 腫瘍分子医学研究センター 先端応用医学部門	高橋 雅英 教授 TAKAHASHI, Masahide
細胞工学 (連携) Cancer Genetics	細胞工学 Cancer Genetics 細胞腫瘍学 Cellular Oncology 愛知県がんセンター 研究所	関戸 好孝 客員教授 SEKIDO, Yoshitaka
		青木 正博 客員教授 AOKI, Masahiro
		稲垣 昌樹 客員教授 INAGAKI, Masaki
		葛島 清隆 客員教授 KUZUSHIMA, Kiyotaka
社会生命科学 Social Life Science	法医・生命倫理学 Legal Medicine and Bioethics	石井 晃 教授 ISHII, Akira
	環境労働衛生学 Occupational and Environmental Health	加藤 昌志 教授 KATO, Masashi
	予防医学 Preventive Medicine	若井 建志 教授 WAKAI, Kenji
	国際保健医療学・ 公衆衛生学 Public Health and Health Systems	青山 温子 教授 AOYAMA, Atsuko
	医療行政学 Healthcare Administration	濱嶋 信之 教授 HAMAJIMA, Nobuyuki
健康増進医学 (協力) Health Promotion Medicine	健康栄養医学 Human Nutrition	石黒 洋 教授 ISHIGURO, Hiroshi
	健康スポーツ医学 Sports Medicine 総合保健体育 科学センター	押田 芳治 教授 OSHIDA, Yoshiharu
	精神健康医学 Psychopathology and Psychotherapy	小川 豊昭 教授 OGAWA, Toyoaki
	健康運動科学 Exercise and Sports Physiology	石田 浩司 教授 ISHIDA, Koji
疫学 (連携) Epidemiology	疫学 Epidemiology 愛知県がんセンター 研究所	田中 英夫 客員教授 TANAKA, Hideo
		近藤 英作 客員教授 KONDO, Eisaku

## ● 臨床医学領域

大講座名 Field	専門分野 Department	担当教授 Professor
病態内科学 Internal Medicine	血液・腫瘍内科学 Hematology and Oncology	清井 仁 教授 KIYOI, Hitoshi
	循環器内科学 Cardiology	室原 豊明 教授 MUROHARA, Toyooki
	消化器内科学 Gastroenterology and Hepatology	後藤 秀実 教授 GOTO, Hidemi
	呼吸器内科学 Respiratory Medicine	長谷川 好規 教授 HASEGAWA, Yoshinori
	糖尿病・内分泌内科学 Endocrinology and Diabetes	大磯 ユタカ 教授 OISO, Yutaka
	腎臓内科学 Nephrology	松尾 清一 教授 MATSUO, Seiichi
高次医用科学 High-Technology Application of Medicine	量子医学 Radiology	長縄 慎二 教授 NAGANAWA, Shinji
	量子介入治療学 Interventional & Therapeutic Radiology	
	放射線治療学 Radiunon Oncology	
	臓器病態診断学 Pathology and Laboratory Medicine	中村 栄男 教授 NAKAMURA, Shigeo
	病態構造解析学 Diagnostic Pathology	
	がん薬物療法学 Clinical Oncology and Chemotherapy	(安藤 雄一 教授 ANDO, Yuichi)
脳神経病態制御学 Clinical Neurosciences	神経内科学 Neurology	祖父江 元 教授 SOBUE, Gen
	精神医学 Psychiatry	尾崎 紀夫 教授 OZAKI, Norio
	精神生物学 Psychobiology	
	脳神経外科学 Neurosurgery	若林 俊彦 教授 WAKABAYASHI, Toshihiko
	脳神経先端医療 開発学 Frontier Surgical Neuroscience	
	脳血管内治療学 Endovascular Neurosurgery	
頭頸部・感覚器外科学 Head and Neck and Sensory Organ Medicine	眼科学 Ophthalmology	寺崎 浩子 教授 TERASAKI, Hiroko
	感覚器障害制御学 Protective Care for Sensory Disorders	
	耳鼻咽喉科学 Otorhinolaryngology	
	認知・言語医学 Cognitive and Speech Medicine	
	顎顔面外科学 Maxillofacial Surgery	上田 実 教授 UEDA, Minoru
	咀嚼障害制御学 Protective Care for Masticatory Disorders	
病態外科学 Surgery	腫瘍外科学 Surgical Oncology	柳野 正人 教授 NAGINO, Masato
	血管外科学 Vascular Surgery	古森 公浩 教授 KOMORI, Kimihiro
	消化器外科学 Gastroenterological Surgery	小寺 泰弘 教授 KODERA, Yasuhiro
	移植・内分泌外科学 Transplantation and Endocrine Surgery	
	心臓外科学 Cardiac Surgery	碓氷 章彦 教授 USUI, Akihiko
	呼吸器外科学 Thoracic Surgery	横井 香平 教授 YOKOI, Kouhei
	小児外科学 Pediatric Surgery	内田 広夫 教授 Uchida, Hiroo
	泌尿器科学 Urology	後藤 百万 教授 GOTOH, Momokazu
運動・形態外科学 Musculoskeletal and Cutaneous Medicine	整形外科 Orthopaedics	石黒 直樹 教授 ISHIGURO, Naoki
	リウマチ学 Rheumatology	
	手の外科学 Hand Surgery	平田 仁 教授 HIRATA, Hitoshi
	皮膚病態学 Dermatology	秋山 真志 教授 AKIYAMA, Masashi
	皮膚結合組織病態学 Connective Tissue Disease and Autoimmunity	
	形成外科学 Plastic and Reconstructive Surgery	亀井 譲 教授 KAMEI, Yuzuru



大講座名 Field	専門分野 Department	担当教授 Professor
生体管理医学 Biomedical Regulation	麻酔・蘇生医学 Anesthesiology	西脇 公俊 教授 NISHIWAKI, Kimitoshi
	臨床感染統御学 Infectious Diseases	八木 哲也 教授 YAGI, Tetsuya
	救急・集中治療医学 Emergency and Critical Care Medicine	松田 直之 教授 MATSUDA, Naoyuki
病態医療学 (協力) Clinical Management Medicine	手術医療学 Operation Medicine 病院 手術部	
	細胞治療医学 Cell Therapy Medicine 病院 輸血部	松下 正 教授 MATSUSHITA, Tadashi
	病理組織医学 Anatomical Pathology 病院 病理部	
	光学医療学 Diagnostic and Therapeutic Endoscopy 病院 光学医療診療部	
	放射線医療学 Clinical Radiology 病院 放射線部	
	画像情報診断・工学 Diagnostic Medical Image Processing 情報科学研究科	
発育・加齢医学 Medicine in Growth and Aging	小児科学 Pediatrics	小島 勢二 教授 KOJIMA, Seiji
	成長発達医学 Developmental Pediatrics	
	発達・老年精神医学 Developmental and Geriatric Psychiatry	
	地域在宅医療学・老年科学 Community Healthcare and Geriatrics	葛谷 雅文 教授 KUZUYA, Masafumi
	産婦人科学 Obstetrics and Gynecology	吉川 史隆 教授 KIKAWA, Fumitaka
	生殖器腫瘍制御学 Reproductive Oncology	
	総合診療医学 Family and Community Medicine	伴 信太郎 教授 BAN, Nobutaro
周産母子医学 (協力) Maternal and Perinatal Care	周産母子医学 Maternal and Perinatal Care 病院 総合周産期 母子医療センター	
親と子どもの 精神医学 (協力) Child and Adolescent Psychiatry	親と子どもの心療学 Child and Adolescent Psychiatry 病院 親と子どもの心療科	本城 秀次 教授 HONJO, Shuji
総合管理医学 (協力) Comprehensive Ambulatory Medicine	総合医学教育学 Medical Education 医学部附属 総合医学教育センター	植村 和正 教授 UEMURA, Kazumasa
	医療の質・患者安全学 Quality and Patient Safety 病院 医療の質・安全管理部	長尾 能雅 教授 NAGAO, Yoshimasa

## ● 統合医薬学領域

大講座名 Field	専門分野 Department	担当教授 Professor
分子医薬学 Molecule Pharmacology	薬物動態解析学(協力) Molecular Pharmacokinetics 環境医学研究所	澤田 誠 教授 SAWADA, Makoto
	分子機能薬学(協力) Molecular Pharmaco-Biology	益谷 央豪 教授 MASUTANI, Chikahide
	トキシコゲノミクス Toxicogenomics	横井 毅 教授 YOKOI, Tsuyoshi
臨床医薬学 Clinical Pharmacology	医療薬学 (協力) Clinical Pharmacy 病院 薬剤部	山田 清文 教授 YAMADA, Kiyofumi
	化学療法学 (協力) Clinical Oncology and Chemotherapy 病院 化学療法部	安藤 雄一 教授 ANDO, Yuichi
	生物統計学 Biostatistics	松井 茂之 教授 MATSUI, Shigeyuki
	医薬品規制学 Regulatory science of pharmaceuticals	半田 宣弘 客員教授 HANDA, Nobuhiro
医薬品開発学 (連携) Pharmaceutical R & D	実践医薬品開発学 Practical Pharmaceutical R & D アステラス製薬株式会社	宮田 桂司 客員教授 MIYATA, Keiji 澤本 泰治 客員教授 SAWAMOTO, Taiji
	応用医薬品開発学 Applied Pharmaceutical R & D ノバルティス ファーマ 株式会社	渡邊 敏文 客員教授 WATANABE, Toshifumi 廣瀬 徹 客員教授 HIROSE, Toru
医薬品管理学 (連携) Pharmaceutical Management	統計数理学 Mathematical Statistics 統計数理研究所	椿 広計 客員教授 TSUBAKI, Hiroe 江口 真透 客員教授 Eguchi, Shinto

(2014年5月1日現在)

### MD・PhDコース

研究志向の強い医学部生が、大学院に飛び入学して、非常に早い時期に研究を体験できるコース(下図②参照)。医学部の4年次または5年次を修了時にいったん休学して大学院で指導を受け、医学博士号(PhD)の取得を目指す。その後、医学部に復学して医学士(MD)になることも可能。

#### ● 対象者

4年次または5年次を修了し、成績優秀かつ研究志向の強い名古屋大学医学部医学科生。各学年で毎年数名程度内。

#### ● 選抜方法

基礎医学セミナー指導教官の推薦を受け、委員会で審査。

### 卒直後コース

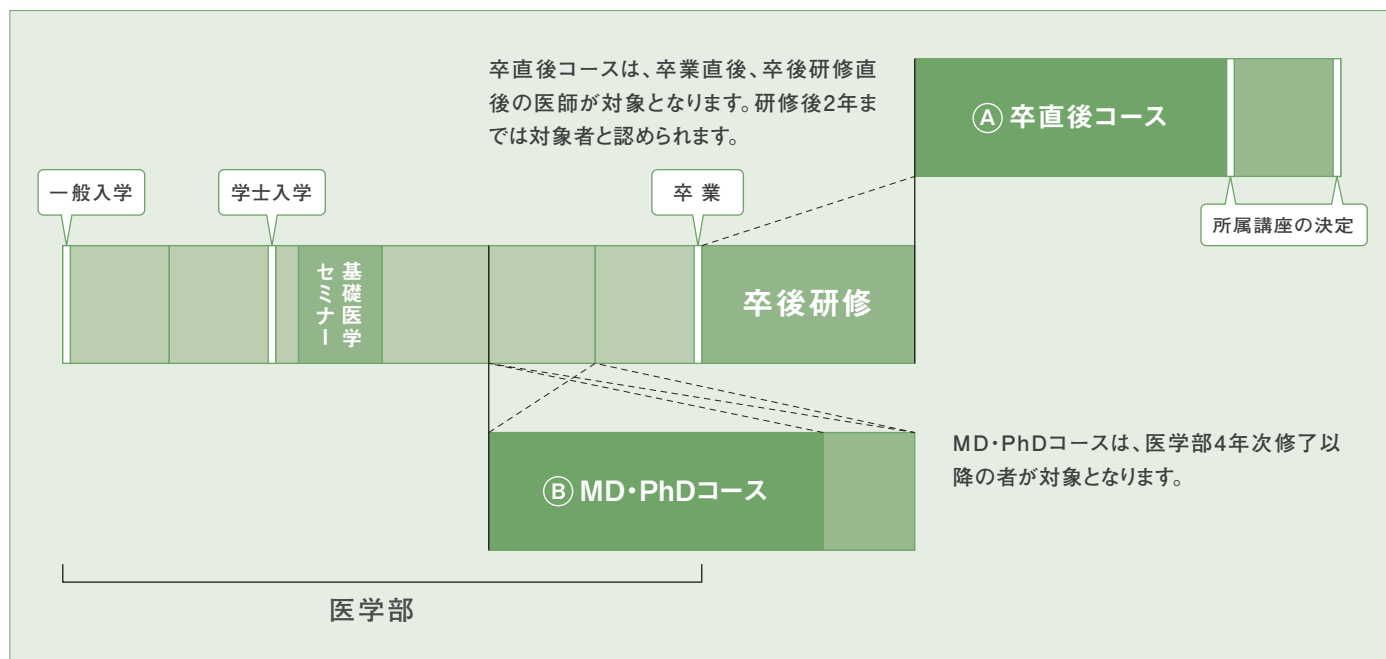
研究志向の強い医師が、医学部卒業直後に入学し、臨床業務に束縛されずに早期に研究に専念できるコース(下図①参照)。研究科長が指導責任者として、基礎講座、臨床講座と連携して総合的な教育プログラムに参画する。必要があれば経済的な援助も行われる。医学科3年次編入者は、本コースへの入学を期待する。

#### ● 対象者

医学部卒業直後、または卒後研修修了直後および、その2年後までの医師。

#### ● 選抜方法

大学院医学系研究科出願時に希望をとり、受験資格審査と並行して意志の確認、選抜を行う。願書には基礎医学セミナーまたは臨床実習の指導教官などからの推薦状を添付する。大学院医学系研究科入学者の中から毎年10名程度内。



近隣に所在する、強い特色のある優れた諸研究機関と連携して、独自性があり、より高い成果を目指す研究に取り組む連携講座。現在、名古屋大学大学院医学系研究

科全体として7つの研究機関との間での連携が進行中であり、合計で9つの連携講座がある。

## 老化基礎科学

Aging Research

所属	総合医学専攻	設置	2000年9月1日
連携先	国立長寿医療研究センター研究所		
担当教員	丸山 光生 客員教授 MARUYAMA, Mitsuo 柳澤 勝彦 客員教授 YANAGISAWA, Katsuhiko		

老化あるいは高齢期疾患に対し、老化関連遺伝子に注目して、分子・細胞レベルで起こるメカニズムを深く理解し、解明への糸口をつかむ研究の最先端を推進。また基礎研究からの臨床応用への試みとして、アルツハイマー病に対する新しい抗種(seed)医薬の開発についても積極的に取り組む。

## 免疫不全統御学

AIDS Research

所属	総合医学専攻	設置	2009年4月1日
連携先	国立病院機構名古屋医療センター		
担当教員	杉浦 互 客員教授 SUGIURA, Wataru		

AIDS/HIV感染症は、抗ウイルス薬剤治療の進歩によって予後は大きく改善されたが、まだ根治には至らない。本講座では、AIDS/HIV感染症に対しての宿主(ヒト)の対処と、ウイルスの薬剤に対する耐性化の機序を、分子レベルで解明するための研究に取り組む。

## 神経生化学

Neurochemistry

所属	総合医学専攻	設置	1999年4月1日
連携先	愛知県心身障害者コロニー発達障害研究所		
担当教員	中山 敦雄 客員教授 NAKAYAMA, Atsuo 永田 浩一 客員教授 NAGATA, Koichi		

本講座は、連携先の愛知県心身障害者コロニー内に設置されている。発達障害の予防・治療を念頭に置いて、神経系の発生と発達を制御する機構についての研究を行う。「細胞極性関連蛋白質の作用機序と神経発達」など3つの主な研究分野がある。

## 細胞工学

Cancer Genetics

所属	総合医学専攻	設置	2000年5月29日
連携先	愛知県がんセンター研究所		
担当教員	関戸 好孝 客員教授 SEKIDO, Yoshitaka 青木 正博 客員教授 AOKI, Masahiro		

がんセンター中央病院と連携して血液腫瘍の研究を行う。血液腫瘍では、その「成因や分類あるいは病気の進行」と「ゲノム(染色体)や遺伝子の異常」との間に密接な関係があり、この関係を明らかにすることを通じてヒトの腫瘍を遺伝学的・分子生物学的により深く理解することを目指す。

## 細胞腫瘍学

Cellular Oncology

所属	総合医学専攻	設置	2007年4月1日
連携先	愛知県がんセンター研究所		
担当教員	稲垣 昌樹 客員教授 INAGAKI, Masaki 葛島 清隆 客員教授 KUZUSHIMA, Kiyotaka		

がんに対する免疫応答には未知の部分が多く、臨床研究と基礎研究とをバランスよく推進することが重要である。この考えのもと、ヒトの免疫担当細胞を用いた非臨床研究、がんセンター中央病院および全国の大学などとの臨床研究が一体となった活動を推進している。

## 疫学

Epidemiology

所属	総合医学専攻	設置	1998年10月29日
連携先	愛知県がんセンター研究所		
担当教員	田中 英夫 客員教授 TANAKA, Hideo 近藤 英作 客員教授 KONDO, Eisaku		

2007(平成19)年度に愛知県は「愛知県がん対策推進計画」を策定し、その中で、がんの死亡率(75歳未満)を10年間で自然減を含めて20%低下させる目標を設定。この目標の実現に貢献するべく、本講座では分析疫学、予防介入疫学および記述疫学の研究を推進している。

## 実践薬品開発学

Practical Pharmaceutical R & D

所属	総合医学専攻	設置	2013年4月1日
連携先	アステラス製薬株式会社		
担当教員	宮田 桂司 客員教授 MIYATA, Keiji 澤本 泰治 客員教授 SAWAMOTO, Taiji		

我が国に本部をもつ製薬企業(アステラス製薬株式会社)から教員を招へいし、実際に行われる医薬品開発についてその基礎から出口に至るまでの一連の流れを教育し、また研究所などで行われる開発の実際を教育する。

## 応用医薬品開発学

Applied Pharmaceutical R & D

所属	総合医学専攻	設置	2013年4月1日
連携先	ノバルティス ファーマ株式会社		
担当教員	渡邊 敏文 客員教授 WATANABE, Toshifumi 廣瀬 徹 客員教授 HIROSE, Toru		

海外に本部を置く製薬企業(ノバルティス ファーマ株式会社)から教員を招へいし、国際的立場から創業の世界の潮流を教育し、また、治験の国際協調などの動向を教育する。なお、連携講座に所属する大学院生に対しては医学系研究科の専任教員が副指導教員となり複数指導体制によって教育研究指導に当たる。

## 統計数理学

Mathematical Statistics

所属	総合医学専攻	設置	2013年4月1日
連携先	統計数理研究所 他		
担当教員	椿 広計 客員教授 TSUBAKI, Hiroe 江口 真透 客員教授 EGUCHI, Shinto		

統計数理学分野は生物統計の基礎となる統計数理を教育・研究するものであり、我が国で人材不足が深刻な生物統計学者の育成を下支える役割も担う。なお、連携講座に所属する大学院生に対しては医学系研究科の専任教員が副指導教員となり複数指導体制によって教育研究指導に当たる。

(2014年5月1日現在)

奨学を目的とした民間企業などからの寄附金により、名古屋大学の主体性のもとに設置される講座。それぞれのテーマに沿って、教育・研究の豊富化や活発化が図られる。

ている。講座の名称はそこでの教育・研究のテーマを示し、寄附者が希望した場合は、寄附者名がつけられる。大学院医学系研究科には、現在16の寄附講座がある。

## 腎不全総合治療学寄附講座

Department of Renal Replacement Therapy

設置 2010年2月1日

担当教員 伊藤 恭彦 (寄附講座教授) ITO, Yasuhiko

日本で30万人を超えた末期慢性腎不全患者に、血液透析、腹膜透析、腎移植の利点を生かす総合的腎不全管理を行うことは、強い社会的ニーズである。我々は2005年よりこの目的で治療研究を推進。2010年より現在の講座名で、当地区の腎不全医療の活性化を計り、また当地区で確立してきている教育プログラムを全国の医療関係者にも展開し、より理想的な総合的腎不全管理を目指して、腹膜透析を取り入れた研究・教育・臨床で活動している。

## 代謝病態学寄附講座

Department of Metabolic Medicine

設置 2010年10月1日

担当教員 濱田 洋司 (寄附講座准教授) HAMADA, Yoji

生活習慣病は世界的に重大な社会問題であり、特に注目されるメタボリックシンドロームは、内臓肥満を基礎として動脈硬化症の危険因子が重積した病態である。本講座はこのメタボリックシンドロームを主な研究対象とし、その分子機構の解明および新たな治療標的の発見と薬剤の開発を目的とする。このテーマは同時にほかの生活習慣病の病態解明にもつながり、それらの画期的な治療法の確立も目指す。

## 分子心血管病学(興和)寄附講座

Molecular Cardiovascular Medicine  
Endowed Chair:Kowa

設置 2014年7月1日

担当教員 大内 乗有 (寄附講座教授) OUCHI, Noriyuki

近年、生活習慣病は増加の一途をたどり、その治療法確立は社会的ニーズの高い課題である。本講座では、メタボリックシンドローム・動脈硬化・虚血性疾患をはじめとした生活習慣病の病態生理、特にアディポサイトカイン・マイオカインなどの分泌因子の生理病態学的意義を細胞・個体レベルで解明。これら独自の基礎研究をベースとして、新しい治療法確立と、創薬開発につながる道筋を拓くことを目指す。

## 移植免疫学寄附講座

Department of Transplant Immunology

設置 2012年4月1日

担当教員 小林 孝彰 (寄附講座教授) KOBAYASHI, Takaaki

「安心、安全かつ効果的な移植医療」を提供するために、「基礎から臨床まで」「医療の現場を支える基盤の整備と強化」を目指す。免疫機能制御学寄附講座で得られた知見を生かし、臨床に直結した基盤研究を推進し、確実な基礎研究を確立する。将来の人材育成に積極的に関わり、免疫学、薬学、工学、農学まで幅広い研究コミュニティを創設し、病院、研究施設、企業との共同研究を全国レベルで展開する。

## 地域医療教育学寄附講座

Department of Education for Community-Oriented Medicine

設置 2009年10月1日

担当教員 安井 浩樹 (寄附講座准教授) YASUI, Hiroki

21世紀の新たな地域医療構築と、地域指向型医療人 (Community-Oriented Healthcare Provider) の育成を目指して、愛知県等の寄附講座として開講した。「地域の医療ニーズ調査・政策提言」「啓発活動・相互理解の推進」「地域ニーズ指向型医療人の育成」を活動の3本の柱とする。近年は医学部にとどまらず、薬学、看護学、リハビリ、社会福祉等の学部と協力して、地域や病院における多職種連携教育 (Interprofessional Education: IPE) による、地域医療教育体制の構築にも取り組んでいる。

## 小児集中治療学寄附講座

Department of Pediatric Intensive Care Medicine

設置 2011年11月1日

担当教員 筑紫 聡 (寄附講座講師) TSUKUSHI, Satoshi

現在小児医療専門領域の集学的医療を提供するために人材育成が課題となっている。小児科・整形外科・脳神経外科の各診療領域において小児医療の専門スタッフを養成するための講座である。救急救命患者管理 (PICU)、重度外傷、小児がんなど広範囲にわたり小児医療に対応できる人材の育成を行う。卒後教育を原則とし①若手教育と人材確保 ②県内専門施設のレベルアップ ③一般市民県民への情報公開と現状把握 を行っていく。

## 障害児(者)医療学寄附講座

Department of developmental disability medicine

設置 2011年11月1日

担当教員 三浦 清邦 (寄附講座教授) MIURA Kiyokuni

「愛知県地域医療再生計画」に基づき愛知県の寄附により設置された本講座の目的は、不足している障害児(者)医療に従事する医師を小児科・整形外科・児童精神科の3診療科が協力して養成することである。本講座の対象は小児期発症の脳性麻痺・重症心身障害、発達障害等の児(者)である。すべての医者が障害児(者)医療を理解し、差別のない医療環境を実現するために、学生、若手医師への教育、社会への啓発活動を行う。

## 精神医療学寄附講座

Department of Mental Health

設置 2011年11月1日

担当教員 入谷 修司 (寄附講座教授) IRITANI, Shuji

この講座は、愛知県の地域医療再生計画に基づいて県からの依頼・要請によって設立されたものであり、地域医療の再生と人材育成を主たる目的として設置された。この講座の基本的理念は「生物・心理・社会的側面に配慮し、実証的データと患者・家族のニーズに基づく精神医療の実践」であり、愛知県の医療行政と連携した地域精神医療への貢献を目的とする。

## 地域総合ヘルスケアシステム開発寄附講座

Department of Development for Community-oriented Healthcare System

設置 2012年3月1日

担当教員 岡崎 研太郎 (寄附講座講師) OKAZAKI, Kentaro

本講座は、岐阜県中津川市をモデル地区として、行政、地域の医療・ケア従事者、名古屋大学大学院医学系研究科が協同して、地域総合ヘルスケアシステムを構築することを目的としている。保健、医療、介護・福祉の各分野が一貫した構想の下、関連する他職種が連携して住民へのサービスを提供すること、さらにそのシステムの中で他職種連携医療教育を実践し、地域親和性の高い医療人を育成することが活動の指針となる。

## 肺高血圧先端医療学寄附講座

Department of Advanced Medicine in Cardiopulmonary Disease

設置 2012年4月1日

担当教員 近藤 隆久 (寄附講座教授) KONDO, Takahisa

難治性疾患である肺高血圧症の病態解明と新規治療法の評価・開発が本講座の使命である。肺高血圧症は予後不良と考えられてきたが画期的な新薬が次々登場し、早期発見・早期治療の必要性が唱えられ、本疾患の教育・啓蒙活動は急務の課題である。本疾患は、循環器疾患・膠原病などの基礎疾患と並行して治療しなければならないことも多く、他科の専門医との連携は不可欠である。本講座は、基礎研究による病態解明ならびに関連施設も含めた治療システムを構築し、肺高血圧症に対する治療体系確立を目指している。

## 地域包括ケアシステム学 (スギ薬局グループ) 寄附講座

Department of Comprehensive Community Care Systems

設置 2012年10月1日

担当教員 鈴木 裕介 (寄附講座准教授) SUZUKI, Yusuke

超高齢社会の根幹を支える今後の地域ケアの姿として、長年住み慣れた地域において、医療・介護・予防および生活支援を地域全体でサポートするシステムを構築することが地域包括ケアの概念である。本講座は「地域包括ケア」に特化した日本で唯一の大学院講座として、今後様々な研究・教育・ヘルスプロモーション活動を通じて、超高齢社会における個別性と汎用性を重視した地域包括ケアの仕組み作りにも寄与することを行動目標としている。

## 下肢関節再建学寄附講座

Department of Hip and Knee Reconstructive Surgery

設置 2013年4月1日

担当教員 長谷川 幸治 (寄附講座教授) HASEGAWA, Yukiharu

高齢者の増加に伴い運動器疾患による機能低下が急増している。本講座は特に歩行障害をきたす下肢関節の変性疾患(変形性股関節症・変形性膝関節症)、大腿骨近位部骨折の病態研究や総合的治療を研究目的としている。関連病院と多施設研究によって人工股関節全置換術、人工膝関節全置換術、骨切り術などの安全で正確な治療法の確立・教育をおこなう。ロコモティブ症候群に対する社会への啓蒙・QOL向上の運動プログラム開発も行う。

## 循環器・腎臓・糖尿病(CKD) 先進診療システム学寄附講座

Department of CKD Initiatives

設置 2013年11月1日

担当教員 安田 宜成 (寄附講座准教授) YASUDA, Yoshinari

新たな国民病として注目される慢性腎臓病(CKD)や生活習慣病の重症化を抑制するため、循環器内科、腎臓内科、糖尿病・内分泌内科と緊密な連携の下で、先進的なCKD診療システムを構築する。また診療情報と生体試料を組み合わせたCKD疾患データベースを構築するとともに、CKD領域における先端的な基礎ならびに臨床研究を融合した新たな研究分野を創出し、血管障害重症化を抑制し、末期腎不全や心血管疾患を予防するための新たな治療法の確立を目指す。これらの成果を通じて、広く国民の健康増進に貢献する。

---

---

## 難治性神経疾患治療学寄附講座

Department of therapeutics for intractable neurological disorders

---

設置 2013年11月1日

担当教員 飯島 正博 (寄附講座講師) IIJIMA, Masahiro

---

免疫機序の関与が知られる難治性神経疾患の病態解明と新規治療法の開発を目的に設置された講座。慢性炎症性脱髄性多発根ニューロパチー(CIDP)、MAG抗体陽性ニューロパチー、Crow-Fukase症候群などの難治性末梢神経疾患の臨床病理学的解析から、病態の解明を目指す。また治療抵抗性や難治化を規定する不可逆性の軸索障害機序を疾患動物モデルにより解析し、新たな治療標的の探索と新規治療の有効性の検証を行っている。

---

## 睡眠医学寄附講座

Department of Sleep Medicine

---

設置 2014年4月1日

担当教員 大竹 宏直 (寄附講座准教授) OHTAKE, Hironao

---

厚生労働省が実施した疫学調査によると、成人の21.4%が不眠を訴え、14.9%が日中の眠気を自覚している。さらに、日本における睡眠障害の経済損失は医療費を含まない額で約3兆5000億円、医療費を含むと約5兆円と試算されている。

本講座では、睡眠医学教育により次世代の睡眠医療に携わる人材の育成、睡眠に関する正しい知識の普及、睡眠障害に対し適切な医療の開発と提供、睡眠医療ネットワーク拠点としての役割の達成に取り組んでいく。

---

## 先進循環器治療学寄附講座

Department of Advanced Cardiovascular Therapeutics

---

設置 2014年6月1日

担当教員 新谷 理 (寄附講座准教授) SHINTANI, Satoshi

---

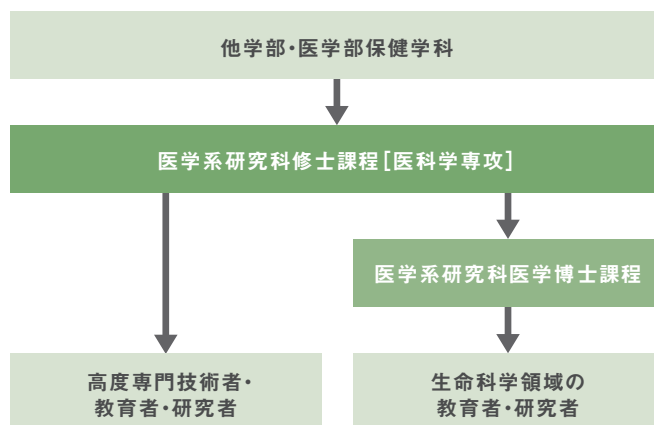
我が国における生活習慣の変化や高齢化社会の到来により、心疾患患者数は増加し、さらに重篤化している。本寄附講座は、難治性不整脈や重症心不全に対する病態生理の解明および非薬物(デバイス)治療の有効性を検証することにより、新規治療戦略の構築を目的としている。さらに、医療関係者を対象にしたセミナーや市民公開講座を開催し、医学教育分野にも貢献する。

(2014年7月1日現在)

## 医科学専攻

入学定員  
20名

医・歯・獣医学科以外の学部を卒業した上でその分野と医学分野とを融合的に探求しようとする学生に、モデルコースを設定して医学の基礎と応用法を学ばせる専攻。卒業後、技術者・教育者などを目指す、または医学博士課程に進んだ上で教育者・研究者などを目指す(右図参照)ための高度な専門知識・技術を教育する。



## 履修のモデルコース

コース名	主要科目	内容
遺伝子医学コース	生化学 病理学 免疫学	遺伝子治療、遺伝子診療など分子生物学と臨床医学の接点にある研究課題について、新しいベクターの導入法、有効な診断法などの研究を行い、これらの研究・技術開発に携わる人材の養成を目的とする。
細胞医学コース	解剖学 生理学 薬理学	細胞の微細構造と機能の連関、細胞の刺激受容・応答機構、細胞内シグナル伝達機構、細胞への薬剤作用機構等の分子メカニズムあるいは細胞システムとしての組織や個体の機能や情報伝達機構の研究を行い、これらの研究・技術開発に携わる人材の養成を目的とする。
医用工学・ 医用情報学コース	医療情報学 生理学	広く医療および医学研究に用いられている機器の製造・開発の関連産業、あるいは製造食品産業などにおける生理学・薬理学・病理学・解剖学・生体工学などの研究に従事する研究・技術者のほか病院における、メディカルエレクトロニクス・メディカルエンジニアリング・補綴機器開発・医用情報管理に従事する医科学の専門的技術と知識を有する高度技術者の養成を目的とする。
医療薬学コース	医療薬学	大学薬学部卒業者であって、医学・医療の専門的知識を要する臨床治験をコーディネートするクリニカルリサーチコーディネーター、治験の評価や監査を行うモニタリング・監査担当者、あるいは薬物療法を主体に患者にファーマシューティカルケアを行う臨床薬剤師の養成を目的とする。
人間生態環境学コース	微生物学 免疫学	人間は絶えず微生物・寄生虫との戦いの中で健康を保ち、生命を維持してきた。効果の高い抗生物質・駆虫薬の発見により人類は、感染を克服できるかに見えたが、耐性菌による難治感染症の出現、アトピーの多発など、新たな問題を生じている。一方、環境ホルモンやオゾン層破壊のような地球環境変動と健康の問題が浮上してきた。人間と微生物・寄生虫やさまざまな環境因子との関係を生態系として考え、食品産業・健康医療産業・行政分野で活躍できる人材の養成を目的とする。
健康増進・ スポーツ医学コース	社会医学 生理学	高度情報化社会や車社会への移行にともなって生活習慣病といわれる病気が増えている。その予防・克服のために運動療法が使われるようになり、主治医と密接に連携して適切な処方指導のできる人材の需要が高まっている。また、質の良い活動的な老後人生への意欲が高まるなか、福祉施設でこれらの人材の需要も強くなってきた。これらの人材の養成を目的とする。
医療マネジメント学コース	社会医学 医療情報学	医療関連企業の経営や国または地方自治体の行政、あるいは国際協力事業などの業務においてリーダーシップを発揮するために、医学および医療の基礎知識を有し、なおかつ、医療システム・医療経営管理などマネジメントの何たるかを知り、社会医学的研究方法に通じた職業的専門家の養成を目的とする。



## 医科学専攻 医療行政コース

### Young Leaders' Program (YLP)

入学定員  
10名

Young Leaders' Program (YLP)は、アジアおよびヨーロッパなどの将来のナショナルリーダーの養成に貢献するとともに、日本に対する理解を深めることを通じて、世界各国指導者層の間にネットワークを創り、日本を含む諸国間の友好関係の構築、政策立案機能の向上に寄与することを目的とするもので、日本政府(文部科学省)の国費外国人留学生制度のひとつである。

開講時期は10月で修学期間は原則1年、修了時に「修士」の学位を授与する。講義はすべて英語で行っている。欧米ともアジア諸国とも交流の深い日本の利点を活用して、人的ネットワークを創造できる将来のナショナルリーダー育成にふさわしい多彩なカリキュラムを組んでいる。その例としてあげられるのが、医療行政にかかわりのある各分野の専門家による特別講義、インターンシップ、学外研

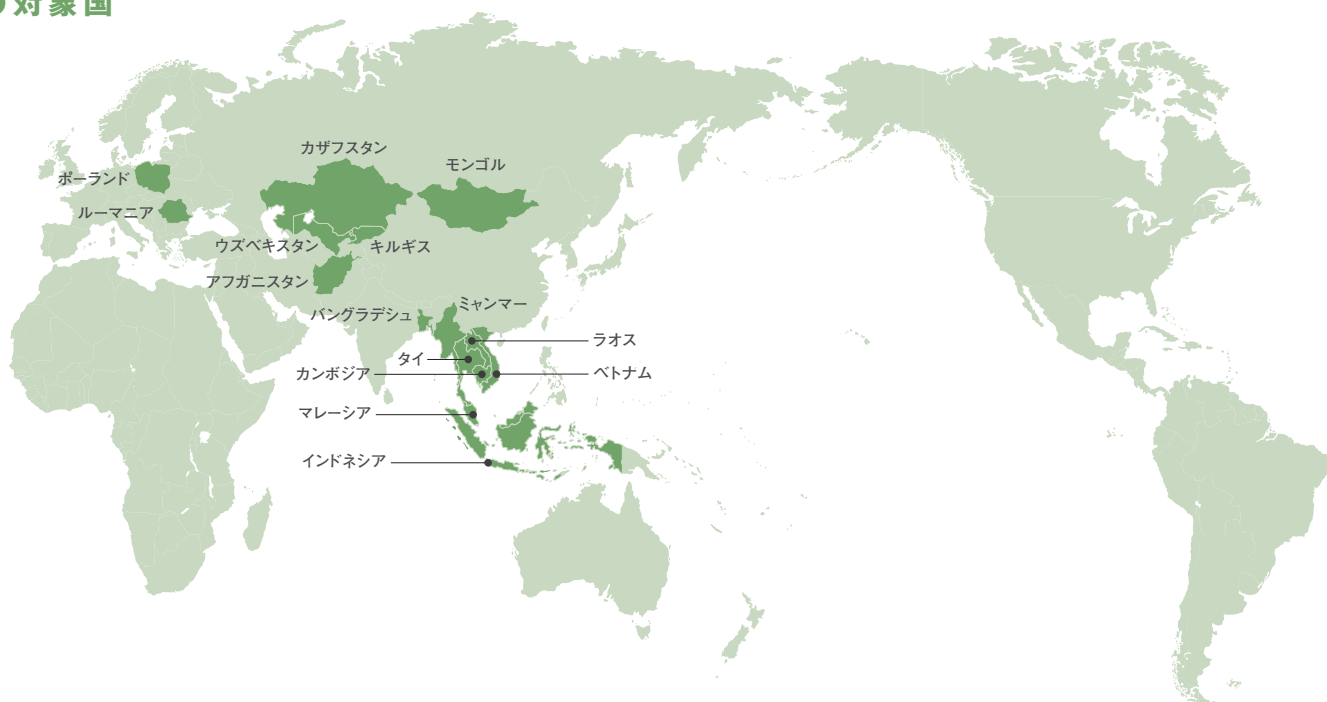
修であり、海外講師による講演もたびたび実施している。

Young Leaders' Program (YLP)のもうひとつの特徴は論文作成に重点を置いていることである。1年という極めて短い期間に修士論文を英語で書きあげ、英文で発行されている国際的ジャーナルに投稿することを学生に求めている。国際的ジャーナルに受理されるレベルの論文を作成することを目標として論文の書き方を体得し、論文のプレゼンテーションを行う能力を養うことができるようにカリキュラムを設定している。修士論文が国際的ジャーナルに受理されれば本人のみならず、名古屋大学・留学生の出身国にとっても、また、情報のシェアという観点から見れば、世界的にも貴重な財産となり得るからである。

本プログラムの修了生たちは、出身国の保健省など医療分野を担当する省庁や、WHO、世界銀行などの国際機関で活躍している。

Young Leaders' Program (YLP)の対象国は下図の15カ国であり、募集は対象国の在外公館を通してのみ行っている。(名古屋大学への直接応募は行っていない)

### ● 対象国



### Young Leaders' Program (YLP)について詳しくは

▶ <http://www.med.nagoya-u.ac.jp/ylp/jp/index.html>

名古屋大学医学部医学科は、豊かな人間性・高い倫理性・科学的論理性をそなえ、創造性に富む医師・医学研究者を養成することを目標とした、6年間一貫教育の学科。

1998年～2000年に行われた大学院医学系研究科の

改組を受けて、医学部教員はすべて大学院教員が兼務。高い専門性を持つ医師・研究者でもある大学院教員たちが、医学科学生のために作られた詳細な授業計画(シラバス)に則って、充実した教育を行っている。

## ●カリキュラム

1年生	前期	<b>全学教育科目</b> (講義・実習・演習) [基礎科目(理系・文系・全学)] [教養科目(理系・文系・全学)]	<b>医学入門</b>
	後期		
2年生	前期	<b>基礎医学</b> (講義・実習)	
	後期		
3年生	前期	<b>基礎医学セミナー</b>	
	後期		
4年生	前期	<b>臨床医学</b> (チュートリアル・講義・基本的臨床技能実習)	<b>社会医学(講義)</b>
	後期		
5年生	前期	<b>臨床実習</b>	<b>臨床病理学実習</b>
	後期		
6年生	前期	<b>卒業試験</b>	
	後期		

## 附属施設

鶴舞キャンパスに医学部分館、大幸キャンパスに保健学図書室があり、医学部・医学系研究科の学生、院生、研究者、附属病院の医療関係者を主な利用対象者とする。従来の図書館資料の提供のほかに電子ジャーナル、電子教科書、各種データベースなど新しい電子資料の導入、各種ガイダンスや講習会開催、PCコーナーの設置、Nagoya Journal of Medical Scienceおよび欧文業績録の編集とwebでの公開など、教育・研究の支援サービスを提供している。

## 名古屋大学附属図書館医学部分館

医学部分館4階にある医学部史料室では、名古屋大学医学部の歴史を東海地区のなかで位置づけ将来を展望する場として、医学部および関連資料を展示・保存し、webでの公開とともに、企画展を開催している。

### 附属図書館医学部分館 独自ホームページ

▶ <http://www.med.nagoya-u.ac.jp/medlib/>

### 附属図書館医学部分館保健学図書室ホームページ

▶ <http://health.met.nagoya-u.ac.jp/LIB/>

### 近代医学の黎明デジタルアーカイブ

▶ <http://www.med.nagoya-u.ac.jp/medlib/history/>

## 附属施設

神経疾患と悪性腫瘍という、2つの特定領域の医学研究の発展を図るセンター。多角的なアプローチによる発症機序の解明と、それを基盤とする革新的な分子診断・治療

## 附属神経疾患・

## 腫瘍分子医学研究センター 2003年4月1日設置

法の開発など、社会的要請の強い研究を系統的に推進し、得られた成果を高度先端医療へ橋渡しする、国際的にも存在意義の高い拠点を目指す。

部門	分野	概要	担当教員
<b>腫瘍病態統御部門</b> Department of Oncology 遺伝子変異による発癌機構や癌細胞の浸潤・転移の分子機構を解明する。	分子腫瘍学 Division of Molecular Carcinogenesis	がんの分子病態を統合的に解明し、難治がんの革新的診断・治療法を開発する。	高橋 隆 (教授) TAKAHASHI, Takashi
	腫瘍生物学 Division of Cancer Biology	がん遺伝子・がん抑制遺伝子による発癌の分子メカニズムを解明する。	千賀 威 (准教授) SENGA, Takeshi
<b>神経疾患病態統御部門</b> Department of Neuroscience 神経細胞の発生・分化および神経筋疾患の分子機序に関する研究を行う。	神経情報薬理学 Division of Neuroscience	神経細胞の極性形成・軸索ガイダンス・シナプス形成の分子機構を解明する。	貝淵 弘三 (教授) KAIBUCHI, Kozo
	神経遺伝情報学 Division of Neurogenetics	神経筋接合部の病態分子機構解明と病態制御研究を行うとともに各種神経疾患におけるスプライシング異常症の分子機構を解明する。	大野 欽司 (教授) OHNO, Kinji
<b>先端応用医学部門</b> Department of Advanced Medical Science 悪性腫瘍・神経変性疾患の病態解明・モデル動物開発・診断と治療法開発を行う。	分子病理学 Division of Molecular Pathology	遺伝子改変マウスを用いた個体レベルでの血管新生、神経新生および発がんの分子機構の研究を行う。	高橋 雅英 (教授) TAKAHASHI, Masahide
	機能分子制御学 Division of Molecular Biochemistry	癌細胞や神経細胞の増殖・分化・死の制御機構を解明し、難病の新しい治療法を開発を目指す。	古川 鋼一 (教授) FURUKAWA, Koichi
	疾患モデル解析学 Division of Disease Models	遺伝子組み換えマウスなどを用いて、疾患モデル動物を作製し、その病因解明と治療法の確立を目指す。	武井 佳史 (准教授) TAKEI, Yoshifumi
	オミクス解析学 Division of Omics Analysis	ゲノム情報を始めとする転写、代謝、タンパク質発現などのオミクス情報を活用し、疾患を多面的に捉えて理解する事をめざす。	中川 善之 (准教授) NAKAGAWA, Yoshiyuki
	システム生物学 Division of Systems Biology	数理モデルに基づき疾患をシステムの観点から包括的に捉えるためのデータ解析法を開発する。	島村 徹平 (特任准教授) SHIMAMURA, Teppei

## 附属施設

## 附属医学教育研究支援センター

2004年5月1日設置

4部門からなる本センターは、約25年前に設立された実験動物部門と分析機器部門を母体とし、2004年に統合された。研究設備の集約と、技術職員の集中配置によ

り、高度化・多様化する研究ニーズに対応。大学院医学系研究科と医学部の教育・研究を広く支援している。

部門	概要
実験動物 Division for Research of Laboratory Animals	大学院医学系研究科と附属病院とで必要とされる動物実験を集中的に管理する部門。動物福祉の観点から適正で、なおかつ科学的に評価される動物実験が可能な環境を整えている。
分析機器 Division for Medical Research Engineering	大学院医学系研究科における、各種分析・計測機器の共同利用のための部門。研究室ごとに機器を分散させずに一カ所に集中させることで、最先端機器をより有効に活用できる。名古屋大学他学部・学外からも利用可能。
先端領域支援 Division for Advanced Medical Research	将来の基礎系後継者養成を目的とする部門。
特任研究 Division for Designated Research	大学院医学系研究科における研究・教育の積極的かつ機動的な展開・推進および充実を図るため、外部からの受け入れ資金を活用して形成する部門。

## 附属施設

## 研究科内措置施設等

名称	概要	設置年月	担当教員
附属クリニカルシミュレーションセンター Nagoya University Clinical Simulation Center (NU-CSC)	医学生向きの基本的な臨床技能や態度教育に加え、最先端の外科診断・治療訓練等が行われ、年間2,000件弱、延べ20,000人が利用する。最新鋭のシミュレータやトレーニングマシンが揃い、設備や機器の充実度は国内トップクラスである。地域医療に携わるあらゆる医療職の卒後研修・専門研修から生涯研修への貢献を理念に様々な取り組みを行っている。	2013年4月1日設置	植村 和正(教授) UEMURA, Kazumasa
附属地域医療支援センター Community Medicine Support Center	愛知県再生医療計画の一環として、地域の医療に貢献すべく設立した。現在は、高齢社会を支えるケアマネジャーをはじめとする地域の多職種の医療知識向上に注力している。	2010年4月1日設置	植村 和正(教授) UEMURA, Kazumasa
生命倫理統括支援室 Bioethics Research Center	研究者が倫理的に適切な研究を実施するための支援を行っている。また、日常の臨床で遭遇する様々な倫理的問題について医療スタッフを支援する試みを行う。近年の医学の発展がもたらす倫理・法・社会的問題について多角的視野から学際的研究を行っている。	2014年4月1日設置	飯島 祥彦(特任講師) IJIMA, Yoshihiko
国際連携室 Office of International Affairs	医学部・医学系研究科と医学部附属病院、その他関連施設の国際関連業務を担当し、提携校を中心とした学術交流、教員学生交流、共同教育、共同研究等、横断的に全体調和を考えた取り組みを行う。	2013年5月1日設置	粕谷 英樹(准教授) KASUYA, Hideki
リーディング大学院推進室 Promotion Office for Leading Graduate Programs	文部科学省による博士課程教育リーディングプログラムに採択された学位プログラムを推進し、俯瞰力及び独創力を備え、広く産官学にわたりグローバルに活躍することができるリーダーを育成する。	2014年4月1日設置	高橋 雅英(研究科長) TAKAHASHI, Masahide
医工連携推進室 Promotion Office for Medical Engineering Technologies	超解像共焦点顕微鏡、集束イオンビーム・走査電子顕微鏡、細胞イメージングシステムといった共通機器を置き、最先端の工学と医学が融合する拠点となる。今後、企業の参画なども図り、メディカルデバイス創製プラットフォームとして機能することを目指す。	2014年4月1日設置	高橋 雅英(研究科長) TAKAHASHI, Masahide

## 附属施設

## 附属総合医学教育センター

(附属病院 卒後臨床研修・キャリア形成支援センター)

2005年8月1日設置

医学部と附属病院のすべての医療職の卒前、卒後、そして生涯教育の統括的役割を担っている。業務は医学科・保健学科の教員支援、附属病院における医科及び歯科

研修医の卒後臨床研修の実施と管理、病院職員教育、附属病院及び関連病院の指導医のための講習会開催などからなり、若手医師のキャリア支援も行う。

担当教員 植村 和正(教授) UEMURA, Kazumasa

## 大幸キャンパス

# 大学院医学系研究科 博士課程(前期課程)・博士課程(後期課程)

## 医学部 保健学科

名古屋市東区の名古屋大学大幸キャンパスには、  
大学院医学系研究科博士課程（前期課程）・博士課程（後期課程）と  
医学部保健学科がある。

医学科や附属病院などと連携しながら、  
看護・医療技術・リハビリテーションという  
コメディカル分野の教育・研究を総合的に推進している。

### 大学院医学系研究科

#### 博士課程（前期課程）・博士課程（後期課程）

医療テクノロジーや社会構造の進展にもなって変化する保健医療システムにおいて、高度な専門知識をもとに、臨床・管理・政策立案などでリーダーシップを発揮しうる医療従事者の養成を進めるとともに、学際的かつ先駆的な研究によって、保健科学分野における学術研究を推進する優れた研究者・教育者の養成にも重点を置く。

### 医学部

#### 保健学科

変化する社会情勢のもと、コメディカル分野も高度化・複雑化し続けている。それに対応し、医療技術科学を学問領域として確立させることを基本姿勢として、優れた医療技術者・教育者・研究者を育成することを目指す。

## 大幸キャンパス

大学院医学系研究科	看護学専攻	52
博士課程（前期課程）・ 博士課程（後期課程）	医療技術学専攻	52
	リハビリテーション療法学専攻	53
医学部 保健学科		54

## 看護学専攻

人間の尊厳を尊重し、高度な専門性を保有する保健医療専門職業人を養成する。さらに医療技術科学分野において、エビデンスに基づいた学問を構築するための独創的かつ探求心に富む研究者・教育者の養成も目指す。

入学定員 [前期] 18名 [後期] 6名

前期課程	後期課程	担当教授	
<b>基礎・臨床看護学講座</b> Fundamental and Clinical Nursing	<b>基礎・臨床看護学講座</b> Fundamental and Clinical Nursing	山内 豊明 教授 太田 勝正 教授 池松 裕子 教授 安藤 詳子 教授 藤本 悦子 教授 本田 育美 教授	YAMAUCHI, Toyoaki OTA, Katsumasa IKEMATSU, Yuko ANDO, Shoko FUJIMOTO, Etsuko HONDA, Ikumi
<b>健康発達看護学講座</b> Nursing for Developmental Health	<b>健康発達看護学講座</b> Nursing for Developmental Health	榊原 久孝 教授 梶田 悦子 教授 前川 厚子 教授 平井 眞理 教授 浅野 みどり 教授 奈良間 美保 教授 玉腰 浩司 教授	SAKAKIBARA, Hisataka KAJITA, Etsuko MAEKAWA, Atsuko HIRAI, Makoto ASANO, Midori NARAMA, Miho TAMAKOSHI, Koji

(2014年5月1日現在)

## 医療技術学専攻

人体の情報を、マクロ的見地とミクロ的見地からアプローチし、理解する研究者および教育者の育成を第一に考え、さらに医学物理士をはじめとする高度な専門職業人育成も図る。

入学定員 [前期] 20名 [後期] 7名

前期課程	後期課程	担当教授	
<b>医用量子科学講座</b> Radiological Sciences	<b>医用量子科学講座</b> Radiological Sciences	小寺 吉衛 教授 島本 佳寿広 教授 石樽 信人 教授 池田 充 教授 加藤 克彦 教授 磯田 治夫 教授 山本 誠一 教授 今井 國治 教授	KODERA, Yoshie SHIMAMOTO, Kazuhiro ISHIGURE, Nobuhito IKEDA, Mitsuru KATO, Katsuhiko ISODA, Haruo YAMAMOTO, Seiichi IMAI, Kuniharu
<b>病態解析学講座</b> Pathophysiological Laboratory Sciences	<b>病態解析学講座</b> Pathophysiological Laboratory Sciences	村手 隆 教授 小嶋 哲人 教授 涌澤 伸哉 教授 川部 勤 教授 近藤 高明 教授 長坂 徹郎 教授 永田 浩三 教授 石川 哲也 教授	MURATE, Takashi KOJIMA, Tetsuhito WAKUSAWA, Shinya KAWABE, Tsutomu KONDO, Takaaki NAGASAKA, Tetsuro NAGATA, Kozo ISHIKAWA, Tetsuya

(2014年5月1日現在)

## リハビリテーション療法学専攻

入学定員 [前期] 10名 [後期] 4名

変化する医療状況に十分対応できる研究者・高度職業人の育成を図る。さらに、さまざまな医療現場やほかの学問領域との連携など、多様で活力のある教育システムを作り、新しい研究領域を創設することも目指す。

前期課程	後期課程	担当教授	
理学療法学講座 Physical Therapy	理学療法学講座 Physical Therapy	河村 守雄 教授 鈴木 重行 教授 山田 純生 教授 亀高 諭 教授 内山 靖 教授	KAWAMURA, Morio SUZUKI, Shigeyuki YAMADA, Sumio KAMETAKA, Satoshi UCHIYAMA, Yasushi
作業療法学講座 Occupational Therapy	作業療法学講座 Occupational Therapy	鈴木 國文 教授 寶珠山 稔 教授 辛島 千恵子 教授 澤田 雄二 教授	SUZUKI, Kunihumi HOSHIYAMA, Minoru KARASHIMA, Chieko SAWADA, Yuji

(2014年5月1日現在)

医療技術科学を学問領域として確立し、その科学・技術・実践技術を教育・研究し、幅広い基礎と高度な専門知識および問題解決能力、人間性豊かな資質を備えた医療

技術者・教育者・研究者を育成することを目指す。

5専攻を有し、基礎から専門まで4年間一貫教育を行う。

## ● 組織

### 看護学専攻

Department of Nursing

入学定員	80名
------	-----

看護学専攻は、「人間・環境・健康・看護」について学習し、科学的な看護実践が推進できる看護師、保健師、助産師及び教育・研究者の育成を目的とする。

### 放射線技術科学専攻

Department of Radiological Technology

入学定員	40名
------	-----

放射線技術科学専攻は、急速に進歩する画像診断・放射線治療の現状に対応できる診療放射線技師を育成するとともに、専門領域の教育・研究者の育成を目的とする。

### 検査技術科学専攻

Department of Medical Technology

入学定員	40名
------	-----

検査技術科学専攻は、最新の検査に関する知識と技術を基礎にした問題解決能力を備えた臨床検査技師を育成するとともに、専門領域の教育・研究者の育成を目的とする。

### 理学療法学専攻

Department of Physical Therapy

入学定員	20名
------	-----

理学療法学専攻は、人の尊厳、障害の予防・回復、チーム医療、理学療法学の基礎構築、など幅広い知識と教養を身につけ、次代の医療・保健・福祉全般に貢献でき指導的役割を担うことができる理学療法士の育成を目的とする。

### 作業療法学専攻

Department of Occupational Therapy

入学定員	20名
------	-----

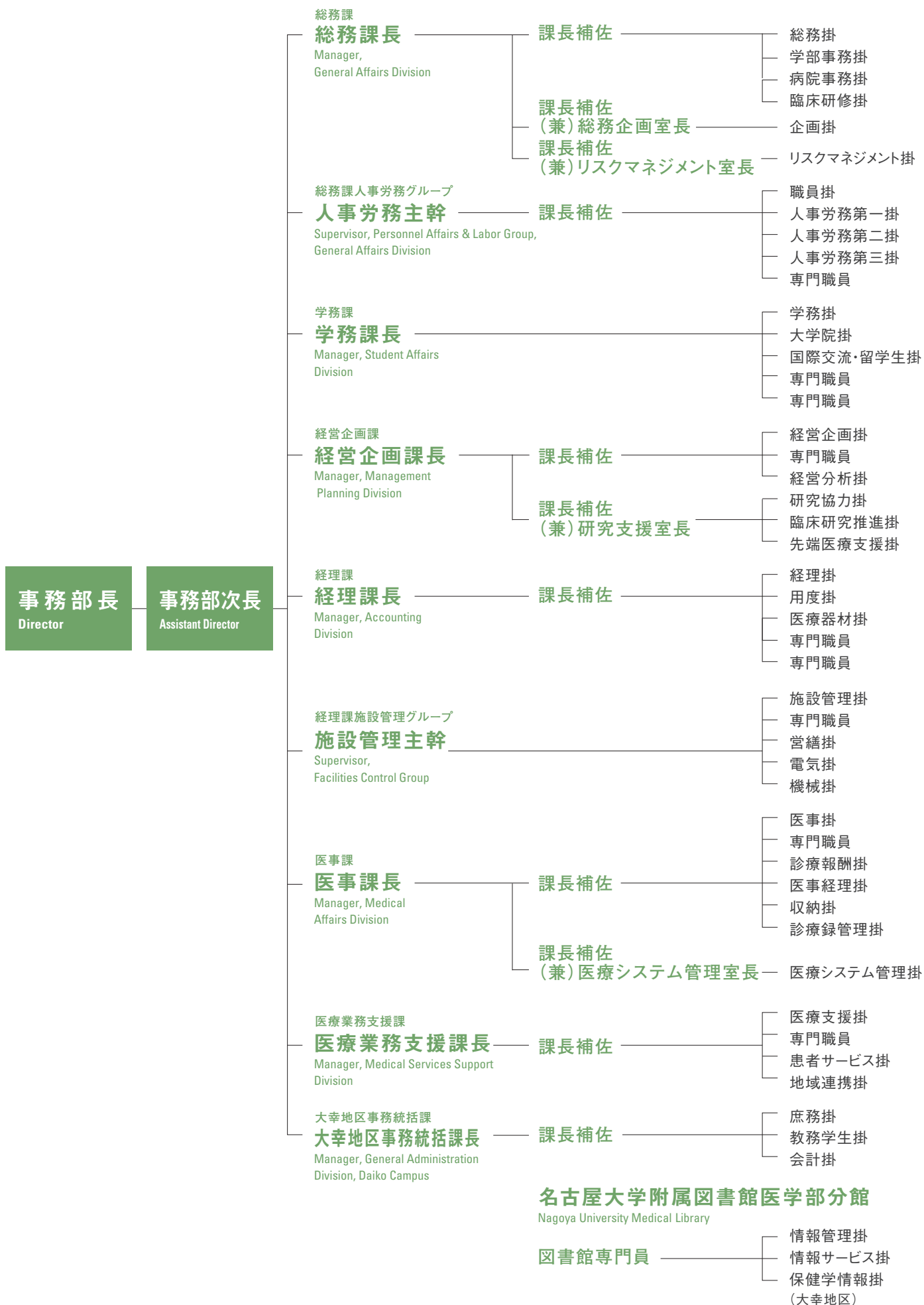
作業療法学専攻は、生命の倫理に基づき、作業療法対象者を理解し支援できる豊かな人間性をもち、科学的に研究・開発できる学問的要素を身につけ、探究心のある国際人として活動できる人材を養成、またこれらに関連する教育・研究の推進を目的とする。



# データ集

事務部組織図	56
職員数	57
学生定員および現員	58
大学院医学系研究科修了者数	60
医学部卒業生数	61
学位（医学博士）授与者数	61
外国人留学生・外国人研究員等	62
国際交流協定による派遣学生数および受入学生数	63
医学部・医学系研究科からの国別海外留学者数	64
名古屋大学附属図書館医学部分館	65
附属クリニカルシミュレーションセンター（NU-CSC）の使用状況	65
解剖体数	65
産学官連携に関するデータ 知的財産／共同研究・受託研究	66
科学研究費補助金の状況	68
ニュースリリース	69
鶴舞公開講座	72

# 事務部組織図



# 職員数

区分		大学院医学系研究科(鶴舞地区)	大学院医学系研究科(大幸地区)
教職員	教授 Professor	53 (8)	36 (1)
	准教授 Associate Professor	51 (14)	18 (1)
	講師 Lecturer	17 (14)	2 (1)
	助教 Assistant Professor	35 (55)	26 (2)
	助手 Research Associate	1	0
	研究員 Researcher	0 (9)	0
	教務職員 Education Associate	0	1
小計		157 (100)	83 (5)
教職員	事務系職員 Administrative Staff	168	
計		408 (105)	

[注] ( )は特任教員・寄附講座教員を外数で示す。

(2014年5月1日現在)

# 学生定員および現員

## 大学院医学系研究科

### [博士課程]

		入学定員	現員		
			男	女	合計
分子総合医学専攻 Program in Integrated Molecular Medicine	2年	—	1	4	5
	3年	52	54	15	69
	4年	52	44	22	66
小計		104	59	41	140
細胞情報医学専攻 Program in Cell Information Medicine	2年	—	5	2	7
	3年	43	32	11	43
	4年	43	26	13	39
小計		86	63	26	89
機能構築医学専攻 Program in Function Construction Medicine	2年	—	2	0	2
	3年	39	38	12	50
	4年	39	28	10	38
小計		78	68	22	90
健康社会医学専攻 Program in Health and Community Medicine	2年	—	1	0	1
	3年	27	10	9	19
	4年	27	13	16	29
小計		54	24	25	49
総合医学専攻※ Program in Integrated Medicine	1年	161	137	39	176
	2年	161	149	43	192
小計		322	286	82	368
計		644	500	196	736
大学院研究生		—	9	6	15

※2012年度秋入学者を含む。

(2014年4月1日現在)

### [卒直後コース]

	入学定員	現員		
		男	女	合計
1年	—	1	0	1
2年	—	1	0	1
3年	—	1	0	1
計	—	3	0	3

(2014年4月1日現在)

### [MD・PhDコース]

	入学定員	現員		
		男	女	合計
2年	—	0	1	1
計	—	0	1	1

(2014年4月1日現在)

### [博士課程(前期課程)]

		入学定員	現員		
			男	女	合計
看護学専攻 Program in Nursing	1年	18	8	9	17
	2年	18	4	18	22
医療技術学専攻 Program in Radiological and Medical Laboratory Sciences	1年	20	20	10	30
	2年	20	18	10	28
リハビリテーション療法学専攻 Program in Physical and Occupational Therapy	1年	10	8	6	14
	2年	10	11	5	16
計		96	69	58	127

(2014年4月1日現在)

## [博士課程(後期課程)]

		入学定員	現員		
			男	女	合計
看護学専攻 Program in Nursing	1年	6	2	4	6
	2年	6	0	6	6
	3年	6	3	22	25
医療技術学専攻 Program in Radiological and Medical Laboratory Sciences	1年	7	2	4	6
	2年	7	7	4	11
	3年	7	5	2	7
リハビリテーション療法学専攻 Program in Physical and Occupational Therapy	1年	4	3	3	6
	2年	4	3	2	5
	3年	4	5	2	7
計		51	30	49	79

(2014年4月1日現在)

## [修士課程]

		入学定員	現員		
			男	女	合計
医科学専攻 Program in Medical Science	1年	20	10	12	22
	2年	20	7	10	17
医科学専攻医療行政コース (Young Leaders' Program (YLP)) Program in Medical Science, Healthcare Administration Course (Young Leaders' Program (YLP))	1年(国費)	10	6	5	11
計		50	23	27	50

(2014年4月1日現在)

## 医学部 [医学科]

	入学定員	現員		
		男	女	合計
1年	107	82	29	111
2年	107	91	21	112
3年	112	90	28	118
4年	112	83	30	113
5年	112	91	17	108
6年	108	89	23	112
計	658	526	148	674
研究生等	—	36	13	49

(2014年4月1日現在)

## [保健学科]

	入学定員	現員		
		男	女	合計
1年	200	57	154	211
2年	206	57	156	213
3年	226	64	166	230
4年	226	68	168	236
計	858	246	644	890
研究生等	—	0	0	0

(2014年4月1日現在)

# 大学院医学系研究科修了者数

## [博士課程] \*満期退学者は除く。短期修了者を含む。

専攻	修了者数 [平成25年度]
分子総合医学専攻 Program in Integrated Molecular Medicine	15
細胞情報医学専攻 Program in Cell Information Medicine	15
機能構築医学専攻 Program in Function Construction Medicine	22
健康社会医学専攻 Program in Health and Community Medicine	16
計	68

(2014年3月31日現在)

## [博士課程(前期課程)] \*短期修了者を含む。

専攻	修了者数 [平成25年度]
看護学専攻 Program in Nursing	15
医療技術学専攻 Program in Radiological and Medical Laboratory Sciences	39
リハビリテーション療法学専攻 Program in Physical and Occupational Therapy	17
計	71

(2014年3月31日現在)

## [博士課程(後期課程)] \*満期退学者は除く。短期修了者を含む。

専攻	修了者数 [平成25年度]
看護学専攻 Program in Nursing	3
医療技術学専攻 Program in Radiological and Medical Laboratory Sciences	2
リハビリテーション療法学専攻 Program in Physical and Occupational Therapy	3
計	8

(2014年3月31日現在)

## [修士課程]

### ●修了者数

専攻	修了者数 [平成25年度]
医科学専攻 Program in Medical Science	18 (11)

[注] ( )はYoung Leaders' Program (YLP) 修了者を外数で示す。

(2014年3月31日現在)

### ●修了者の進路

進学者	就職			その他
	官庁	民間企業等	医療機関	
7	3	6	4	2 (11)

[注] ( )はYoung Leaders' Program (YLP) 修了者を外数で示す。

(2014年3月31日現在)

# 医学部卒業生数

## [卒業生数]

学校名		期間	卒業生数
愛知医学校	Aichi Medical School	1881(明治14)年10月～1903(明治36)年6月	1,082
愛知県立医学専門学校	Aichi Prefectural Medical College	1903(明治36)年7月～1920(大正12)年6月	1,967
愛知医科大学	Aichi Medical College	1920(大正9)年10月～1931(昭和6)年4月	427
名古屋医科大学	Nagoya Medical College	1931(昭和6)年5月～1939(昭和14)年3月	695
名古屋帝国大学医学部	Nagoya Imperial University School of Medicine	1939(昭和14)年4月～1947(昭和22)年9月	749
名古屋帝国大学附属医学専門部※	Nagoya Imperial University Medical College	1944(昭和19)年4月～1950(昭和25)年3月	744
名古屋大学医学部(旧制)	Nagoya University School of Medicine (Under Old Educational System)	1947(昭和22)年10月～1954(昭和29)年3月	688
名古屋大学医学部	Nagoya University School of Medicine	1949(昭和24)年5月～2014(平成26)年3月	8,386 (5,771)
医学科	School of Medicine		
保健学科	School of Health Sciences		
計			14,738

※1947(昭和22)年10月 名古屋大学附属医学専門部と改称

## [2013(平成25)年度の医学部卒業生数]

			卒業生数
名古屋大学医学部	医学科	School of Medicine	101
Nagoya University School of Medicine	保健学科	School of Health Sciences	225
計			326

(2014年3月31日現在)

# 学位(医学博士)授与者数

## [学位授与者数]

区分	学位授与者数	
	平成24年度	累計
課程博士 Graduates of Doctor's Course	127	3,015
論文博士 Doctor's Approved by Thesis	19	3,401
計	146	6,416

[注]「累計」は1960(昭和35)年4月1日以降の学位授与者数

(2014年3月31日現在)

## [旧制学位授与者数]

期間	学位授与者数
自 1926(大正15)年1月23日 至 1960(昭和35)年3月31日	3,709

# 外国人留学生・外国人研究員等

## [外国人留学生数]

身分		国費		私費		合計
		男	女	男	女	
学部学生	Undergraduate Students	0	0	3	4	7
研究生	Research Students	0	0	0	0	0
特別聴講学生	Special Undergraduate Students	0	0	0	0	0
大学院学生	Graduate Students in Doctor's Course	21	16	29	33	99
大学院研究生	Research Students in Doctor's Course	1	0	4	2	7
大学院特別研究学生	Special Graduate Students in Doctor's Course	0	0	1	1	2
特別研究学生	Special Research Students	0	0	0	0	0
日本語・日本文化研修生※	Japanese Studies Students	0	0	0	0	0
計		22	16	37	40	115
外国人研究員等	Visiting Research Fellow, etc.	61				

※日本語・日本文化研修生は、留学生センター所属であるが、研修期間(4月～9月)終了後は、医学系研究科大学院研究生となる。

(2014年5月1日現在)

## [国別外国人留学生数・外国人研究員等数]

国名	外国人留学生(2014年5月1日現在)	外国人研究員等[平成25年度]	
中国	China	69	13
韓国	Republic of Korea	2	0
台湾	Taiwan	3	0
インドネシア	Indonesia	1	1
カンボジア	Cambodia	1	0
タイ	Thailand	0	15
ネパール	Nepal	2	0
バングラデシュ	Bangladesh	18	0
フィリピン	Philippines	0	3
ベトナム	Vietnam	0	3
マレーシア	Malaysia	2	1
ミャンマー	Myanmar	1	0
モンゴル	Mongolia	1	0
ラオス	Laos	2	0
アフガニスタン	Afghanistan	3	0
イラク	Iraq	0	1
エジプト	Egypt	3	2
エチオピア	Ethiopia	1	0
南アフリカ	South Africa	0	1
パラオ	Palau	0	2
アメリカ合衆国	USA	0	6
チリ	Chile	0	1
ペルー	Peru	1	0
イギリス	U.K.	0	1
イタリア	Italy	0	3
オランダ	Netherlands	0	1
ギリシャ	Greece	2	2
キルギス	Kyrgyz Republic	2	0
セルビア	Serbia	0	2
デンマーク	Denmark	0	2
ドイツ	Germany	1	1
合計	115	61	



# 国際交流協定による派遣学生数および受入学生数

	国名	大学名	締結年月日	派遣学生数	受入学生数
協定校	アメリカ 合衆国 (6機関) USA	ノースカロライナ大学チャペルヒル校医学部 The University of North Carolina, School of Medicine at Chapel Hill	1989年7月3日	0	1
		ハーバード大学医学部 Harvard University Medical School	1995年11月28日	0	0
		チューレン大学医学部 Tulane University, School of Medicine	1995年11月29日	4	5
		ペンシルベニア大学医学部 University of Pennsylvania, School of Medicine	1997年3月26日	2	0
		デューク大学医学部 Duke University, School of Medicine	2002年12月20日	1	0
		ジョンズホプキンス大学医学部 Johns Hopkins University, School of Medicine	2003年1月1日	2	1
	ポーランド (1機関) Poland	グダニスク医学系大学医学部 Medical University of Gdanisk	1995年7月31日	2	0
	ドイツ (1機関) Germany	フライブルグ大学医学部 Albert-Ludwigs-University Freiburg, School of Medicine	2000年4月5日	2	1
	オーストラリア (1機関) Australia	アデレード大学 University of Adelaide	2004年10月22日	2	0
	イギリス (1機関) U.K.	ウォーリック大学医学部 Warwick University, Medical School	2005年7月22日	2	0
	オーストリア (1機関) Austria	ウィーン医科大学 The Medical University of Vienna	2005年7月12日	2	0
	モンゴル (1機関) Mongolia	モンゴル健康科学大学 Health Sciences University of Mongolia	2004年8月26日	0	0
	中国 (2機関) China	上海交通大学 Shanghai Jiao Tong University	2009年12月1日	2	4
		北京大学医学部 Peking University Health Science Center	2010年11月10日	0	2
	台湾 (1機関) Taiwan	国立台湾大学医学部 National Taiwan University College of Medicine	2011年6月7日	0	2
	韓国 (1機関) Republic of Korea	延世大学校原州医科大学 Yonsei University Wonju College of Medicine	2012年3月29日	24	2
	ベトナム (1機関) Vietnam	フエ医科大学 Hue University of Medicine and Pharmacy	2012年10月29日	0	0
	シンガポール (1機関) Singapore	シンガポール国立大学医学部看護学科 Alice Lee Centre for Nursing Studies Yong Loo Lin School of Medicine National University of Singapore	2013年02月25日	6	4
	スウェーデン (1機関) Sweden	ルンド大学医学部 Lund University, Faculty of Medicine	2014年03月19日	0	0
	その他	北アメリカ North America			19
南アメリカ South America				0	0
ヨーロッパ Europe				13	4
アジア Asia				25	2
オセアニア Oceania				2	0
アフリカ Africa				0	0
計				110	30

# 医学部・医学系研究科からの国別海外留学者数

国名	州	留学者数	
アメリカ合衆国	USA		
	ケンタッキー	Kentucky	1
	ニューヨーク	New York	1
	ノースカロライナ	North Carolina	2
	ペンシルバニア	Pennsylvania	4
	マサチューセッツ	Massachusetts	3
	ミシガン	Michigan	2
	メリーランド	Maryland	3
	ルイジアナ	Louisiana	4
	アメリカその他	Others	6
イギリス	U.K.	3	
イタリア	Italy	3	
インドネシア	Indonesia	2	
オーストラリア	Australia	4	
オーストリア	Austria	2	
カナダ	Canada	2	
韓国	Republic of Korea	26	
カンボジア	Cambodia	3	
シンガポール	Singapore	6	
スイス	Switzerland	2	
台湾	Taiwan	5	
チェコ	Czech Republic	1	
中国	China	4	
ドイツ	Germany	4	
バングラデシュ	Bangladesh	1	
フィリピン	Philippines	4	
フランス	France	1	
ベトナム	Vietnam	2	
ポーランド	Poland	2	
ポルトガル	Portugal	2	
マレーシア	Malaysia	1	
ミャンマー	Myanmar	1	
モンゴル	Mongolia	2	
ロシア	Russia	1	
計		110	

[注] 派遣学生を含む。

(2013[平成25]年度)

# 名古屋大学附属図書館医学部分館 (保健学図書室を含む)

## [蔵書数]

	蔵書数		
	医学部分館	保健学図書館	計
和書 Japanese Books	69,440	39,367	108,807
洋書 Foreign Books	88,062	7,192	95,254
計	157,502	46,559	204,061

(2014年4月1日現在)

## [雑誌種類数]

	種類数		
	医学部分館	保健学図書館	計
和雑誌 Japanese Journals	1,950	871	2,821
洋雑誌 Foreign Journals	2,415	179	2,594
計	4,365	1,050	5,415

(2014年4月1日現在)

## [オープンアクセス・ジャーナル] (2月、8月web公開)

### Nagoya Journal of Medical Science

▶ [http://www.med.nagoya-u.ac.jp/medlib/nagoya\\_j\\_med\\_sci/](http://www.med.nagoya-u.ac.jp/medlib/nagoya_j_med_sci/)

# 附属クリニカルシミュレーションセンター (NU-CSC) の使用状況

## [各部屋の使用状況]

部屋名	使用件数 [平成25年度]
スキルラボ	466
診察シミュレーション室	848
顕微鏡ラボ	173
画像診断ラボ	73
高度スキルシミュレーション室	1,032
その他 (物品貸出)	168
計	2,760

## [所属ごとの使用状況]

所属名	使用件数 [平成25年度]
医学科	1,173
保健学科	63
大学院	62
センター (※1)	64
病院 (※2)	1,320
その他	78
計	2,760

※1 : クリニカル、卒後臨床研修センター、地域医療支援センターを含む

※2 : 薬剤部を含む

# 解剖体数

年度	系統解剖体 (献体数)	病理解剖体
2005 (平成17) 年度	39	36
2006 (平成18) 年度	49	42
2007 (平成19) 年度	52	33
2008 (平成20) 年度	45	38
2009 (平成21) 年度	64	32
2010 (平成22) 年度	49	29
2011 (平成23) 年度	42	24
2012 (平成24) 年度	57	39
2013 (平成25) 年度	54	26

# 産学官連携に関するデータ 知的財産/共同研究・受託研究

名古屋大学では2004年の大学法人化以降、大学で創出された知的財産を、研究者個人ではなく大学組織全体で保有し、より効率的な活用につなげるよう努めている。大学院医学系研究科も全学の方針にそって、知的財産

を広く社会で役立つシーズとして発信し、組織の総合力をもって活用に取り組んでいる。また、企業との連携も研究者個人の活動から、大学としての組織的な活動へと変化し総合的に推進されている。

## [特許]

### ● 特許一覧（登録／大学院医学系研究科・医学部附属病院／国内単独）

発明の名称	登録日	登録番号	発明者
肉眼で見やすい細胞診マーカー	1997/3/11	2615427	吉田 泰彦
ミッドカインの受容体、ミッドカイン依存性の細胞生存を抑制する方法およびミッドカイン依存性の細胞生存を促進する方法	2005/7/8	3694731	村松 喬／村松 壽子
四肢用陽圧チャンバー	2009/1/9	4243647	平田 仁 他
皮膚組織改善材およびその製造方法	2009/1/23	4247333	蛭沢 克己／加藤 竜司／各務 秀明／上田 実
創外固定器	2009/5/15	4304321	平田 仁／建部 将広／篠原 孝明
急性腎障害及び予後推定用バイオマーカー並びにその用途	2009/12/18	4423375	門松 健治／湯沢 由紀夫／林 宏樹／松尾 清一 他
siRNA を用いたヒト血管内皮増殖因子の発現の強い抑制。	2010/3/26	4480125	武井 佳史／門松 健治／村松 喬
光干渉断層装置	2010/4/30	4501007	伊藤 逸毅
保存細胞管理システム	2010/6/11	4528584	各務 秀明／上田 実 他
機械受容（Stretch Activated）チャンネルの活性化抑制剤	2011/1/7	4654432	成瀬 恵治／曾我部 正博
細胞組織磁気信号検出装置	2011/1/21	4665105	中山 晋介／内山 剛 他
IgA 腎症関連抗体の検出法	2011/3/18	4701391	鳥居 啓三／太田 美智男／岡本 陽
培養スケジュール管理装置及び培養スケジュール管理プログラム	2011/7/29	4787964	加藤 竜司／各務 秀明／上田 実／蛭沢 克己
癌転移抑制用組成物	2011/8/12	4797159	高橋 隆／柳澤 聖
ヒト歯髄細胞からの象牙質再生方法	2011/12/16	4884678	各務 秀明／上田 実 他
神経障害の予防又は治療剤	2012/2/24	4929446	門松 健治／張 皓倩／村松 喬／内村 健治
脂肪組織由来間葉系幹細胞を含有する、勃起不全又は尿意障害用の細胞製剤	2012/3/23	4953335	山本 徳則／後藤 百万／小出 直史／武井 佳史／松川 宣久／舟橋 康人
抗ポリグルタミン病剤	2012/3/30	4956737	祖父江 元／足立 弘明／和座 雅浩
組織形成用複合材料およびその製造方法	2012/4/27	4977854	上田 実／水野 裕和／各務 秀明／岡田 邦彦／宇佐見 一公
再生医療骨組成物	2012/5/11	4982841	上田 実／山田 陽一／伊藤 憲治／吉見 涼子
皮膚組織改善材及びその利用	2012/5/11	4982865	蛭沢 克己／上田 実／各務 秀明／岡田 邦彦／加藤 竜司／マズリザム アブドゥル ラティフ
移植材料及び骨質改善剤	2012/6/1	5002816	上田 実／山田 陽一／八島 明弘／高後 友之

発明の名称	登録日	登録番号	発明者
脂肪組織由来間葉系幹細胞を含有する、前立腺癌治療用細胞製剤	2012/7/13	5035737	山本 徳則／小出 直史／武井 佳史 ／後藤 百万
アクチン結合タンパク質の細胞運動関連疾患への利用	2012/8/3	5051600	高橋 雅英／榎本 篤／室原 豊明
白髪発症モデル動物、白髪発症モデル動物の樹立方法、白髪発症モデル動物の継代方法、白髪発症の研究方法、白髪発症制御手段のスクリーニング方法、白髪発症制御用組成物	2012/9/14	5086074	加藤 昌志
ヒト悪性卵巣胚細胞腫瘍の細胞株の樹立方法、ヒト悪性卵巣胚細胞腫瘍細胞株、及びその利用	2012/10/5	5098013	吉川 史隆／柴田 清住
アクチン結合タンパク質の細胞運動関連疾患への利用	2012/10/5	5098027	高橋 雅英／榎本 篤／室原 豊明
肝癌治療又は予防用医薬組成物	2012/10/12	5103608	中尾 昭公／榎間 勝利
エレクトロポレーション装置の制御方法	2013/1/18	5176104	武井 佳史／藤島 達也／村松 喬／ 門松 健治
腹腔内腫瘍病変の治療又は予防用の医薬組成物	2013/2/1	5187676	那波 明宏／鎌倉 真紀／吉川 史隆 ／西山 幸廣
ウイルス検出用オリゴヌクレオチドセット、EBV、CMV及びHHV-6の分析方法及び検出キット	2013/3/1	5205609	木村 宏／西山 幸廣／和田 かおる ／久保田 直美
脂肪組織由来多分化能幹細胞を含有する細胞製剤	2013/4/12	5240715	尾崎 武徳／安田 香／丸山 彰一／ 山本 徳則／松尾 清一／北川 泰雄 ／後藤 百万
急性骨髄性白血病治療剤の候補物質を同定する方法	2013/4/19	5246776	直江 知樹／早川 文彦／岡本 充功
歯周軟組織再生用組成物及びその製造方法	2013/5/10	5263826	山田 陽一／上田 実／岡部 一登／ 高後 友之
抗肥満薬及びその利用	2013/5/31	5278864	有馬 寛／佐藤 郁子／大磯 ユタカ
凝集体形成性タンパク質分解用の発現コンストラクト、及び凝集体形成性タンパク質が凝集体を形成することを抑制する方法	2013/6/14	5286523	祖父江 元／山田 新一／丹羽 淳一
微小管破壊剤及びそれを含有する癌細胞増殖抑制剤	2013/6/14	5289310	石黒 和博／後藤 秀実／安藤 貴文
悪性黒色腫抗原の発現上昇剤及びその用途	2013/11/1	5397692	河野 通浩／富田 靖
腹膜透析下での腹膜障害モデル動物及びその利用	2013/11/1	5397845	水野 正司／伊藤 恭彦
歯髄幹細胞を用いた自家又は同種移植用組成物及びその用途	2013/11/15	5408578	上田 実／山田 陽一／中村 さやか／ 伊藤 憲治／西野 雄大
ウイルス感染細胞の検出・同定法及びキット	2013/12/13	5429679	木村 宏／西山 幸廣
間葉系幹細胞およびその生産方法	2013/12/13	5429755	鳥橋 茂子／蜷川 菜々
デノボ癌を自然発症するモデル動物及びその用途	2014/2/28	5481619	加藤 昌志他

(2014年4月1日現在)

# 産学官連携に関するデータ 知的財産/共同研究・受託研究

## ● 特許等件数 (登録)

区分	国内		外国		合計
	単独	共同	単独	共同	
大学院医学系研究科	38	29	19	6	92
医学部附属病院	5	6	4	2	17
計	43	35	23	8	109

(2014年4月1日現在)

## [共同研究]

### ● 民間等との共同研究実施件数および受入金額

年度	医学科		保健学科	
	件数	受入金額 (千円)	件数	受入金額 (千円)
平成 20 年度	38	74,205	12	14,764
平成 21 年度	43	74,653	5	3,023
平成 22 年度	38	76,357	12	5,433
平成 23 年度	41	73,288	11	7,569
平成 24 年度	40	117,904	12	13,211
平成 25 年度	42	133,199	8	13,637

※研究員料・産学連携費(間接経費)を含む

## [受託研究]

### ● 受託研究経費(政府出資資金を含む) 受入件数および受入金額

年度	医学科		保健学科	
	件数	受入金額 (千円)	件数	受入金額 (千円)
平成 20 年度	38	376,149	5	3,680
平成 21 年度	65	514,376	10	4,240
平成 22 年度	68	416,558	7	11,769
平成 23 年度	69	811,457	11	23,568
平成 24 年度	76	747,212	14	27,699
平成 25 年度	71	830,862	13	44,782

※間接経費を含む

共同研究・受託研究について詳しくは

▶ <http://www.med.nagoya-u.ac.jp/medical/1916/1917/index.html>

〈問い合わせ先等・担当事務〉

医学部・医学系研究科 / 事務部経営企画課研究協力掛

TEL : 052-744-2429 FAX : 052-744-2881

E-mail : iga-kenkyu@adm.nagoya-u.ac.jp

# 科学研究費補助金の状況

## [平成25年度外部資金の状況]

研究種目	件数	金額 (千円)	研究種目	件数	金額 (千円)
新学術領域研究 (研究領域提案型)	38	618,969	若手研究 (A)	3	34,710
基盤研究 (S)	2	32,110	若手研究 (B) (学術研究助成基金助成金)	87	153,790
基盤研究 (A)	16	144,820	研究活動スタート支援	9	12,610
基盤研究 (B)	73	261,456	奨励研究	3	1,800
基盤研究 (C)	1	260	特別研究員奨励費	10	10,100
基盤研究 (C) (学術研究助成基金助成金)	194	267,211	合計	488	1,623,350
挑戦的萌芽研究 (学術研究助成基金助成金)	52	85,514			

\*間接経費、研究分担者による受入件数・金額を含む

# ニュースリリース

名古屋大学大学院医学系研究科では、最新の研究成果の中から特に社会的影響力が強いと考えるものを選

び、ニュースソースとして各メディアに報告している。期間内では、以下の13件をリリースした。

## [一覧]

	日付	研究内容	主たる研究者《所属》※
1	2013年5月10日	皮膚の遺伝病、網状肢端色素沈着症 (reticulate acropigmentation of Kitamura) の原因遺伝子を解明 ～日本人によって70年前に初めて報告された病気の病因を明らかにし、治療法開発を目指す～	河野通浩講師、秋山真志教授《皮膚病態学》
2	2013年5月22日	汎発性膿疱性乾癬の病因の解明	杉浦一充准教授、秋山真志教授《皮膚病態学》
3	2013年7月8日	1. 若年性骨髄単球性白血病の新規原因遺伝子を発見 2. 骨髄異形成症候群の白血病化の原因遺伝子異常を発見	小島勢二教授《小児科学》 ※京都大学、東京大学医科学研究所附属ヒトゲノム解析センター、米国 クリーブランド・クリニックとの共同研究
4	2013年7月19日	新たなマウス肥満抑制遺伝子 MRAP2 の発見	浅井真人特任講師《腫瘍病理学》 ※米国ハーバード大学、英国ケンブリッジ大学との共同研究
5	2013年8月5日	脂肪細胞はアスベストによる中皮腫発症に促進的に作用する ～予防法・治療法開発への期待～	豊國伸哉教授、周珊瑚 (大学院生)《生体反応病理学》
6	2013年9月11日	経口鉄キレート剤の予防的投与により中皮腫の組織学的悪性度が低下する ～アスベスト曝露後の中皮腫予防法の確立に向けて～	豊國伸哉教授、永井裕崇客員研究員《生体反応病理学》
7	2013年9月22日	神経幹細胞の「渋滞」防止の意義としくみを発見 ～大脳皮質形成不全の病因の解明と、ヒト脳進化の理解に期待～	宮田卓樹教授、岡本麻友美特任助教《細胞生物学》
8	2013年12月4日	乗り物酔い OTC 薬メクロジンのオフラベル効能による低身長症の治療	石黒直樹教授、鬼頭浩史准教授、松下雅樹 (大学院生)《整形外科学》、大野欽司教授《神経遺伝情報学》
9	2013年12月18日	プラズマ照射溶液が抗がん剤耐性卵巣がん細胞にも効果を発揮 ～抗がん剤が効かない再発がんに対する治療へ期待～	吉川史隆教授、梶山広明准教授、《産婦人科学》 ※名古屋大学プラズマ医療科学国際イノベーションセンターとの共同研究
10	2014年1月7日	血管老化制御という新たな機序で脂質代謝関連蛋白が糖尿病性動脈硬化を予防	葛谷雅文教授、林登志雄講師《地域在宅医療学・老年科学》 ※富山大学、米国カリフォルニア大学ロサンゼルス校との共同研究
11	2014年2月4日	オートファジー膜の脂質分布をナノレベルで解明	藤本豊士教授《分子細胞学》 ※東京工業大学との共同研究
12	2014年2月6日	経母体的分子状水素投与は、子宮内の虚血再灌流による胎児海馬障害を軽減する	豊國伸哉教授《生体反応病理学》、吉川史隆教授、小谷友美講師、眞野由紀雄助教《産婦人科学》、大野欽司教授《神経遺伝情報学》、山田清文教授《医療薬学》
13	2014年2月19日	大脳新皮質の神経回路網を構築するための基本メカニズムを解明 ～神経発達障害やてんかんの病態解明に期待～	貝淵弘三教授、難波隆志特任助教《神経情報薬理学》 ※愛知医科大学などとの共同研究

※ニュースリリース時の職名・所属を記載

## [解説]

①

**皮膚の遺伝病、網状肢端色素沈着症 (reticulate acropigmentation of Kitamura) の原因遺伝子を解明 ～日本人によって70年前に初めて報告された病気の病因を明らかにし、治療法開発を目指す～**

70年前に日本人皮膚科医により報告された原因不明の皮膚の遺伝病、網状肢端色素沈着症（北村）が蛋白分解酵素であるADAM10の遺伝子変異により発症することを明らかにした。手法として、次世代シーケンサーによるヒトの全タンパク質の遺伝情報を解読するエクソーム解析を用いた。現在は遺伝子診断および治療法開発を進めている。

掲載誌 Human Molecular Genetics

②

**汎発性膿疱性乾癬の病因の解明**

汎発性膿疱性乾癬の8割以上の患者の病因が、インターロイキン36受容体阻害因子の欠損であることを解明した。本研究の結果から、今まで病因不明であった汎発性膿疱性乾癬の病因的診断を正確に行うことができるようになり、汎発性膿疱性乾癬の大半の患者に対してはインターロイキン36受容体を分子標的とした新しい原因療法の開発が期待される。

掲載誌 Journal of Investigative Dermatology

③

**1. 若年性骨髄単球性白血病の新規原因遺伝子を発見  
2. 骨髄異形成症候群の白血病化の原因遺伝子異常を発見**

1. 乳幼児期にみられる予後不良な白血病である若年性骨髄単球性白血病の新規原因遺伝子が発見した。次世代遺伝子解析装置を用い、本症にみられる遺伝子異常の全体像を解明した結果、とりわけ、SETBP1という新規に発見された遺伝子変異が従来知られていたがんの発症に関するRAS経路に関連する遺伝子変異に加わると、死亡率が高まることを発見した。この結果は、本症の診断法の確立と治療法の選択に役に立つほか、新規薬剤の開発につながることを期待できる。  
2. 高速ゲノムシーケンス技術を用いたゲノム解析を行い、SETBP1という遺伝子の変異がMDSから白血病への進行に関わっていることをつきとめた。MDSはしばしば急速に病気が進行する急性骨髄性白血病へ移行することから、今回の研究成果により、この変異をマーカーとして、より早期にMDSから白血病へ進行するハイリスクの患者を予測、及びSETBP1を治療標的とした新たな創薬に期待がもたれる。

掲載誌 Nature Genetics

④

**新たなマウス肥満抑制遺伝子 MRAP2 の発見**

ノックアウトマウスを用いた研究からMRAP2という遺伝子が肥満に深く関わることを発見した。

このMRAP2ノックアウトマウスは、野生型と全く同じ量のエサを食べても太るのに、運動不足でも栄養吸収過剰でも無いということである。この研究で得られた結果から、肥満には時として遺伝が大きな影響を与えていることが判明した。

掲載誌 Science

⑤

**脂肪細胞はアスベストによる中皮腫発症に促進的に作用する～予防法・治療法開発への期待～**

アスベスト繊維（石綿）による中皮腫発がん過程において、脂肪細胞がアスベストによる中皮腫発がんに促進的に関与することを発見した。脂肪細胞は、増加したMCP-1と減少したアディポネクチンによりマクロファージを呼び寄せ炎症促進的に作用すると同時に、分泌されたMCP-1は中皮細胞や中皮腫細胞にも直接作用して、その増殖や細胞の移動を促進している。今回の成果により、アスベスト曝露による中皮腫の予防法や治療法の開発が期待できる。

掲載誌 Carcinogenesis

⑥

**経口鉄キレート剤の予防的投与により中皮腫の組織学的悪性度が低下する ～アスベスト曝露後の中皮腫予防法の確立に向けて～**

アスベストをラット腹腔内に投与して1カ月後から経口鉄キレート剤を約2年間投薬することにより、中皮腫の組織型悪性度が低下することを明らかにした。これにより、アスベスト曝露後の中皮腫予防法の確立に向けた取り組みが期待できる。

掲載誌 Cancer Prevention Research

⑦

**神経幹細胞の「渋滞」防止の意義としくみを発見 ～大脳皮質形成不全の病因の解明と、ヒト脳進化の理解に期待～**

大脳皮質の神経幹細胞が「細胞づくり」に加えて、脳の三次元的な構造を効率的に「組み立てる」ことにも大きく貢献するという新しい役割を明らかにした。神経幹細胞は、自身の細長く伸びたかたちを利用して渋滞が起きないように適切な動きをするが、この「長いかたち」「動き」を実験的に奪うと、過剰混雑が起き、やがて脳の組織構造がひどく乱れた。この研究成果は、ヒトの先天性脳形成不全の病因解明のきっかけとなると期待され、また、ヒトの脳がどのように進化してきたかを研究する基礎的なヒントとしての意義もある。

掲載誌 Nature Neuroscience



## [解説]

⑧

### 乗り物酔い OTC 薬メクロジンのオフラベル効能による低身長症の治療

著しい低身長を呈する難病・軟骨無形成症に対する根本的治療薬の開発を目的とした既存薬のスクリーニングにより、乗り物酔い止め薬としての OTC 医薬品であるメクロジンに骨伸張促進作用があることを見出した。軟骨無形成症は骨の成長抑制因子である FGFR3 が過剰に活性化することにより発症し、脊柱管狭窄症や大後頭孔狭窄などの重篤な合併症も生じる。今後、動物実験により FGFR3 抑制作用としてのメクロジンの至適投与量を決定することにより、早期の臨床治験に結びつく可能性がある。

掲載誌 PLOS ONE

⑨

### プラズマ照射溶液が抗がん剤耐性卵巣がん細胞にも効果を発揮 ～抗がん剤が効かない再発がんに対する治療へ期待！～

名古屋大学プラズマ医療科学国際イノベーションセンターとの医工連携の共同研究により独自に開発した非平衡大気圧プラズマ源により発生させたプラズマを照射した溶液が、抗がん剤耐性となったヒト卵巣がん細胞に対し、オリジナル細胞と同様に抗腫瘍効果を示すことを培養細胞並びに動物モデルにおいて明らかにした。再発した卵巣がんは、抗がん剤が効かない場合が多いが、本成果により、新たな治療法への可能性を示した。

掲載誌 PLOS ONE

⑩

### 血管老化制御という新たな機序で脂質代謝関連蛋白が糖尿病性動脈硬化を予防

肝臓 X 受容体 (LXR) の活性化が血管内皮細胞の老化を制御し、糖尿病モデルラットの動脈硬化症進展を抑制、更に抗糖尿病薬メトホルミンの併用にて副作用である脂肪肝発生も回避できる可能性を見出した。本成果は、肝臓 X 受容体が脂質代謝系遺伝子 SREBP-1 を誘導し細胞老化抑制という新たな機序で糖尿病性動脈硬化症を制御する可能性、メトホルミン等との薬物併用による臨床応用の可能性を示唆する。

掲載誌 Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America

⑪

### オートファジー膜の脂質分布をナノレベルで解明

急速凍結・凍結切断レプリカ標識法という新たな電子顕微鏡技術を用いることにより、PI3P がオートファジーの際に形成されるオートファゴソーム膜の両面に非対称性に存在すること、哺乳類細胞と酵母細胞では PI3P の分布が大きく異なることを見出した。オートファゴソーム膜が細胞の中で作られる仕組みについては不明な点が多く残されており、本結果はその謎を解明する上で重要な手がかりになると考えられる。

掲載誌 Nature Communications

⑫

### 経母体的分子状水素投与は、子宮内の虚血再灌流による胎児海馬障害を軽減する

胎児脳障害の一因として、酸化ストレスの関与が考えられている。近年、分子状水素は、抗酸化作用を持つと報告されており、本研究では、子宮内での酸化ストレスに起因する胎児脳障害に、経母体的分子状水素投与が有効であることを動物実験で証明した。これは、未だ確立された予防・治療がない胎児脳障害において、新たな治療戦略となることが期待される。

掲載誌 Free Radical Biology and Medicine

⑬

### 大脳新皮質の神経回路網を構築するための基本メカニズムを解明 ～神経発達障害やてんかんの病態解明に期待～

未熟な神経細胞が他の細胞と接触するために必要な細胞接着分子「TAG-1」の発現を実験的に抑制することにより、神経細胞の軸索形成に異常が生じることを見出した。この結果から、生体内で神経細胞がどのように効率よく軸索を形成するのが初めて明らかにされた。神経回路形成の異常が神経発達障害やてんかんの一因であることが示唆されていることから、異常な神経回路形成がどのようにして起こるのかを理解するうえで重要な情報を提供すると考えられる。

掲載誌 Neuron

### ニュースリリースについての詳細は

▶ <http://www.med.nagoya-u.ac.jp/medical/1796/index.html>

# 鶴舞公開講座

医学部医学科では、2005(平成17)年度から市民向け公開講座として、社会的に関心が高く、日常で役立つ話題をテーマに、鶴舞公開講座を附属病院との共催で年一回開催している。

20代から80代までと幅広い年齢層の市民に参加いただき、開催を重ねるごとにリピーターとして参加する方

も増えてきている。

毎回、講演を熱心に聴くだけでなく活発な質疑応答が行われるなど、市民の方々の関心が高いことが窺われる。

鶴舞公開講座は、医学部医学科・附属病院と市民との貴重な交流の場となっており、地域連携、社会貢献の機会として重要な役割を果たしている。

## [鶴舞公開講座の歩み]

年度	講座名	開催日	参加者数
2006年(平成18)年度	ここまで来ていたがん治療：少し安心、もっと勉強	10月29日	85名
2007年(平成19)年度	もうすぐ手に届く治療ことはじめ：そんなことができるの!	10月27日	65名
2008年(平成20)年度	高齢化の波を乗り越えろ—君が老いれば、僕も老いる—	10月4日	約130名
2009年(平成21)年度	心も体も健やかに—オイオイ、といわれなかったために—	11月21日	約200名
2010年(平成22)年度	食事! もっと身近な健康法	11月20日	約230名

## [2011(平成23)年度の公開講座]

※職名は講演時のもの

### 体質とは何だろう?

#### 薬効や生活習慣病との係わり合い

〈開催日〉2011年11月19日

〈参加者数〉約180名

人の体質は千差万別であり、体質の違いは「遺伝によるもの」と「環境によるもの」とに分かれ、最近になって科学の進歩により、遺伝的な体質について多くのことが分かってきた。そこで、「遺伝的体質」をキーワードに3人の講師が講演した。

『ここまでわかった遺伝的体質』濱嶋信之教授／『薬剤の効果と遺伝的体質—薬のはたらきをきめる個性とは?』石川和宏薬剤部副薬剤部長／『生活習慣と遺伝的体質—どっちが強い?』濱田洋司寄附講座准教授

## [2012(平成24)年度の公開講座]

### 疾病予防:

#### 健やかな老いのために

〈開催日〉2012年11月17日

〈参加者数〉約150名

長寿社会における高齢者の疾病やがんなどの身近な話題から、開発途上国をはじめとした世界の医療の現状まで、幅広い内容で3人の講師が講演した。

『長寿社会における高齢者の疾病・虚弱予防』葛谷雅文教授／『長寿社会におけるがん予防』濱嶋信之教授／『世界の健康を考える』青山温子教授

## [2013(平成25)年度の公開講座]

### いつまでも健康で

#### 快適な生活を送る秘訣

〈開催日〉2013年11月23日

〈参加者数〉約260名

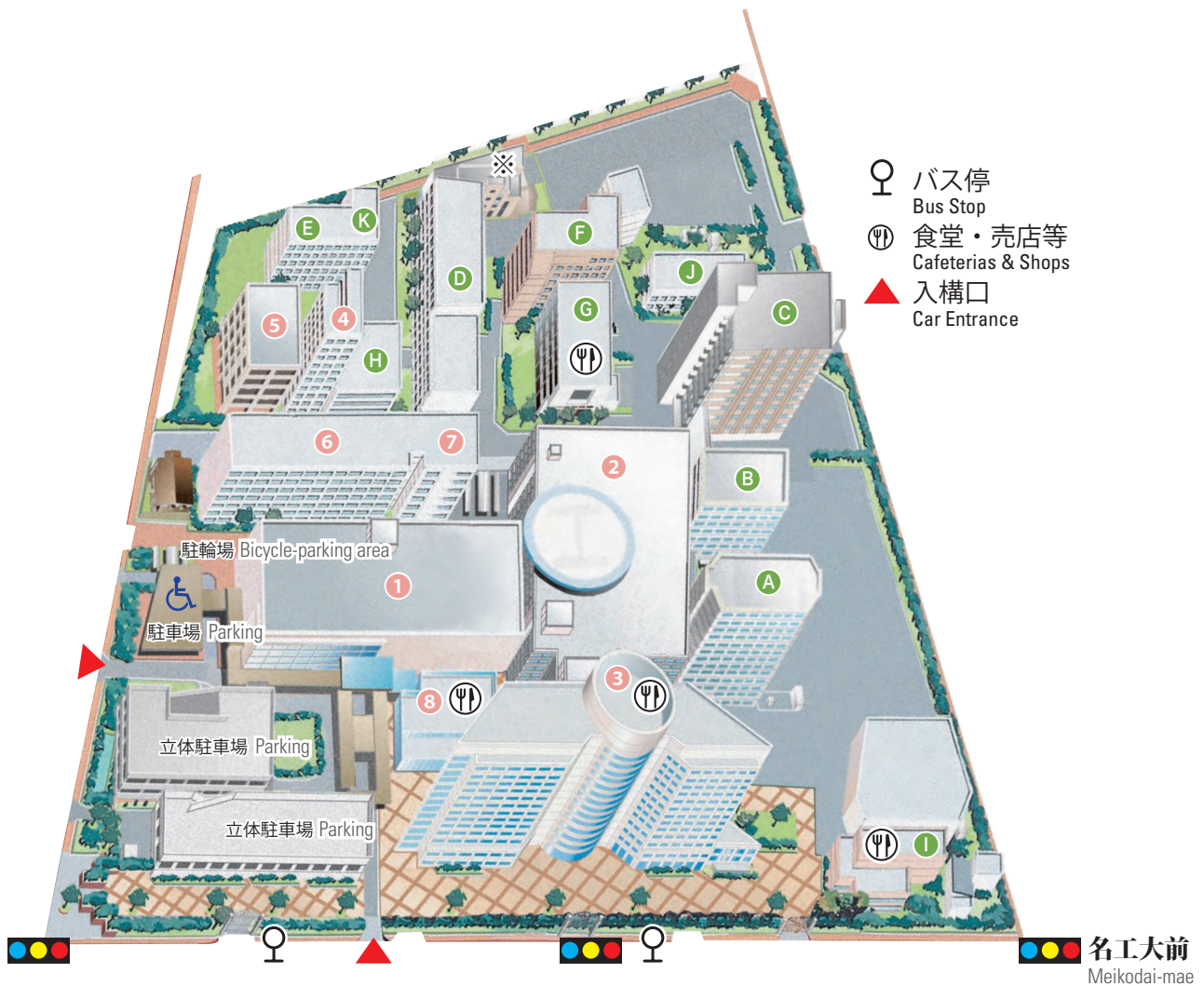
高齢社会を迎え核家族化が進行し、高齢者が高齢者を介護する「老老介護」という新たな社会的問題も発生する中で、健康に長生きで幸せな生活を送るための秘訣について、3人の講師が講演した。

『高齢者の体力を維持するにはコツがある』山田純生教授／『ロコモティブシンドローム(ロコモ)って何?~永く元気に生きるための知識と心がけ~』村本明生医師／『その食べ方、間違っています。健康長寿に向けた栄養の考え方』葛谷雅文教授

# 施設とアクセス

鶴舞キャンパス配置図	74
建物各階案内図	75
大幸キャンパス配置図	76
土地及び建物	77
アクセス	78

# 鶴舞キャンパス配置図



医学部附属病院  
University Hospital

医学部・医学系研究科  
Graduate School of Medicine/School of Medicine

- ① 外来棟  
Outpatient Building
- ② 中央診療棟  
Central Consultation Building
- ③ 病棟  
Ward Building
- ④ 看護師宿舎 A 棟  
Residence for Nurses A
- ⑤ 看護師宿舎 B 棟  
Residence for Nurses B
- ⑥ (旧)西病棟  
Old Ward Building West
- ⑦ (旧)東病棟  
Old Ward Building East
- ⑧ オアシスキューブ(福祉施設)  
Oasis Cube (welfare facility)

※ドナルド・マクドナルド・ハウスなごや  
RMH Nagoya

- A 医系研究棟1号館  
Medical Science Research Building 1
- B 医系研究棟2号館  
Medical Science Research Building 2
- C 医系研究棟3号館  
Medical Science Research Building 3
- D 基礎研究棟(講義棟)  
Basic Medical Research Building
- E 基礎研究棟別館  
Basic Medical Research Building Annex
- F 附属医学教育研究支援センター(実験動物部門)  
Center for Promotion of Medical Research and Education (Experimental Animals Division)
- G 附属図書館・学生食堂  
Medical Library / Co-op Cafeteria
- H 福祉施設  
Welfare Facility
- I 鶴友会館  
Kakuyu Kaikan (Alumni Hall)
- J アイソトープ総合センター分館  
Radioisotope Research Center
- K 解剖教育施設保存棟  
Human Anatomy Laboratory

総務課	<span style="color: red;">②</span> 中央診療棟	4F・7F
人事労務グループ	<span style="color: red;">①</span> 外来棟	4F
学務課	<span style="color: green;">D</span> 基礎研究棟(講義棟)	1F
経営企画課	<span style="color: red;">①</span> 外来棟	4F
経理課	<span style="color: red;">①</span> 外来棟	4F

施設管理グループ	<span style="color: red;">①</span> 外来棟	4F
医事課	<span style="color: red;">①</span> 外来棟	1F
医療業務支援課	<span style="color: red;">②</span> 中央診療棟	2F
病歴管理室	<span style="color: red;">①</span> 外来棟	4F

(2014年4月1日現在)

## [大学院医学系研究科・医学部 建物各階案内図] (2014年7月1日現在)

13F	皮膚科／形成外科／ 小児外科			
12F	整形外科／リウマチ科／ 耳鼻いんこう科			
11F	眼科／歯科口腔外科			
10F	精神科／脳神経外科		先端医療・臨床研究支援センター	
9F	消化器内科／腎臓内科／ 神経内科		寄附講座／プロジェクトスペース	
8F	放射線科／臨床感染制御学／ 病態医療学(協力)／ 化学療法部		寄附講座	
7F	血液内科／循環器内科／ 臓器病態診断学	国際保健医療学・公衆衛生学／ 環境労働衛生学／ トキシコゲノミクス／分析機器部門	総合医薬学領域／ トキシコゲノミクス／ 生物統計学／プロジェクトスペース	
6F	呼吸器内科／ 糖尿病・内分泌内科／ 老年内科	予防医学／生理学第一／ 生理学第二	ライブラリ／プロジェクトスペース	
5F	産科婦人科／小児科	免疫学／腫瘍生物学／ 分子腫瘍学	神経疾患・腫瘍分子医学研究センター／ 医学教育研究支援センター (分析機器部門)	
4F	泌尿器科／麻酔科	薬理学／細菌学／ 神経遺伝情報学	医学教育研究支援センター (分析機器部門)	第3講義室／第4講義室
3F	消化器外科一／血管外科／ 心臓外科／呼吸器外科	生化学第一／生化学第二／ ウイルス学	組織／病理実習室／ 解剖教育施設	代謝病態学寄附講座／移植免疫学寄附講座／ 腎不全総合治療学寄附講座／生化学第二／ 循環器内科／第1講義室／第2講義室／ゼミ室
2F	消化器外科二／移植外科／ 乳腺・内分泌外科／ 救急・集中治療医学	病理学第一／病理学第二／ 解剖学第一	解剖教育施設	分子心血管病学(興和)寄附講座／ 健康栄養医学／分子病理学／ゼミ室／ラウンジ
1F	総合診療科／薬剤部／ 生物統計学／ コンビニエンスストア	解剖学第二／解剖学第三／ 法医学／分析機器部門	アイトープ総合センター分館	国際連携室／ Young Leaders' Program (YLP)／ 会議室／更衣室／事務部
B1F	会議室／手の外科		アイトープ総合センター分館／ 設備室	
	医系研究棟1号館	医系研究棟2号館	医系研究棟3号館(予定)	基礎研究棟(講義棟)

# 大幸キャンパス配置図



- ① 医学部保健学科南館  
School of Health Sciences (South Building)
- ② 医学部保健学科本館  
School of Health Sciences (Main Building)
- ③ 体育館  
Gymnasium
- ④ 研究棟  
Research Building
- ⑤ エネルギーセンター  
Energy Center
- ⑥ 厚生会館  
Student Hall
- ⑦ 医学部保健学科別館  
School of Health Sciences (Annex)
- ⑧ 弓道場  
Kyudo (Japanese Archery) Hall
- ⑨ 医学部保健学科東館  
School of Health Sciences (East Building)
- ⑩ リサーチーズビレッジ大幸  
Researchers Village Daiko
- ⑪ 硬式庭球場  
Tennis Court
- ⑫ 運動場  
Ground

- ♀ バス停  
Bus Stop
- ☺ 食堂・売店等  
Cafeterias & Shops
- ▲ 入構口  
Car Entrance
- ▲ 自転車専用入構口  
Entrance  
歩行者

# 土地及び建物

## 鶴舞キャンパス

面積(土地) 89,137m<sup>2</sup> 位置 名古屋市昭和区鶴舞町65番地 建物 [建面積] 36,726m<sup>2</sup> [延面積] 215,227m<sup>2</sup>

名称	構造	建面積(m <sup>2</sup> )	延面積(m <sup>2</sup> )
① 外来棟 Outpatient Building	RC4	5,309	19,446
② 中央診療棟 Central Consultation Building	SRC7-2	5,881	43,612
③ 病棟 Ward Building	S14-2	4,721	52,297
④ 看護師宿舎A棟 Residence for Nurses A	SRC10	675	6,158
⑤ 看護師宿舎B棟 Residence for Nurses B	RC6	563	2,741
⑥ (旧)西病棟 Old Ward Building West	RC6-1	1,584	14,525
⑦ (旧)東病棟 Old Ward Building East	((旧)西病棟に含む)		
⑧ オアシスクューブ(福利施設) Oasis Cube (Welfare Facility)	S1	604	595
⑨ A 医系研究棟1号館 Medical Science Research Building 1	S13-2	1,493	20,875
⑩ B 医系研究棟2号館 Medical Science Research Building 2	RC7	1,515	10,300
⑪ C 医系研究棟3号館 Medical Science Research Building 3	SRC10-1	1,474	13,088
⑫ D 基礎研究棟(講義棟) Basic Medical Research Building	RC4-1	1,651	6,585
⑬ E 基礎研究棟別館 Basic Medical Research Building Annex	RC5	695	3,158
⑭ F 附属医学教育研究支援センター (実験動物部門) Center for Promotion of Medical Research and Education (Experimental Animals Division)	RC7-1	889	6,488
⑮ G 附属図書館・学生食堂 Medical Library / Co-op Cafeteria	RC4-1	974	3,138
⑯ H 福利施設 Welfare Facility	RC3	308	760
⑰ I 鶴友会館 Kakuyu Kaikan (Alumni Hall)	RC3	550	1,354
⑱ J アイソトープ総合センター分館 Radioisotope Research Center	RC4・RC2	695	1,803
⑲ K 解剖教育施設保存棟 Human Anatomy Laboratory	RC1	301	301
その他 Others		6,844	8,003
計		35,252	202,139

(2014年7月1日現在)

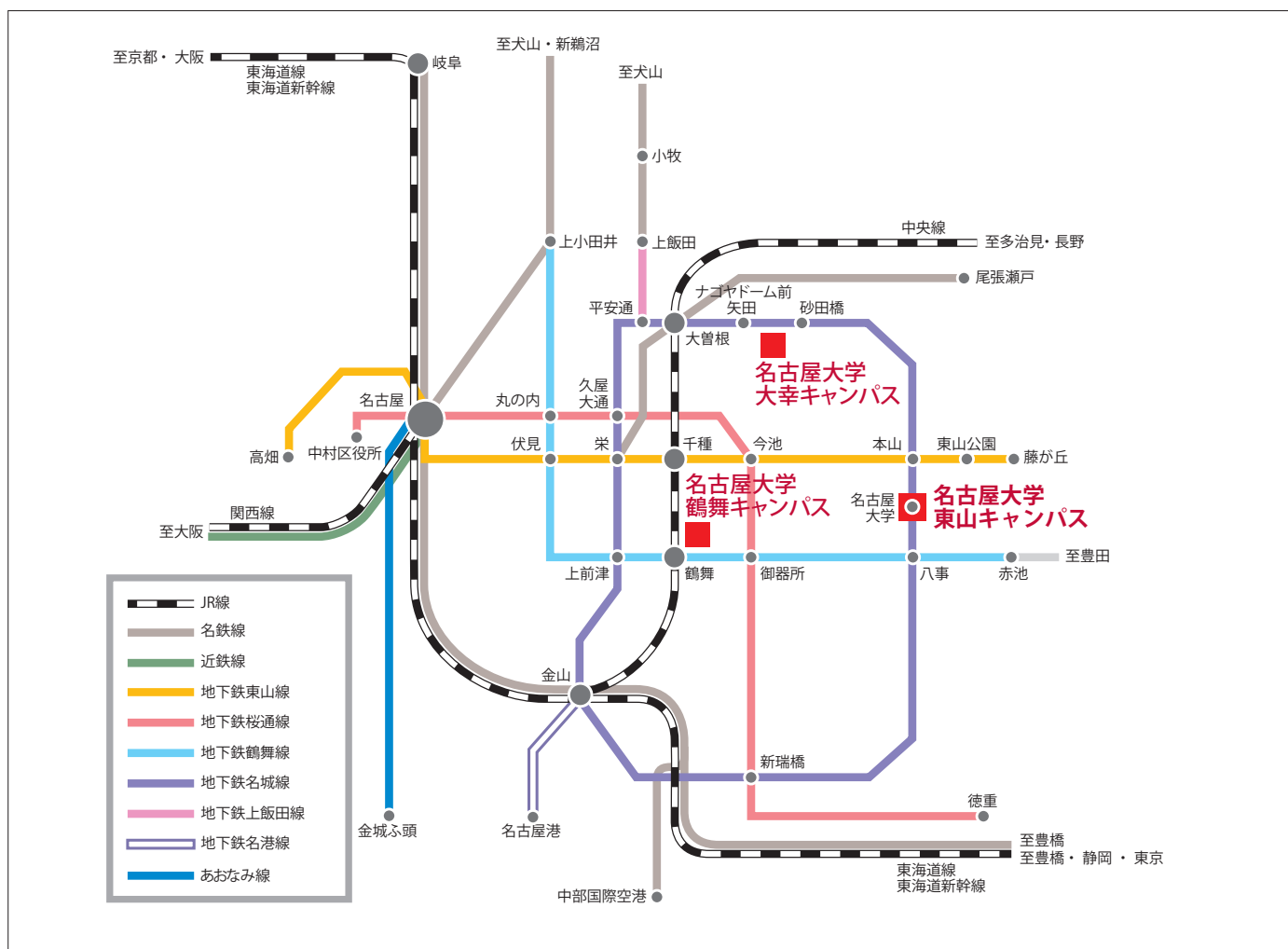
## 大幸キャンパス

面積(土地) 48,463m<sup>2</sup> 位置 名古屋市東区大幸南1丁目1-20 建物 [建面積] 10,470m<sup>2</sup> [延面積] 28,429m<sup>2</sup>

名称	構造	建面積(m <sup>2</sup> )	延面積(m <sup>2</sup> )
① 医学部保健学科南館 School of Health Sciences (South Building)	RC4	3,021	8,067
② 医学部保健学科本館 School of Health Sciences (Main Building)	RC5	1,414	5,835
③ 体育館 Gymnasium	SRC1	1,369	1,369
④ 研究棟 Research Building	RC1	353	353
⑤ エネルギーセンター Energy Center	RC2	606	894
⑥ 厚生会館 Student Hall	RC2	678	1,338
⑦ 医学部保健学科別館 School of Health Sciences (Annex)	RC4	579	2,431
⑧ 弓道場 Kyudo (Japanese Archery) Hall		88	88
⑨ 医学部保健学科東館 School of Health Sciences (East Building)	RC4	843	3,331
⑩ リサーチャーズビレッジ大幸 Researchers Village DAIKO	RC3	280	720
⑪ 硬式庭球場 Tennis Court		—	—
⑫ 運動場 Ground		—	—
その他 Others		1,239	4,003
計		10,470	28,429

(2014年4月1日現在)

# アクセス



## 鶴舞キャンパス [交通]

- JR中央本線「鶴舞駅」(名大病院口側)下車徒歩3分。
- 地下鉄鶴舞線「鶴舞駅」下車徒歩8分。
- 市バス「栄」から栄⑱系統「妙見町」行きで「名大病院」下車。

## 大幸キャンパス [交通]

- JR中央本線「大曽根駅」(北口)下車徒歩15分。
- 地下鉄名城線「ナゴヤドーム前矢田駅」下車徒歩10分。又は、「砂田橋駅」下車徒歩7分。
- 市バス「名古屋駅」「大曽根」から名駅⑮系統「砂田橋」行きで「大幸三丁目」下車。
- ガイドウェイバス「ナゴヤドーム前矢田駅」下車徒歩10分。又は、「砂田橋駅」下車徒歩7分。

## 東山キャンパス [交通]

- 地下鉄名城線「名古屋大学駅」下車。
- 市バス「栄」から栄⑯・⑰系統「名古屋大学」行きで「名古屋大学」下車。



発行年月／2014年7月

企画編集

名古屋大学 医学部・大学院医学系研究科

総務課 総務掛

TEL 052-744-2228



## 名古屋大学 医学部・大学院医学系研究科

[鶴舞地区] 〒466-8550 名古屋市昭和区鶴舞町 65 番地

TEL (052) 741-2111 FAX (052) 744-2785

<http://www.med.nagoya-u.ac.jp/>

[大幸地区] 〒461-8673 名古屋市東区大幸南 1 丁目 1-20

TEL (052) 719-1504 FAX (052) 719-1506

<http://health.met.nagoya-u.ac.jp/>